





松島湾鳥瞰図



松島湾鳥瞰図

白 翠

東北大学ヨット部50年史

発刊にあたって

東北大学ヨット部五十周年記念号の発刊にあたり、白翠会会員各位が、各界の指導的立場に立つ有為の人材として、それぞれ社会の発展に多大の貢献をされていることに深い敬意を表し、あわせて母校ヨット部に対する日頃の絶大な物心両面のご協力に対し、心より感謝を申し上げます。

東北大学ヨット部は、東北の地に初めてヨットを浮かべて以来、全国レベルレースでの数々の入賞を果たし、昭和三十三年にはインカレ本大会において総合優勝に輝き、全国大学の頂点に立つという歴史をもつ部であります。また、これまで東北水域のヨット活動を育成し支える、大きな原動力となっておりました。東北大学学友会体育部には、現在三十八の部が名を連ねておりますが、このような輝かしい歴史と伝統のある部は数少ないと思います。

さて、現在の東北大学学友会体育部の活動状況をみてみますと、残念乍ら全般的に不本意な状況にあるといえます。ヨット部の場合、個人戦ではいくつかの優れた成績を挙げ活躍しながらも、団体戦では惜しくも敗れ、層の厚さに欠けるという点に問題があるように思えます。一方で、東北大学に入学してくる学生の実態は、高校時代に運動部で活躍したことのある学生が極めてまれであるという事実であります。大学入試までの偏差値による序列化が進む状況では、大学入学後に初めて文武両道の実を発揮する機会に恵まれるという、まことに憂慮すべき現実があります。

本誌記載の「五十年史」によれば、現在はまさしく市民スポーツ化の時代であります。しかし、少なくとも東北大学の学生については、社会一般のスポーツレベルが向上しているのに反して、相対的にレベルが低下する状況を呈しております。このような状況を踏まえると、レース中心のいわばナンバーワンのみをひたすら目指すという運動部の在り方は、現実的には厳しいものがあると

東北大学ヨット部長

樋口 龍雄



いえましよう。大衆化した、市民スポーツ化の時代における、東北大学ヨット部の在り方がいま問われているともいえます。

ところで、自然の中でのスポーツという点で共通する運動部に山岳部があります。山岳部の目指すところは、未踏峰の峻険に挑み、他の人より一步でも早く山頂に足跡を印すことにありました。これはまさにレース中心の考え方で、ピークハンティングと呼ばれました。しかし、一九五三年イギリス遠征隊による世界最高峰のエベレスト登頂成功を契機として、ピークハンティングに代表されるレース中心の時代は終りをつげました。その後、より困難なルートを目指す、ルートハンティングの時代を経て、最近ではよりクリーンで独創的で多様な登り方が好まれるようになりました。例えば、資金にものをいわせて、大がかりなキャラバンを組織し、装備や資材をふんだんに使うやり方は、一昔前のものになりました。それよりは、酸素ポンプを使わないで八千米級の山に挑戦するとか、環境にやさしい登り方を工夫するとか、個性や創意が求められています。これはただひたすらナンバーワンのみを目指す在り方とは発想の異なるオンリーワンへの指向といえます。

もちろんヨットレースとのアナロジーが成り立つとは思いませんが、活力ある創意工夫や個性を発揮するオンリーワンを土台として、その中からいつの日か真のナンバーワンが輩出することを願っております。

先輩各位の築き上げてきた伝統を堅持しながら、無限の可能性と将来性を内在する現役の学生諸君が逞しく大成するよう、適切なご指導を頂きますよう重ねてお願い申し上げます。

会員各位の益々のご健勝とご発展を祈念してご挨拶と致します。

五十年史に寄せる

振返ると昭和21年春から62年9月までの41年余の間、ヨット部にそれぞれの立場で密着していたことになります。

創設期は部員達の無からの自力での創設で、好きなこととは言え、良く活力があったものだとの感が深く、良い部を創ったことに後輩は感謝せねばならないでしょう。松島パークホテル前での創立祝賀帆走にはヨレに乗ったモーニング姿の本多総長のほゞえましい写真が残っています。間もなく戦争の影が色濃くなり、僅かに海軍の援助で余命を保って終戦を迎えるわけですが、その頃塩釜市長をされた桜井市長（始めは塩釜商工会長）や栗野豊助県会議員（後に宮城県ヨット連盟会長になる）岩本正樹病院長、明治屋仙台支店長中井直二氏らに非常に世話になったと聞いております。これまでは松島近辺を主な活動基地にしていました。部員には千葉屋、尾張屋独まん、ニコ屋等はなつかしい場所として記憶にあるらしく、よく話しに出てきました。

進駐軍に松島パークホテルが接収され、ヨットと共に活動の基地が無くなったとき、福島部長はじめ、多くの部員と先輩達の努力で旧帝大の中では東大、京大とはほぼ同時に復活しました。それは昭和21年11月の琵琶湖での帝大戦が3大学のみであったことにもうかがえます。その後26年の全日本学生選手権、27年宮城国体を塩釜・松島で開催したことによってスナイプ艇が新しく増え、松島雄島前に県営の艇庫も建ち、ヨットの環境整備も急速に進み興隆に向かったことでした。これを契機に東北ヨット界の拡大発展の責務も東北大ヨット部に負わされることになりました。日本ヨット協会との関係、役員派遣、東北学院大はじめ他大学ヨット部の創立援助、仙台一高、ほかの高校ヨット部の援助、またこれに関連して、各種全国大会の地元開催の企画、運営など、現在の東北大ヨット部からは想像も出来ない程です。このときの福島部長は学校の授業以外はヨット界の世話に時間を使っていたように感じられました。今も先生の手

白翠会会長代行

島 田 平 八

書きのガリ版製の帆走指示書、役員任務指針、大会準備のフローシート、さらには手造りの東北ヨット協会旗などなどが思い浮かびます。

ヨットの置場所はパークホテル接收後県営艇庫の出来るまでは、松島五大堂と福浦島の間にあった西沢造船所の好意で置かせて貰い、マスト、セール、舵等の部品は自宅の土間に入れて貰いました。

その頃より松島の内海はカキ棚・のり棚の増加や遊覧船のために練習場所を花渚沖に移すことになり、それに伴って自前の艇庫が無い不便を感じるようになり、福島先生の骨折りで、インカレ優勝が圧力となって吉田浜に拠点を移すことになりました。

吉田浜時代になると東北学院大が実力を付けてインカレ出場も容易でなくなりました。それと共に何となく活力が減退に行ったようであります。一つには吉田浜沖の海面の複雑なうねりによると思われます。基本の練習には内海の方がよいのです。また高校ヨットの普及が東北大には不利になり、また高度成長期で卒業生の地元定着が少なく先輩との連帯感の希薄化もあったのではないのでしょうか。部員数の減少も気になることの一つであります。ともあれ過度の上下関係による締め付けの少ない、部員同志で部の運営議論して考え、部長、監督、コーチ等は必要なときにアドバイスしたり、学校の事務局と接渉したりする好ましい雰囲気は伝統として伝わっているように思います。先輩と現役は時にはギクシャクしたこともあるが割合にうまく運営されていたのではないのでしょうか。これも先輩連の海洋スポーツで培われた広い心のお蔭ではないのでしょうか。日本ヨット協会に行くと「名門隊」と冷やかされるのが唯一の片身の狭い思いをすることです。

50年の過去を振り返って、次なる世代への飛躍の礎を築くことを期待しています。

発刊に寄せて

食うや食わずの生活を送って来た我々貧乏族にとっては、ヨットなどというのは貴族階級の御趣味であって、全くの高嶺の花と思って来た。しかし、この頃の優雅さが大切に時代に入ってくると、何とはなしに、生まれかたの悪かった身の不運を嘆くことにもなる。

それ程にヨットには孤高の美しさを感じる。こんなことを書くと、「ヨットを知らないな」と云われそうである。しかし、何十人もが乗り組んで優勝盃を争う国際レースがあることも勿論承知はしているが、それでも、エレガントな孤高を思わせることは不思議である。

ヨットが欧州発祥であることを考えれば、当然かも知れないが、体力と技術と、そして叡智と勇気のすべてのバランスの下に行われる競技であり、その一つを欠くのは勿論、一寸不足するだけで敗退してしまうと云うことは正に近代スポーツの華たる資格充分ではないだろうか。

この理智的な美しさが、私などには耐られない美しさとして映るのだろうし、やれなかった欲求不満が、貴族趣味のように見えさせることになるのだろう。

案外なと云われそうだが、南の与那国島、波照間島、西表島、黒島、新城島、竹富島、石垣島、宮古島、沖縄本島、徳之島、奄美大島、諏訪之瀬島、屋久島、鬼界島、福江島、五島、平戸島が私の廻った南海の島々である。未だ残っているいくつかの島々にも夢を見ている。

同じような伊豆・小笠原の島々の他に、私は松島湾を練習基地とした、東北から北海道にかけての太平洋岸こそ少々荒々しい外航ヨットの適地になるのではないかと云って岩手県の方々にお薦めしたことがある。

東北大学学長

西澤潤一



いくつかの港を整備すれば、充分に避難港はとれるし、陸路を利用することも可能だから、万が一の場合に予定に障害が出ることもないであろう。これで更に北方四島が返還になれば、屈強な世界的なレース場にもなるのではないか。

そうなれば、我が東北大学のヨット部も二十一世紀に入れば、正に世界的な強力ヨット部に成長するのではないだろうか。千島列島から、アリューシャンを経て、アラスカを巡れば、これは正に世界的ヨットコースではないか。

素人の浅はかと笑って戴いて……と書くのが普通だけれど、笑わないで実現していただけないだろうか、と、図々しくお願いして、五十年史発刊のお祝いの言葉とさせていただきます。

ポーランドの湖沼で、ディンギー級かの艇を操らされて、あわや横転という技を披露し、あとの水洗いのシンドさを教えられた。幸いにして実践の憂き目には遭わなかった。そのためか、気仙沼で食べた戻り鰹の美味さを思い出しながらこの一文を終らせていただく。我惟ら、呆れ果てた奴である。





東北ヨット協会発会式記念帆走
昭和13年9月18日 松島湾





全日本学生ヨット選手権大会優勝
昭和33年7月29日 塩釜港外花淵





全日本学生ヨット選手権
昭和54年8月 菫蒲田沖



1



3



4



2



5

1. 12吋A級ディンギー
2. 18吋L級

3. 14吋オリンピックヨレ級
4. フィン級
5. 救助艇初代「翠」



6



9



7



10



8

6. スナイプ級 (ウッド艇)

7. スナイプ級 (FRP艇)

8. 初期470級

9. クルーザー「日高見」

10. 470級



50周年記念式典



記念碑

目 次

発刊にあたって	東北大学ヨット部長	樋口龍雄
五十年史に寄せる	白翠会会長代行	島田平八
発刊に寄せて	東北大学学長	西澤潤一

1. 五十年史

黎明期（～昭和12年）	22
創成期（昭和13年～昭和16年）	23
動乱期（昭和17年～昭和19年）	27
復活期（昭和20年～昭和23年）	39
発展期（昭和24年～昭和35年）	46
充実期（昭和36年～昭和43年）	56
模索期（昭和44年～昭和47年）	70
スポーツ化の時代（昭和48年～昭和54年）	76
市民スポーツの時代（昭和55年～）	81
外史（クルージングの航跡）	86
五十年史キーワード	92

2. 五十周年記念行事

記念式典	96
「東北ヨット発祥の地」記念碑建立	100

五十周年記念イベント	102
白翠会基金	104

3. 五十周年記念座談会

逞しき創部の頃（昭和13年～昭和20年）	106
混乱から復活に向て（昭和18年～昭和22年）	110
ヨット部＝東北ヨット協会の頃（昭和23年～昭和27年）	115

4. 五十年史に寄せて

オリンピックヨレ自叙伝	福島弘毅	120
私の今だから言える話の一つ	中尾 良	125
初めての全国大会	加納寛文	127
選手宣誓	平野節夫	131
風見糸と思い出	阿部てい子	132
昭和28年より昭和32年迄のヨット部を語る	高橋三男	134
あの日の松島湾	林 昭正	136
全日本学生個人選手権について	伊吹万里	139
A級ディンギーの思い出	山本健一	140
平成元年度主将として	柴田真一	141
エバモア号の活躍と白翠セーリングクラブ	片岡 克	142
私の「ヨット歴」思い出すまま	脇坂菊雄	144
魁との20年	入月一夫	147
感激のランドフォール	中井信行	151
社会人とヨット	菅原憲人	153

5. 五十年を支えてくれた人々

懐かしき円通院（天野文子さん）	156
ウッド艇の生みの親“小野寺さん”（小野寺篤さん）	160
沈の救世主“おっちゃん”（鈴木時夫さん）	163
七ヶ浜移転からのお付き合い“かすや”（糟屋商店）	169
藤沢の小母ちゃん	172
西沢オンツァン	172

資料編

歴代役員の記録	174
主要レースの記録	176
ヨット部の歌	181
戦後社会統計データ	183
年 表	187
名 簿	201
（付録）	
船系図	
東北大学ヨット部ゆかりの地	



航路標識No

1. 東北ヨット協会成立（「舵」昭和14年1月記事より）	24
2. 松島パークホテル	28
3. 憩いの宿	29
4. 手旗信号	31
5. バリ島の宗教行事に見る白翠（朝日新聞1990.6.24）	32
6. 銀座料亭“白翠”	33
7. 時変われど	37
8. 海ぶくれ	38
9. 白翠再刊の辞	42
10. ヨットマンの義務	45
11. 仙台二高（旧制二中）ヨット部出現するか？	48
12. バカヤロー	50
13. 女子部員の遠征	51
14. インカレ優勝後日談	54
15. 艇庫に住んで	58
16. 東大ヨット部員遭難に思う	60
17. 「日高見」号の由来記	67
18. すばらしきA級ディンギー	72
19. A級ディンギーの思い出	73
20. 先輩ニモ弱ク、後輩ニモ弱ク	75
21. 川越敬氏藍綬褒章叙勲	94
22. 五十周年記念行事にて作成したテレフォンカード	104
23. 戦中のヨット部（Ⅰ）	112
24. 昭和19年の日記から	113
25. 戦中のヨット部（Ⅱ）	114
26. チリ地震津波	167
27. 藤沢の小母ちゃん	172
28. 西沢オンツァン	172
29. 部歌の募集	181

1. 五十年史

東北大学ヨット部機関誌「白翠」の記念すべき第一号は、昭和17年8月に発行された。東北帝国大学ヨット倶楽部の結成から四年後である。以後、これまでに幾多の紆余曲折を経ながらも、昨年までに既に40号を累ね、東北大学ヨット部の歴史を語る上で大きな位置を占めるに至っている。黎明期の白翠1号、戦中の高まる軍靴の響きを聞きながら発行された2号、3号、そして、敗戦直後の混乱期に紙不足の中で復活した4号等々、当時の人以外なかなか目にする機会のないこれらに残された貴重な資料を辿りながら、50年に亘って連綿と引き継がれてきたヨット部の歩みを今振り返ってみる。

黎明期（～昭和12年）

昭和12年秋、東北帝国大学漕艇部員の中から松島湾にヨットを浮かべようという話が持ち上がった。

「秋風の吹く頃となって、漕艇部来年の方針を相談した折り、スカル・ベア程度の小艇をたくさん製作して理想的なクラブシステムを確立しようと言うことに決定し、ヨットをも若干加えることになった。」

（6号 保田虎之助15年卒）

当時の漕艇部は、一般学生に固定席艇を貸し出す以外にこれといった行事もなく、部員は各々勝手にエイト、フォア、スカルを楽しむ程度であった。

「発起者、渋谷五郎、友部洋、小松芳太郎、保田虎之助の四人何れも漕艇部関係者なり。名称を東北帝国大学ヨット倶楽部、部長を高須鶴三郎教授と決定す。」

（1号 保田虎之助15年卒）

4人のうちヨットの経験のあるのは、僅かに貸しヨットに乗った経験のある保田くらいで、他の3人は全くの未経験者であったという。

ヨット部50年の第一歩がまさに、踏みだされんとしていた。昭和12年11月の事である。

創 成 期

(昭和13年～昭和16年)

昭和13年、驚くべき1年となる。およそものの始まり、始めの1点は、曖昧模糊として見定め難いのが世の常と思われるが、現・東北大学ヨット部の始まりを問われれば、迷うことなくこの一年を指す事が出来よう。

それは始まると同時に原型においてはほぼ完成した。産まれると同時に立ち上がってスタスタと歩き始めたとも言える。それ程に眼を見張るべき一年であった。

「昭和13年1月、部員募集を行ふ。入会金四円、会費年額三円と暫定的に定む。約25名程集まる。3月上旬、日本軽量木材株式会社へ十四呎ヨレ一隻注文す。三月下旬、渋谷、友部、保田の三人上京、日本ヨット協会理事小沢吉太郎氏に面会種々助力を懇請、同氏の斡旋で岡本造船所を通じ十二呎デングー中古一隻購入す。尚その際渋谷、友部、横浜に合宿中の早大を訪い、練習艇に同乗させて貰い初めてヨットを味わう。」

(6号 保田虎之助15年卒)

この時購入した艇が松島湾に浮かんだ初めてのヨットであった。

「[朝雲]と[八州]は松島湾に初めて浮かんだヨットである。[朝雲]は横浜の日本軽

量木材株式会社でベルリン・オリンピックで使用された単一型を参考にしての野心作、付属一式を含んでの価格が三百五十円だったと記憶する。[八州]は前述の如き中古品で、修理、塗装しての価格が八十円。両艇の名付親は初代部長、理学部高須教授で、愛国行進曲からとられたもの。これら両艇の代金に横浜―仙台間の運賃(トラックにて運んだ)を含む約五百円の資金は、発起並びに賛同学生達の零細な会費と総長以下教授間を強引に持って歩いた奉賀帳の賜物であった。」

(6号 保田虎之助15年卒)

[朝雲]は十四フィート・オリンピア・ヨレ級、[八州]は十二フィートA級デングーであった。

こうして、部員も集まり、艇も準備が整って愈々東北帝国大学ヨット倶楽部が発足する。結成会は昭和十三年五月十四日、仙台市内のレストラン紅屋で高須部長ほか学生二十八名を集めて行なわれた。

「保田議長となりて部則を討議決定す。個人主義的クラブ気分を排撃し、一同創業の苦楽を共にせん事を要望するも部員間に熱意なし。」

(1号 保田虎之助15年卒)

当時は唯走るだけで、レースに対する知識も未だ十分ではなく、専らクルージングが主だったようである。こうしたなかで保田は勤務の関係で仙台にいた九大ヨット部OB勝屋弘知氏からヨット部本来の在り方についていろいろ聞く機会を得た。保田は彼を初代コーチとして招聘する。

「五月下旬、部員後藤洸君の紹介で勝屋弘知氏（当時産業組合中央金庫仙台支所勤務）を識る。同氏は元九大選手として活躍せし人、コーチと仰ぐことに決定。その意見を基礎として部員相集まりて艇数の増加及び練習方法につき寄々協議す。クルージング主義かレース主義か、この問題を中心として意見二分し



東北ヨット協会成立

—「舵」昭和14年1月号記事より—

今春四月創立の東北帝大ヨット倶楽部の努力により東北ヨット協会成立の準備中であつたが、九州帝大出身の勝屋弘知氏の主體と成れる松島灣ヨット倶楽部の設立を見、又學生委員の努力によってヂンギー六隻の新造に努力し、こゝに所有艇はヂンギー七隻、十四呎ヨレー一隻と成つた。かくて九月十八日、松島灣上に東北帝大總長本多光太郎閣下、東北振興副總裁金森太郎閣

下を初め在仙鹽の諸名士の出席の下に盛大な發會式を行ひ、午後から一般招待者を同乗せしめたが天下の名勝、松島に近代スポーツの花、ヨットを配することになり一層の詩情を加へた。

尚東北帝大ヨット倶楽部は來年度インターカレッジ目指して、勝屋氏コーチの下に練習中である。

現在の練習コースは松島町沖桂島との中間にあり遊覧モーターが往復する外には航行船はなく、又桂島によって外洋の大波は止められヨットコースとしては今まで行はれた横濱琵琶湖等に優るものと思はれる。協會では全日本大會の開催に對する具體的方策を考慮中であるといふ。

東北ヨット協会成立式でのヨレー「朝雲」に試乗の本多光太郎総長（昭和13年9月18日）



てまとまらず対立の気分に至る。しかし種々の事情により推して東北ヨット道確立のためには確固健全なる選手制度を採用せねばならぬと決し、役員制度の確立、艇の増加、東北ヨット協会の設立の三大方針を立て邁進する事となる。」（1号 保田虎之助15年卒）

このように、クラブが成立するために必要とする基本的要素、人、資金、物（艇）をわずか4ヶ月で揃え、続く4ヶ月で、活動を支える外周団体としての東北ヨット協会を設立し、それを母体として資金募集を一般社会に拡大して一気に艇を計8隻に増やす。

「東北ヨット協会の創立の意義は学内ヨット倶楽部の外周団体として比較的高い自由度にて活躍し得る点にして、これより一挙に艇数を増加し且又日本ヨット協会に対して東北水域の独立を認可せしめんと計画せるものなり、当初の予定として東北地方の諸事情から推して学校その他の団体にして、将来ヨットを保有し得る見込み殆どなければ、協会自身多数ヨットを所有し、これを加盟団体に貸し与える方針とし、まづ寄付の見込み額に応じて四隻及び八隻の十二呎ディンギーを建造せんと計画す。」（1号 保田虎之助15年卒）

しかし「朝雲」の支払いも未だ完了していない状態では注文を出しても造船所は応じてくれず、手付金だけでも何とかしようということで部員一同は金策に走り廻った。

「部員の帆走熱は更に高まり、新艇を更に揃えようということになり、その資金集めに夏休みを返上して当たることになりました。小生は貴家、小野両氏とともに塩釜、仙台地区を担当することになりました。これには大学の先生はじめ関係者、有力者による紹介によるもの、又興信所からの多額納税者のリスト等により予め依頼の手紙を出し、その後お宅へ参上寄付をお願いすると言う段取りでした。その中で建設会社の社長さんの家へ押し掛け、思いも掛けずディンギー一隻分の寄付をいただき喜びに飛び上がったこともありました。これらの中で一番印象に残っているのは土井晩翠先生（当時二高の先生）のお宅へうかがったときのことです。先生のお宅の玄関は武家屋敷風の立派なまえのものでした。案内をこいまずと奥様が出てこられ訪問の趣旨を伝えまして、暫らくして先生御自身衝立ての後から顔をだされ、「私はヨットは嫌いだよ」と一喝、小生等は無言で一礼してすごすごと帰ろうとしましたところ、これを追うように一言「奉賀帳を出しなさい」といわれました。小生等はあわてて引き返しうやうやしく奉賀帳を差し出しましたところ、当時としては全く多額の金額をすらすらと書いて下さり、本当に恐縮して引き下がりました。」

（1号 吉村 清15年卒）

部員たちの懸命の寄付集めの甲斐あって、この年の七月、岡本造船に対し六隻のA級ディンギーを発注することができた。六隻分の手付金を払ったあとは手元に一銭も残らなか

ったという。

六隻の新艇は九月に到着した。

その間、コーチ・部則・活動方針を定めて部の内的骨格も構築していく。この様な創立のための動きと平行して、勿論ヨットに乗るという実際の活動自体も始める。8月には第一回の東大戦を開催する。

わずか一年の間に、漁船・観光船しか知らなかった松島の海上で、白帆行き交うヨットレースがおこなわれる様になったのである。

創業者達の企画力、実行力、そしてこれを支える情熱は、まさに創成にふさわしいものであった。

今日に至る50年の歴史が、忽然と幕を上げた年であった。

この創立の勢いはとどまる事を知らぬかの

様に、翌14年3月下旬には学内体育連盟加盟、又、4月下旬には東北ヨット協会の日本ヨット協会への加盟と学内外に着々とその存在を認識せしめていく。

「—昭和14年—

3月下旬ここにヨット倶楽部を解散し、東北帝大体育連盟ヨット部となる。

4月23日 日本ヨット協会評議員会で終に正式加盟を認められる。」 (1号)

同年7月に、九州へ初遠征そして、帝大戦・全日本選手権に参加。翌15年7月には初めて本格的合宿を敢行し、西宮における全日本選手権、帝大戦に臨んでいる。又、その1ヶ月後の8月、神宮国体(第11回)にも名乗りを上げている。



今は見れない沈救風景

動 乱 期 (昭和17年～昭和19年)

昭和16年。活動開始4年目、早くも部に存続の危機が訪れた。

「3月上旬休暇前に矢吹、伊藤、学生部の松尾主事を訪ねた処『ヨット部は新編成より除外せよ』との声高く、ヨット部は消滅しなければならなくなるかも知れぬとの事にて、余りの突然さに驚愕の外はなかった。そしてその理由に到っては極めて曖昧にして、認識不足も甚だしいのには重ねて驚嘆せずにはいらなかった。即ちヨット部は一部少数の学生間のみに行われるブルジョア遊戯にして、部員数少なく且つ排他的で部員以外の者には使用させない、かゝる団体施設に大学の経費の一部を當て存在を許し置く理由なしと言うのである。」

(1号)

しかし、創成の気を継ぐ現役は強くこれに抵抗する。

「欧米に於けるヨット部は或はブルジョアの遊戯であるかも知れない。然し我国の学生ヨットはかゝる性質の物ではなく、質実剛健なる海洋スポーツであり、我々は一人でも多くがヨット部に入り、海に親しみ海を理解してもらいたく思っている旨主事に説明したが、

主事自身中々御納得が行かぬ様見受けられたので、早速保田先輩に願い更に主事に判りやすく説明してもらふ事にした。

保田氏の御陰で主事には大体我々の趣旨が御判りになった様であったが、今度はヨット部には所有艇なく、東北ヨット協会なる物から艇を借用して練習を行って居る、かゝる状態では独立の部として存在させる資格なしと言うのが、新体制審議会の意見であるとの事であった。松尾主事にはヨット部は成程艇を借りてやって居るが、かゝる状態にあるのは一人ヨット部のみならず乗馬部に自馬なく、水泳部にブールなし、之を以てヨット部の存立を云々する事は全然意味無き事であると説明したが、審議会は何うしても承知しないらしく、止むなく松尾主事、高須部長、保田先輩の三氏会見し、今後の処置に就き相談、艇はヨット部を再建する時には東北ヨット協会より寄付すべく新体制審議会へ申出づる事にした。」

(1号)

それでも、4月、新年度のフタを開けてみると新体制審議会にてヨット部のみが除かれていた。理由は、部史の浅い事・所有艇の無き事とされ、これにも強く反論するが、現に所有艇が無い事はどうしようもなかった。



松島パークホテル



大正二年、ドイツ人レルツの設計によって建築された、松島唯一の洋式ホテル。建面積三九六平方メートル、地下一階、地上三階、さらに塔屋に二階に亘る展望室があった。総工費四万七七三〇円。外観は日本式の杵拱組で勾欄と濡れ縁がつき、屋根は入母屋造りであった。終戦後米軍幹部の宿舎になったが、昭和四四年三月の出火により全焼した。

「而して部の活動を続行する為には漕艇部ヨット班として置き協会より艇の寄付願を総長宛提出の上は更に審議会へ掛けて部の成立をはかるより外にないと言う事になった。」

(1号)

つまり、昭和16年4月、この時点で「東北帝大体育連盟ヨット部」は制度上、一旦廃部させられ、漕艇部に組み込まれる事になったわけだ。これに対する部員とその周辺関係者の対応は素速かった。廃部の大きな理由とされた、所有艇の問題を速やかに処理し、6月には早や『帆走部』として独立する。

「協会の艇A161より166迄の6隻を大学へ寄付すべく協会理事に承認を乞い、協会長の名を以て総長宛寄付願を提出した。4月末審議会ありてヨット部復活は寄付受領の上行われる事となり、5月5日、報国会国防訓練部長会議には高須教授も客員として出席、松尾主事、高須部長の御骨折にて将来漕艇部より独立すべきものとして他の部同様、報国会費100円、設備費100円の予算を得た。」

6月上旬、寄附が受領されたので6月22日、総長、仙台海軍人事部長、報国会関係者、ヨット協会役員等を招待して、松島パークホテル前に於いて開部式を行い、此処に漸く漕艇

部より分離、独立して帆走部として国防訓練部の一つに加えられる事となった。」

(1号)

この様な最初の大波を乗り切りながら、4月には艇の整備を済ませて海に出、^海陸の上でも、5月下旬、藤崎デパートのホールで大々的な『海の写真展覧会』を主催するなど、実質的活動も活発に行う。

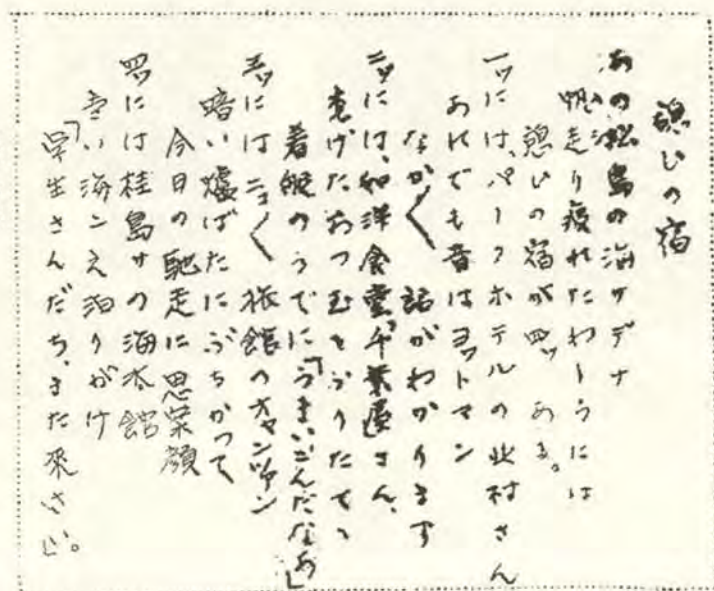
「この展覧会の為に招待状を印刷し発送した事は言うまでもない。中尾の筆になる『海とヨット』についての解説が附せられた大型のプログラムが、藤崎側の積極的な援助によって6千枚用意せられしも4日間にして消化せられたり。」

(1号)

こうして、部の在続権を獲得した後は、7月に第1回の東北選手権、第12回神宮大会東北予選、第1回海の記念日宮城県大会を開催、参加するなど、着々と活動実績を積み続ける。

しかし、軍靴の足音は高まり続け、7月下旬開催予定であった神宮大会は、学会であろうと何であろうと都道府県にわたる集まりは禁ぜられていたため順延と決定された。結局その2ヶ月後、神宮大会は、開催される事になったが、「現下の国際情勢の急迫は国防国家体制の強化を要望しているもので、今大会もかかる国家目的に応へ、そして大会自身が若人の意気と熱と力とを神宮に奉納さるべきものたる以上、又この大会の要望する所も常とは異らざるを得ない。」(1号)ものだった。

その神宮大会において、特に水域対抗戦において目覚ましい活躍をみせた東北水域は、



憩いの宿

あの松島の海サデナ、帆走り疲れたわしらは憩いの宿が四ツある。
一ツには、パークホテルの北村さん、あれでも昔はヨットマンなかな話がわかります。
二ツには和洋食堂「千葉屋」さん、禿げたおつむをふりたて、着艇のうでに「うまいこんだなあ」
三ツにはニコニコ旅館のオヤンツァン、暗い爐ばたにぶちかいて今日の馳走に思案顔。
四ツには桂島サの海水館、青い海こえ泊りがけ「学生さんだち、また来さい。」

小沢吉太郎氏から大きな賞讃を受ける。

「試みに小沢氏の競技評（アサヒスポーツ掲載）を見てみよう。

『目覚ましい成績を示したのは東北水域であった。予想では殆ど誰も問題にしていなかっただけに優勝の近畿と同点を挙げ得たのは驚異であった。小野選手は元来は関東育ち（？）の人であるが、一般には低い水準では優秀選手でも退歩するのが通例とされているのに、この好成績を示した事と、外に仙台専売局が1位と同点で2位になった事を考え合

わせると、東北水域の発展ぶりが十分にうかがえるのである』東北水域がこれほど中央に認められたのは初めてである。今までは簡単に1、2行位の批評をされていたにすぎない。」
（1号）

誕生後、4年めの春、1ヶ月余とはいえ、廃部の憂き目にあった部が、その年の秋、全国の注目を浴びる活躍を為した事は劇的というに値しよう。

この年の暮れ日本は太平洋戦争に突入する。



第12回明治神宮国民体育大会水域対抗小野氏準優勝祝賀会
前列中央は初代部長高須鶴三郎教授



「手旗訓練」

文部省の学徒耐寒訓練に呼応して懸案の手旗訓練を実施した。教官は法文二年の原田・望月両先生、手旗教範と一中から借用した赤白旗を手に手に、寒風粉雪を交へ吹き荒ぶ報国会会室裏庭で一月は五日から一週間の年期を積んだ。お陰で「一・一・一」／「二・二・二」／「三・三・三」(手旗信号解説タスケテ)等えらく上達したというもの。ここの所軌走部の活動は全学注目的、「手旗訓練」否、「河北新報」「朝日」を通じて全仙台の注視する所である！阿々

「手旗訓練」

文部省の学徒耐寒訓練に呼応して懸案の手旗訓練を実施した。教官は法文二年の原田・望月両先生、手旗教範と一中から借用した赤白旗を手に手に、寒風粉雪を交へ吹き荒ぶ報国会会室裏庭で一月は五日から一週間の年期を積んだ。お陰で「一・一・一」／「二・二・二」／「三・三・三」(手旗信号解説タスケテ)等えらく上達したというもの。ここの所軌走部の活動は全学注目的、「手旗訓練」否、「河北新報」「朝日」を通じて全仙台の注視する所である！阿々

昭和17年、戦時下に入りながらも、部の活動は淡々と続く。少なくとも、「白翠」1号・2号の一般的記録を眺める限りはその様に映る。

2月中旬部内スキー征。4月初旬整備。中旬乗艇開始。新入部員歓迎会。5月部会、講習会。6月写真展、桂島合宿。7月東北水域選手権大会。8月神宮大会。9月松島湾内巡航。10月東大戦。11月パークホテルの給仕諸姉と年末終業の送別巡航。納艇。

しかし、他の記事には軍事色強く現れるものも多く、誰も避け得ぬ歴史の渦中にあった。

「文相を会長とし海軍省からも支援あり出光萬兵衛海軍中將を理事長とする帝国海洋訓練

振興会では此度各海軍人事部所在地にその支部を設けられる事になり、各大学及び高等専門学校端艇・帆走・水泳各部が之に合流し、知事を支部長とし海軍人事部が主動して海洋訓練を強力に推進されられる事になった。其の為海軍手帳を部員に配布し訓練経過を記入して陸軍の教練と並行して海洋訓練を進め、卒業後海軍主計・技術・軍医方面に活動する人にとっては其の手帳が採用の参考にせられるということである。又艇其他の資材も其の方の手で配給せられる事になるのだから遠からず機動艇やカッターも配給せられ、海軍現役軍人が来て手旗信号その他と共に指導をしてくれる予定である。」(2号)

この年（昭和17年）は、以来今日まで続く『白翠会』が発会され、又、第1号の『白翠』が発刊された年でもある。

『白翠会』について

「（昭和16年11月）29日、役員会。

部先輩により組織せんとする『松影会』（仮称）の話が議題となる。来年創立される予定なり。」（1号）

「昭和17年秋保田氏及矢吹禎男氏、小野弘智氏が中心になって白翠会が創立され、」

（4号）

「昭和17年でしたか、東北大学ヨット部の卒業生の会として白翠会という会を作り、」

（15号）

『白翠』について

「此の部報はヨットが松島湾の水に浮かんで以来初めて企画され発行されるものでありますが、（中略）

本号発行の主旨と致した事は高須部長の巻頭の辞にもうかがはれます如く、まづ吾東北ヨット界の生立ちを記録することでありました。」

「生い立ちにつづいて昨年（16年）の我がヨット界の多事にして、すばらしいその発展振りは、又記録せずにはおられない事でもあります。帆走部の設立、神宮大会の戦果等それらの記録も又この部報発行の一つの主旨に数えられるべきだと思います。」

「元来発行が企画されましたのは開部式の前後で、紅谷の別室で開かれた例会で小野さんが初めて言われたものでした。早い所発行す



バリ島の宗教行事にみる白翠

ヒンドゥーはヒンドゥー教にバリ固有の宗教が交じりあったものといわれている。バリの宗教儀式で、一番大切なのは供物だという。食物とともにささげられる色鮮やかな花には、どんな意味があるのだろうか。

解答を求めて私たちはある高僧に会った。バリ社会の最高位の階級から選ばれた祭司の一人である。

「儀式にお供えの花は絶対欠かすことが出来ません。花は生命の象徴であり、清らかな心を意味します」

どの花を使うかなどは古文書に書いてあるが、大事なものは色。色は方位を示し同時に神々を象徴する。

白－東－イスワラ神

赤－南－ブラフマ神

黄－西－マハデワ神

青、緑－北－ウィスヌ神

これら四神はそれぞれの方角に住み、人が生まれてくる時に一緒に生まれてきて、その人の人生に力を及ぼす、とバリ人は考えている。 朝日新聞－1990.6.24－

べき予定の所、昨年12月末ひろがりの8日敢然と我が国は一つの大きな冒険にぶつかりました為に、其後あれやこれやと編集部員も忙しく、予想外に発行がおくれています。事は御わびの致し様がございません。」

「昭和17年8月23日印刷

昭和17年8月30日発行」

(4編共 1号)

「ヨット部創立20周年となる今日、なお白翠という名前が続いておりますことは、その命名者として、自分の産んだ子供の成長をみるようで誠に喜ばしいことであります。昭和16年でしたか、東北大学ヨット部の卒業生の会として白翠会という会を作り、会報にも白翠と題して、会員相互の消息、ヨット部の活躍ぶりなどを会員に連絡することとしました。



銀座料亭「白翠」

“白翠”と申せば大変よい呼称で大いに命名者の思藻豊かなるを床しく存じた次第でそれに会社にお送りして戴いたので側なる東大経済学士にして会社随一の粹人に誇示すべくどうだいと手渡したるに、彼、小生が心根の程も知らず、むげにぞ、白翠とは待合の名みたいだね向島にあるよと言いたれば、さすがの愚生も白翠の二義性に煩悶せざるを得なかった次第でいたが、正月休暇明けで帰省より東京を通り勤務地に帰る者偶然三人小生宅に会し、銀座裏で合成酒の盃を汲む次第に、ひとつ今別れてはいつか見ん、盛大にやらうじゃないか一番丁を僦んでさと、モン公案内しろと財布の寂しいのも忘れて騒ぐ始末で、ダバユクベシとメイタクを拾ひ、無意識に向島と言った了ひ、白翠なる臉の家に辿り着きたるものの行こかもどろかここが思案の思案橋、エイ、ユクベシで女将のお迎へによひ気持ちに

なり、“杜の都の花乙女”なんてのを何度も繰返して歌ったりしてすっかり白翠によい気持ちになったもののさてお帰りとなって、酔ひは一瞬に覚める始末の悪さ、人質を一人置いて夜半の街に出れば星寒空に冴えて歓楽の悲哀切々凡庸際として訪ぬべきに質屋の艶姿なく、その一人なるは国民服を買ふ為に態東京を廻った丈なるの事を思ひ出し、国民服は当分諦めろよと云ふことに衆議一決近き将来国民服を買ってやるから今夜はおごりにしろよと因果を含め、今か今かと火の無いこたつで残酒をなめて居る人質を引取りたる次第なりき。

など申す、真に涙をたつる白翠にまつわる悲劇も有之国民服氏としゃばしゃばとカバンを携げて“国民服は諦めろよ”と悲壮なる一語を遺して東京を風の如くに去りぬ。」

(2号 後藤 洸14年卒)

実はその白翠という文字は、いとも軽い気持ちで、私が一人で選び名づけてしまったのですが、強いて反対する人もなくそのままになってしまいました。」 (15号)

これによれば、①『白翠会』も、前年の『報国会国防訓練部帆走部』開部式の前後に発案があり、この年(17年)にそれぞれ発行、発会となった。②命名は、機関誌『白翠』が先行し、OB会は、『松影会』というのが候補

に上がっていたが、『白翠』に合わせて『白翠会』となった。という事で読みとれる。

以来、現在(平成2年4月)『白翠』は40号を重ね、『白翠会』会員は323人(『白翠』40号名簿より)を数えるに到る。

昭和18年、待望の大型艇(18尺)L級、が松島湾に浮かぶ。

これは、翌年、第2代部長となられる福島助教授のおられた電気通信研究所で、水中通信研究用に用いるとの名目で購入せられたものだ。

「L級艇を買おうと初めに言い出したのは昨秋10月の歓迎コンパの席上、渋谷さんの結論であった。

然し我々が出艇で未だ忙しかった時、既に敵産「L」は処分されたという通知が入ってがっかりした。11月24日、シーズンオフでやっと解放された部員の帰員せる中、原田・小池が横浜岡本造船所に「L」の売物があるのを知り、諸事打ち合わせて急遽帰仙、26日小池の下宿に2年以上集合。何とかして松島湾に「L」を走らせんと鳩首協議、先づ学校はカッターを買ってやるというのだから「L」級は望べくも無い。寄附を仰ぐより他に無い。最後の手段として各人



昭和18年東北水域最大のヨットL級

一生の不覚をもて祖父にあやまる事もあるだろうからそうした積もりで10円でも20円でも出し合い、せめて手付金500円だけでも早速捻出しようと談論風発乍ら悲壮いものさえあった。然し天我身に方す。先輩の残された好評と現役の心勝の強さとの為か、「L」は通研で実験用艇として使用可能ならば買っても良いと告げられたのはその翌晩だったのである。而してその後岡本に赴く事。三たび、始めの脱兎の如きに比して些か遅滞の感あったが、18年1月26日、通研と岡本との交渉は妥結し、ここに「L」級は通研の実験艇としてその麗姿を松島湾上に浮かべるに至ったのである。」（2号）

5月2日、艇が塩釜に到着する。

「L級新艇到着5月2日。4月28日に積みし旨岡本より通知ありしも荷受人が東北ドックとなって居た為手違いがあり、はらはらする内、折しも日曜出艇準備中到着せりとの快報に接し、強風を衝いて受取りに行く。2枚帆の大艇初めて松島湾に浮かぶ。一同の歓喜形容の語無し。」（3号）

「『萬歳！』思わず一同、双手を挙げて欣喜雀躍した。」（3号）

それまでの所有艇は12フィートのA級ディンギーが7艇、やっと14フィートのオリンピア・ヨレが1艇という陣容であり、いずれもジブの無い、キャットリグと呼ばれる1枚帆

の艇だった。

そこへ、18フィートのジブを持つスループ艇が加わったわけであるから、この喜びは相当に大きかっただろう。

ところが、『白翠』を更に読み進むと、実は、もう一つの大きな喜びが、この「万歳！」を生み出している事がわかる。

それは、夢見たクルージングの実現を約束された喜びだ。

その行動はL級到着の翌日より開始される。

「外洋進出、5月3日より。Lの外洋巡航に備へ、ディンギーで桂島に1泊、早朝3時半頃から波島方面に出掛け水路調査を行う。

初の遭難、5月10日例により小池・原田のコンビ。Lにて船入島木島方面で強風となり帰途バックステアのレールのビスが抜けレールが折れ相になり、辛うじてタック。波津々浦に逃げ込み、半日の苦斗の末漸く同浦内繫船所に繫留。翌日滝藤・中本救援に来る。同日も風強く帰還不能。湾内はチョコレートアイスクリームソーダ状の色を呈す。12日風風ぐ。修理も終え石巻沖迄遠征す。快適を極む。近い内金華山巡航を行うべく決議す。早く整備を完成したい。」（3号）

「一年の原田、小池等四君練習におもむき帰港せずとの報あり。在仙旧部員心配し正に救援に仙台を出発せんとせし時寺田君の連絡にて四君は自重して寒風澤に一泊せしとの報入る。桂島を迂回せるも石浜水道にかかるや、干潮あまりにもはげしくして加へて夕風とな

りたる為、一向に進まず日没迫り上陸せしとの事なり。尚宿泊中附近農兼漁民が大学生とはどんな顔をしているのかと拝顔傍々大勢が話に來たとの事。漁民も四君の顔を見て「おら一達と少しもかわんねえ！！」と安心した事であらう。」（2号）

この2年前、部が報国会国防訓練部の一つとして再成立して以来、部の活動の目的は世相を映して「ヨットを通しての鍛練を行なうこと」に収束していた。

「ヨットは唯一の海上スポーツとして普く世間に認められて居り、我国のヨット界はこの責任の重大性を自覚して従来とも「ヨットを通じて海を知り、更に海を通じて洋を学ぶ」の標語を掲げて、その普及啓発に努力して來た。蓋し海洋訓練の手段として、ヨットは主としてヨットする事である。」（2号）

部は、それを目的として初めて成立し得る世相であり、実際に部員はそれを信じてもらいたろう。この目的を掲げた部員の眼が帆走り慣れた松島湾から外へ外へと移っていったらう事は想像に難くない。

そこへ、より大型のスループ艇がやって來たのだ。いや、順序は逆かも知れない。そのために、大型のスループ艇を求めたのかも知れない。いずれにしろ、第1回クルージングの実現はL級到着後、1カ月以内に為った。

「5月27日我々としては破天荒な牡鹿半島往復の壮挙を決行した。」（3号）

その後、8月神宮大会、9月対東大戦と従来のレースも行うが、この対東大戦を最後に、以後、レースは実施不可能となり、部の活動はクルージングを専らの目的とする事になる。

9月下旬、学徒出陣令公布。



ウォーターラインはていねいに筆で塗った

「祖国は急を告げている。我々の為すべき事は何か。先頃9名の現役部員を軍に送り、尚3名の入営予定者を持っている。多年海に鍛えた海の見等は進んで最も困難な任務に当たるであろう。学園に残った我々は勿論瞬間の沈滞もマンネリズムも許されない。全く異った事態に対して最も適応する計画を立て、積極敢為学徒の本分を尽す事こそ彼等出陣部員に対する我々の餞けである。

従来我々が練習の直接の目標として居た全国大会は愚か対校戦も一切許されなくなった。

勝つ為に自我を棄てて鍛え合う運動部としての一大特徴が昨年の対東大戦を最後にして失われたのは残念であるが、時局柄帆船界のみが、未だに、試合に執着して居てはなるまい。我々には広い大海があるではないか。若人よどんどん大洋へ乗出そう。従来我々の間での二元的対立であった競技と巡航とは、長距離巡航に依って止揚されよう。

勿論技を磨く為のレースは棄ててはならないが、それは荒天の日のみ沈没覚悟の勇猛果敢なものでなくてはならぬ。細かい技術やルール等は忘れても構はぬが唯危機に際して機敏な判断と処置とが出来る腕と胆力とは正々訓練せねばならぬ。

併乍ら我々の目標は1年に1回及至2回、1週間か10日掛りの数百里の大巡航である。それ故、微風の時等はあっさり帆走を諦めてこつこつと艇の整備に専念する様にしたい。地味な仕事であった整備が大きく前面に乗出して来る様だが、派手な練習が出来なくなったからと云って従来の積極的な気分を失って



時変われど……

Water Line は昨年までの緑を本年度の意義多大ならん事を期して今年は青を採用す。ペンキがあまるといろいろなものが塗られて行く。何時の間か下駄のsideに迄塗られてしまつてあわてた部員も出る。一足しかない下駄なれば眼もさめるばかりの、その白き下駄で番丁を闊歩しなければならないであらう。

(1号 中尾 良17年卒)

はならぬ。常に鍛え合う気持を失わず、少数たりとも部員同志仲良く、全体の為に惜しみなく自己を捧げ合い、部を愛し、艇を愛し、艇と共に生きよう。」

(3号)

『白翠』3号は、昭和19年3月3日に発行されているが、上の引用は、その巻頭の言辭として、入営直前の18年度主将原田俊作氏が掲げたものである。

4号は終戦後の昭和22年3月中旬発行であり3号発行以後への状況はそれに見るしかない。

〈昭和19年度〉

3月上旬 年度皮切りセーリング。7名。

3～4月 5艇分のみのペンキ塗り(3回のみ)。

5月 残留学徒対象の部員募集。
(下旬、得た若干名、まもなく勤労働員)
下旬 比較的多数集まり、艇隊帆走・レース練習。

7月頃 新造和船完成。

11月初旬 納艇。

下旬 総会。

*シーズン始め、東北ヨット協会として寄金募集。400円余り集まる。(4号)

で部としては正式活動は一切行わず希望者のみ随時出艇することとした。

かくて、昭和20年8月、終戦を迎える。

〈昭和20年度〉

シーズン始め総会を開いて協議。分散する組織は如何ともし難く、更に敵機飛来下にあつては今後の活動は愈制約されるに至ったの



海ぶくれ - 昭和18年 60年ぶりの珍事 -

十月三日、此の日は仙台海洋少年団高学年児と海上交歓の予定が前夜来の暴風雨で中止。筆者は少なからず、クサッて居たが、小池鉄男君の来訪を幸ひビールの満を引いて話がはずんだ。

松島では此の時大活躍が演ぜられて居た。

六十年目と言ふ大海ブクレがあった。高橋彦治君が見廻って帰った後、午後三時頃潮と風の関係で海面が膨張したのである。

海水はパークホテル前庭の芝生を水底にして波頭は階段を洗った。九艇全部右へ左へ漂ひ始めた。潮が下げ始めれば金島水道通過の危機が迫って居る。

折しも宮電から飛び出した一人の快漢がある。高田の馬場の安兵衛の如く一目散にかけ付けた。

一艇にヒラリと飛乗り松の梢にオールをかけかけ一二艇づつ曳いて帰る。艇は沖へ沖へ逃げて行くのを数回の追撃、最後に三浦明夫君のカッターを捕えたのは双子島の崎であった。ホテルの女給さんが総出て艇の収容を手付った。此の奮闘によって全艇事なきを得たのである。

快漢こそ木場滋君である。彼は霊屋橋畔の下宿で広瀬川の増水にヒントして松島へ馳せ付けたのである。感激に堪えず。

復活期

(昭和20年～昭和23年)

昭和20年8月15日正午、天皇の「戦争終結の詔書」が放送され、太平洋戦争が敗戦によって終わりを告げた。

終戦時点の所有艇は、18フィートLクラス1艇、オリンピックヨレ（朝雲）1艇、12フィート・ディンギー9艇の計11艇であり、松島パークホテル前に係留されていた。

そして、9月12日、進駐軍前衛がパークホテルに到着し艇及び備品に関する取扱いが全く停止してしまう。戦争の混乱により卒業生ならびに現役部員が全くつかめない状況の中で在仙の現役部員は進駐軍との艇返還交渉に奔走するが、具体的進展がないままに時が過ぎていった。その間進駐軍将兵等の勝手気ままな乗艇が行われ翌21年春までに12フィートディンギー5艇を失うことになってしまった。ヨット部における戦争の混乱は終戦後も続き、昭和21年春に極限を迎えたのであった。

「終戦時の艇の状況」

18フィートLクラス	1艇
オリンピックヨレ	1艇
12フィートディンギー	9艇

以上松島パークホテル前に繋留し在り

注(1) ベンキは昨年人手不足のため塗らなかつたので相当剥げて居りパテ詰めベンキ

塗換へは是非必要なり。

- (2) ヨレの舷側及No.7ディンギー7月24日の空襲により機銃弾を受く。

10月12日

- (1) パークホテルに進駐軍来る。
 (2) 進駐せし暁高橋氏宅に来訪Lクラス及ディンギーを借り度き旨通訳と共に来る。高橋氏艇に責任を持って取扱うと指示約束の下でこれを許す。
 (3) 此頃より進駐軍将兵ならびにパークホテルの使用人ヨットを使用し始めその間帆走法も知らず乗艇するため「沈」相当ありオールクラッチを始め備品相当紛失し殆ど使用に耐えずなる。さらにディンギー2艇行方不明となりたり。
 (4) 12フィートディンギー3艇塩釜回航メンスル、マスト、ラダー、ティラー等残品にて艇体のNoと備品のNoの違うもの多し、満足なものは皆無。
 (5) 原田氏と江部氏でディンギー2艇桂島へ回航。備品は海水館へ。

この艇はコールタールで塗った。」

(4号 原保太郎22卒)

「さて2月末になると共に接收問題は急にしましてパークに行き備品類の早急なる疎開が必要となつて来たのであった。当時既にパークに

は進駐軍將兵入りその持出しは仲々容易でなかったが幸いパークの通訳の逢田氏は我々に好意を持ってくれ早く移すべき事を薦めてくれたので早速に備品引受けに行く予定であったのだが、丁度私は用事ありて帰省した事と引取りに皆で出掛けた時は逢田氏は不在にして在パークの北村氏にこの旨告げて依頼せるも許可を要する事を口実に渡してくれず、更に再度の松島行の折も未だ許可が下りずこの言を以て無駄足となる始末であった。斯くとする中何かと延々時間を失い漸にして引取りし時は既に後の祭り、備品は殆ど零に等しく僅かにマスト、ブーム、ガフ等を数本宛受取ったに過ぎなかった。斯くの如くして残りし艇は使用不能のL級ヨレ塩釜にディンギー3艇桂島に1艇のみとなって華かなりし往時に比し見る影もなく、接收を免れし4杯とても既に寿命が来たり剩さへ資材難による手入不足はあちらが傷つき、こちらに穴あきを作りと実動零々たる有様。」

(4号 江部貞四郎19年卒)

昭和21年になると、卒業生ならびに現役部員の復帰に伴い、白翠会員相互の連絡が取れる状況になってきた。復員したその足で松島を訪れる卒業生もあり、松島やヨット部の正確な状況が東京に知らされ、東北ヨット再建計画について論議がなされ始めた。そして、大学の中心部員がほとんど復員し、松島の状況も落ち着いてきた8月25日に第1回の集会在岸体育館でおこなわれた。その時の主要議題は、次の3つであった。

- (1) 東北ヨット協会の再建対策
- (2) 卒業生と現役の連絡強化
- (3) 日本ヨット協会水曜例会への出席

出席者は、末松(17)中尾(17)原田(19)近藤(19)湯沢(20)原(22)の6名であった。

また、8月20~24日には、桂島をベースとして戦後第1回の合宿が江部、岡、島田、大友の4名によって行われた。戦後ヨット部の活動開始であった。

「戦いが終わり我等が再び愛すべきヨットにて海洋に乗り出さんとした時は、そこに残されたものは戦時中の不十分な手入れと資材難とから来る艇の損耗とそして新しき部員とであった。而も陣容未だ整わざる中に襲った接收問題は遂に此の僅かな破れた艇すらも我等の手中より奪い、漸くにしてその一部を取戻せし時は既にシーズンと半ばを過ぎ且又要修理艇のみにてその正常の練習は望むべくもなかった。然し、日を空しふしてはヨット部の再建はおぼつかないと思ひ意を決して合宿決行を予定した。所が今度は宿舎難で一頓挫し一時は取止の形勢になったが幸い或る人の好意で桂島の石浜国民学校を借りる事が出来た。かくて漸くにして合宿決行の運びとなったが時期に制限されたために部員の大部は或いは帰省し或いは不在にて員数的にも最も悪条件に行はざるを得なかった。そして集まる者の中、僅かでもレースに経験のあるのは小生一人のため新しき部員にレースとは何なものを教える真似事を行うに止ったのは止むを得

なかった。」（4号 江部貞四郎19年卒）

東京においては白翠会の再興を含めた東北ヨット再興の交渉を日本ヨット協会水曜会の中で行うとともに、松島においては、現役部員が地道な合宿により技術向上を図るという、まさに卒業生と現役が連携をとった再建活動が展開されて行く。

このような状況の中、11月1日～3日に、第1回国民体育大会ヨット競技が琵琶湖にて開催された。本大会が、東北大学ならびに東北水域が参加した戦後第1回の公式レースであった。

「ヨット部一期く呼び斯く憶うだけで先輩諸兄は愉しかりし松島湾のセイリングと美味しい（そして安いと来ている。）パークのコーヒーが脳裡に往来することでありませうが終戦後入部した唯3・4杯のディンギーと老いさらばへたL、ヨレが眼前に浮び、そして修理、建造と全く折にふれ事にふれては前進の意欲を燃している現状であります。

その様な調子でレースの練習は到底満足出来ずファイトだけは琵琶湖を呑むの概を示したけれども試合数がレース練習回数より多いと云う珍現象を呈しました。」

（4号 大友俊男22年卒）



第1回国民体育大会ヨット競技（昭和21年11月1日～3日 於 琵琶湖）

国体最終日には、六帝大戦復活の話合いがなされ、11月4日に東京大学、京都大学、東北大学の三帝大親睦レースが琵琶湖にて開催された。

「又此の日、東京・京都・東北の先輩学生
の間に六帝大戦復活の話が起り、今年は名古屋がメンバーの都合で大会終了後は参加不可能。九州は全艇を8月に接收され遠征して来られぬ事情にあり、大阪も戦災で艇を失うと言う有様なので今年開催は不可能となったので4日東京、京都、東北の三帝大親睦レースを京大艇庫前水域で行う事になった。当の4日は朝から小雨、風は微風と云う悪条件揃いであったが三大学の選手諸君のファイトは充分之等を克服して気持ちのよいレースをして呉れた。」
(白翠4号)

翌昭和22年3月、戦中戦後のヨット部活動の記録と東北大学ヨット部飛躍への夢を託し、白翠4号が発刊された。

昭和22年春からは、艇数の増加等設備面の整備計画が具体化に取りかかりはじめる。

昭和22年4月6日、岡本製造所に12フィートディンギー4艇(3,200円)18フィートLクラスのマスト、ブーム・オール(5,000円)を注文する一方、これらの資金として寄付金37,381円56銭を集めた。

練習環境の整備としては、桂島片倉別荘を合宿所に交渉し、“無料、転賃を禁ずる”の条件にて承諾を得、着実に再建への道を行って行った。



白翠再刊の辞

しばらく途絶えて居た白翠がこの紙創
僅のさなかに再び発行される事は誠に喜
しい次第です。

終戦当時の混乱のために艇が損傷した
り、行方不明になったりした事は残念で
申訳けない事に思っています。それにも
かかわらず、帆走部が比較的早くから活
動を開始し得た事は先輩諸兄の御激励と
学生諸君の異常な熱心と努力の賜と感謝
に堪えません。殊に困難な条件の許に琵琶湖まで遠征して好成績を残した事は大へん嬉しく思っております。

ヨット部発展に就てはああもありがたい、
こうもし度いと誠に遠大な夢と構想をも
って居る訳ですが、現状は余りにも惨め
です。しかし、一歩々と苦難を越えて
理想の夢を少しづつ実現させて行く事は
またその中に大きな喜びもあらうと思
います。これが若人の特権かも知れません。

松島湾に真白いセールがいくつもいく
つも数えきれない程浮かぶ風景それは遠
い遠い先の甘い夢の様な気がしますし、
案外早くふと実現しそうにも思えるので
すが…。

そんな日が一日も早く到来する様に祈
って止みません。(4号 福島弘毅部長)

この当時日本ヨット協会が把握している各水域の艇の数を当時の白翠から振り返ってみたい。

12呎ディンギー	106艇
スナイプ	9艇
18呎	6艇
他	11艇
合計	132艇。

これが戦後まもない日本ヨット界の実状であった。

東北ヨット協会の再発足については、白翠会の打合せの過程で東北大学の現役に一任されることになり、昭和23年5月24日に、福島教授の名により“東北ヨット協会再会準備委

員会”を開催した。会長に岩本正樹氏、副会長に中井直二氏、福島弘毅氏が就任し、東北ヨット協会再建のための艇建造の寄附集めに奔走することになる。

白翠会会員、東北大学ヨット部員の再建活動は、東北ヨット協会を前面に出した形で動いていた。現役部員の中から東北ヨット協会の担当が選任され、東北ヨット協会の活動、会計報告が白翠の中に記載された。まさに東北大学ヨット部と東北ヨット協会は一体となって活動をしていた。

着々と東北水域の再建が進められて行く中で当時の部員は、どのような気持ちで、ヨットに乗っていたのであろうか。白翠から拾ってみたい。



戦後まもない頃のレース運営風景「帆走指揮所」(昭和23年7月)

雄島よりの出艇
(昭和23年頃)



「22年の乗はじめは4月1日、それもS先輩と二人でペンキを塗りに艇庫に行ってみたら快調の天気なので2回塗り終った艇庫の奥の方の艇を二人で出して又出口のを内に入れてのり出したのでした。この時Bodyは二人でも動かせる——(但し相当のアルバイトです)——事を発見し桂近く迄のしたのでしたが寒さとガスに悩まれてホーホーの態で帰って来たのですがでも初乗は快調でした。……」

その当時は桂、大藻根、小藻根、馬放辺でクルージングするのが多く、松島はG Iさん達を敬遠して用事のある時以外はゆかず、勿論艇は塩釜に置いてありました。あの当時は和船のオッサン達は未だ風を流して走るヨットの理屈がよく分らなかったらしく、風上へ出て知らん顔をしてブランケットしてるとオッサンそうとは知らずヨットと和艇の帆を見くべてはオソイオソイとつぶやいて一生懸命

何かといぢりまわして居るのを眺めては喜んで居た事もありました。今ではもうちゃんと分ったらしく和船のシートとテイラーとを握る手つき迄ヨットに似て来た様に思います。」

(6号 DHK)

昭和23年度には、これまでの再建の努力が実のり、艇の状況は戦前と同じ

12呎ディンギー 9 艇

オリンピックヨレ 1 艇

18呎L 1 艇

の計11艇まで整備された。これと平行してクラブ活動内容、合宿数遠征数も充実し、復活が達成された。

戦後まもない時代におけるヨット活動再建に対する情熱と行動力は、ヨット部創部時代に匹敵するものであり、復活期とはまさに、第2の創部時代であった。

東北勝つ(ヨット)

海の記念日を記す北海道ヨット協会主催東北・北海道対抗戦に
道南個人レースは二十日午前十一
時から道南船舶会館でコース三
千五百メートルを航行した。東北は
三十五分を過ぎて勝った。なお二
十一日は午前九時から同所で東北
対抗戦の学生対抗レース
を計つた
△東北・北海道対抗戦レース
第一回 ①丸山(東北) 25
分35秒 ②島田(秋野) ③秋
野
第二回 ①加賀(上川) 23分
25秒 ②島田(小島) ③東北
第三回 ①島田(丸山) 45
分33秒 ②相馬(山本) ③
青野(和田) (東北)



東北ヨット協会・北海道ヨット協会第1回定期戦(昭和23年7月 於 函館港税関沖)



ヨットマンの義務

艇を大切に取扱ふことは誰しもヨットマンである以上、当然のことだと思ふが見てゐてもはらはらする場合が少くない。カキ棚を強引に突切って、かくれてゐた杭にのし上げたり、カキ殻の多い艇庫の下で持ち上げもせずに、そのままずると艇を下してみたり、合宿で舳をいい加減にとって風に艇がガタガタぶつかり合つてゐるのを見るとハラハラする以上、情けなくなる。特に微風の時に高くあげるのはいいが、そ

の為ガフを無理して入れ替へを乱暴にやらうものなら弱いセイルはすぐきれてしまふ。ラダーもタックが出きないでガタンガタンとやれば、鋸がとれるか、木がはげるか、こわれてしまふ位は誰しも承知のはず。

艇を可愛いがることはヨットマンの義務であり、誇でさへある。この誇を棄てたり義務を怠ったりするものはヨットマンの資格はないと思ふ。(5号 整備係)

発 展 期

(昭和24年～昭和35年)

発展期とは、地元松島での全日本学生ヨット選手権（以後インカレ本大会と略す）、国体、全日本選手権等の開催を軸として他大学との対抗戦の拡大を図り、全国レベル・レースでの数々の入賞を果たしながら、昭和33年のインカレ本大会の優勝に至る軌跡であった。日本ヨット界において、松島と東北大学の存在を強くアピールした時期である。

この時代の幕開けは、戦後の混乱の中、卒業生と現役、大学、地元、関係者の努力により艇の数、部員の数とも戦前の状況にまで盛り返した復活期のエネルギーを土台とし、昭和27年の松島で開催された国体へ向けて水域の底上げを図るための数々の活動であった。

「昨年度の部の活動は諸氏の奮闘誠に見る

べきものがあります。しかし乍ら近年他水域の技術水準の向上は驚嘆に値する状況ですから、井の中の蛙におちいらぬ様益々油断のないようにしなければなりません。来年には国体が松島で行はれる筈で、或は今年のインターカレッジも実現するかも知れません。当水域のヨットも益々発展する事ですが、大会実施の際には先輩諸兄はじめ部員諸氏の御骨折をお願いしなければなりませんので何とぞ宜敷くお願い致します。

昨年には仙台一高にヨット部が誕生し国体に初陣を致しました。時には大学生を相手にとってなかなかあなどり難いお手並にまで進況を見せて居ります。今迄大学一校のみであった当協会も漸く参加団体が増加していく事になると思ひます。社会人のクラブも5つ6

つほしい処です。大学としても新制大学の体育正科と一般学生職員のためのリクリエーション施設としての面を考へるようにしたいと思つて居ります。」

(8号 福島弘毅部長)



ヨット整備風景（貞山堀艇庫） 昭和24年4月

当時は国体の前哨戦として、開催地において前年に全日本インカレが行われていた。昭和26年8月3日～5日の松島での全日本インカレは、部員の力も充実しており多くの期待を集めて行われたが、前半戦の好調な走りに対してレース後半には他大学のマークが厳しくなり、失格艇が出るに到り、残念ながら決勝戦への出場はならなかった。しかし、同月の18～19日に蒲郡にて行なわれた全日本ヨット個人選手権大会では、加納、平野、丸島組がスナイプ級にて優勝を飾り、東北大学ならびに東北水域における初めての全日本選手権保持者となったのである。

「昨年度全日本のスナイプ選手権を我が加納寛文・平野節夫組が獲得して大いに東北のために気を吐いた事は痛快である。けれども、それだけで手放して喜んでは居られない。

東北ヨットから宮城県を除いたら何が残る

か。宮城県から東北大学を抜いたらどうなるか。端的に言って東北ヨット即東北大学ヨットだ。質を考えると同様に、否それ以上に先ず量を考えなければ将来の隆盛は望めない。今秋の第7回国体を最大限に活用して、質を高める一方、大いに量も拡大しなければならない。」

(9号 東北ヨット協会会長 中井直二)



全日本スナイプ選手権
昭和26年8月18～19日（於 蒲郡）



全日本スナイプ選手権優勝祝賀会（於うなぎ屋松風2階）

国体の地元開催で、大きな変化があったのは、女子部員の登場であった。これは、昭和27年の第7回国体より女子レースが新種目に加わったためであるが、男所帯のヨット部に女子は新しい風を吹き込んだことは想像に難くない。

当時の状況を平野主将は次のように書いている。

「国体の新種目に女子レースがあるので女子部員を養成する事になったが前記した様な気風なので一寸心配もしたが却って此ういう打ちとけた陰のない気風が良かった様だ。始めは年若い部員に指導させる事は避け、私と古宇田で指導した。日頃女なんてと大言しているが実は女に対して至極純情で、一寸綺麗な人に会うと直ぐどぎまぎするが年の功で何とかごまかした。彼女らには頼母しく見えたろう。少しうのぼれているかな。

8月末高橋に女子部員はさっぱり「センス」がなく走らないと言われたので一緒に走って

みた。成程マーク廻航、タック等が全然オンチ。早速2、3日どなり立てたら一応よくなった。その後練習「レース」で関野さんを抜いたとか、大いに気焰を上げていた。」

国体における白翠会員ならびに現役部員の活躍は目ざましかった。特に、女子が3位に入賞したのは特筆に価する出来事であった。

「松島で国体をやる事になる見込だからという事で、横浜の国体に狩り出されて生れて



第7回松島国体宮城県女子選手チーム



仙台二高（旧制二中）ヨット部出現するか？

来年度国体に備え、又仙台一高の競争相手としても仙台二高にヨット部を創立さすべく11月始めの日曜に二高有志を松島に呼ぶ。当日は松島特有のブロー。事故防止のため全艇二段リーフで出艇さす。所が一高生2名、二高生出現のため大張切りでフルセールのままブローの中を突走り、見て居

る方では大心配。一艇沈するもぬれた初心者がまたすぐ乗ると言った具合で大分お気に召した様子。何とかして今年度から二高にも部を発足させたいものと考えて居ます。先輩も何卒この点にも御協力の程を。（二中出身の方は特にお願い致します。）

（8号 松島うなぎ）

はじめてヨットレースらしいレースを見学したのがちょうど3年前である。あの時初対面の小沢理事長から国体運営には多数の部員が必要でとても東北大一校では駄目だといわれた事を記憶している。以来3年間国体運営という目標のためにヨット部活動に大きな犠牲を要求して来たことは申訳ないと思って居る。東北ヨット協会創立以来の念願であった全国大会も昨年実施することが出来たし、今回の国体も予想外の盛会のうちに幕を閉じる事が

出来、一応東北ヨット協会も全国的に顔が売れて来たことは喜ばしい次第であって、創立当初から陰になり陽になって東北ヨットを育て上げて下さった皆様に深く感謝致します。白翠会員諸兄が遠路を遠しとせず、多忙な勤務の合間を割いて国体に駆け参り現役部員と一心同体となって任務の遂行に当られた事は東北ヨット協会の誇りであり、地元各高校の協力と相俟って全国の参加者から賞賛を博したことであった。」（10号 福島弘毅部長）



第7回松島国体
A級



スナイプ級

インカレ本大会、国体と2年続けて全国レベルのレースを地元にて開催した意義とは、地元にとって有利な条件でのレースの開催は、その1つではあるが、本来的には松島におけるヨットハーバーの整備、東北水域における所有艇の増加等、そのヨット環境を大幅に整備し、まさに水域の底上げが図られた事であった。

昭和28年8月5日、西宮にて行なわれた七大学戦においては当部初の優勝をかざり、その成果は着実に上がっていた。

また、同年の第8回国体においては、前年度5位であった宮城県が第2位まで躍進した。

当時の宮城県の国体選手は、高校生以外は、すべて東北大学にて占められていた。

「昨年の国体には、高校以外はすべて東北大で編成された宮城県選手団が、最後までリードを続けましたが、最終回で惜しくも優勝を逸し、遂に全国第2位に止まりました。

中井総監督の統率の下、全員チームワームの強味を発揮したというべきでしょう。今年度小樽の国体に於ける活躍も期して待つべきものがあるかも知れません。

従来甚だ貧弱であった東北ヨット協会も、国体のおかげで多数の加盟団体が増えた事は慶賀すべき事です。東北学院大が近い将来にはお互に切磋し合う好敵手となる事と思えますし、一高、二高を始めとして、石巻、宮城水産、気仙沼高、気仙沼水産、電波高校等の高校陣に加えて、藤崎、東北電力、七十七銀行、菱和会、興銀、仙鉄、釜石製鉄所等の実業団もなかなか熱心であります。日曜日などは数十隻のヨットが出艇しますから、さしもの松島湾も狭すぎるという状況になりました。それ故、国体用に作った県の艇庫も各加盟団体の全所有艇を容れる能力がなく、この冬は大学だけ又もとの塩釜の艇庫に納艇の止むなきに到りました。今年はなんとかして懸案の用地問題を早急に解決して、大学艇庫を是非



バカヤロー

僕がヨット部に入ってからもう一年になろうとしている。

ヨットのヨの字も知らなかった僕が曲りなりにも一人で、乗り廻せるようになったのである。

だが入部して驚いたことが二つある。歓迎コンパのとき沈の話が出て、沈とは非常におそろしいものであるとおどかされ、

これはとんだところへ入ったものだった。もう一つは、乗艇してからの「バカヤロー」の洗礼だ。

「バカヤロー、どこへ行くんだーっ!」、「バカヤロー、……」、「……バカヤロー」と「バカヤロー」と呼ばれる名前の順序にも〇〇氏は前者、××氏は後者と二種あることを発見したりした。(11号 権ノ兵衛)

実現したいと思って居ります」

(11号 福島弘毅部長)

この当時には、多くの新しい対外レースが企画されており、現在の対抗戦の多くはこの時代に始められている。そして、対外レース数が近年よりも多いことは注目すべき事である。

昭和27年10月18日～19日

東北ヨット個人選手権大会(戦後第1回)

昭和28年6月22日

小樽商大親睦レース(小樽)

昭和28年7月9日

第1回東北インカレ

(全日本インカレ予選)

昭和28年8月29日～30日

対旭硝子女子ヨットレース(葉山)

昭和30年5月4日～5日

第1回京都大学戦(松島)

また、昭和29年10月3日には、松島にて全日本ヨット選手権が開催されている。



松島湾練習風景(昭和31年)



女子部員の遠征

逗子への遠征の時は、よくまあ集ったバンカラそのもの、女子選手六名—お米やらレースの為にシートや予備のロープ等で大きくなった荷物をかゝえて、先づ東京に着いて銀座の真中の旭硝子のビルを訪問した姿は、たのもしくも亦、我々も仙台の淑女なりせばと思うと、ヒヤヒヤと寒気するような恥づかしき体験であった。初対面で東京の美しいという方にすっかり洗練された女子選手の方々に對し、片や例のドロナワ式の訓練ですっかり陽やけた強者ぞろい—それでも確かに仙台の淑女であるし、おとなしく対座して何を聞かれても只うつむいて黙しつゝ、ちらちらと相手の方々のたおやか

な美しさの中に、さてこれで何時どのうにとその練習、腕前の程度を観察するのみであった。

その夜は葉山—皇室の御用邸と近く、富士山、江の島を一望にながめられ、背後はこんもりと上った山に覆われた壮大な天然美そのまゝの地に、私達東北大の女子部員だけで会社の寮を拝借した。

翌朝は思い思いについふらふらと散歩に出て、まぶしい太陽をあびながら湾の岬にのぼって大きな気持ちになったり、砂浜を海岸伝いに歩いてみたり、持前の放浪性を発揮してしまった。

(11号 堀 恭子)

昭和33年、東北大学ヨット部は創立20周年を迎えた。

この年は、まさに我部の記念すべき年となった。7月26～29日に花淵で開催されたインカレ本大会において総合優勝を果たし全国の大学の頂点に立ったのである。

同年11月2日には、松島の県営ヨットハウスに於いて大学関係者、東北ヨット協会長等の参列の元、創立20周年記念式典が行なわれた。

「昭和33年11月2日午後1時35分より、松島の県営ヨットハウスに於て先輩、大学関係者、仙台一高・二高ヨット部長、東北ヨット

協会長その他円通院住職、西沢ヨット工作所所長等を迎え、ヨット部創立20周年記念式典が行われた。

式典は古川主務の開会の辞で始まり、まず福島部長が挨拶に立ち、ヨット部のあらましの歴史、過去の戦跡、救助艇が進水の運びとなった事、東北大体育振興会から優勝祝として酒が出た事、艇庫について等の話があった。続いて西田信直氏から20周年記念事業としての救助艇に約16万円金の足りない事、塩釜から救助艇を回送するのに、この式典に時間間に合いそうもない事が報告され、次に福島部長の音頭で乾杯が行われた。乾杯の後、祝辞にまず学生部長が立ち艇庫を立てたい事を



全日本学生ヨット選手権優勝祝賀会



スナイプ級三回戦、東北大の健闘 (O印21号は泉谷、鈴木、3025号は渡辺、田中)

東北大が初の優勝

学生ヨット 関学を2点差に押う

三十三年度日本学生ヨット選手権大会は昨日の二十日は、午前九時から皇海浜公園で決勝三回戦が行われた。

この日久しぶりの晴天にめぐまれ、うねりはあったが、無風のコンディションで、熱闘を繰り出す六大学によって争がなされる見物された。朝の荒れに頼り、スポンサーの東北に有利で、デインギ一級一、二回戦で、片岡、スナイプ級では、前田、田中、三回戦は泉谷、鈴木がそれぞれ一位を占める。関学は、各々が上位に入って、総合一九九点をあげ、優勝の関学を二点差に押え、地元で健闘を続けた。

○デインギ級決勝 マ一回戦
①片岡、片岡(東北) 18歳
②金手(中) 17歳 片山、前田(関学) 16
マ二回戦 ①片岡、片岡(東北) 18歳
②金手(中) 17歳 片山、前田(関学) 16
マ三回戦 ①片岡、片岡(東北) 18歳
②金手(中) 17歳 片山、前田(関学) 16
スナイプ級決勝 マ一回戦
①泉谷、鈴木(東北) 18歳
②渡辺、田中(東北) 17歳
マ二回戦 ①泉谷、鈴木(東北) 18歳
②渡辺、田中(東北) 17歳
マ三回戦 ①泉谷、鈴木(東北) 18歳
②渡辺、田中(東北) 17歳



初優勝した東北大チーム

○スナイプ級小決、前田、田中 17
①泉谷、鈴木(東北) 18
②渡辺、田中(東北) 17
○総合成績 ①東北大学 199点
②関学 197点 ③中大 175点 ④京大 159点
⑤日大 133点

◆努力がみのつた
マ東北大学ヨット会長の藤と
マ優勝 東北大学

この優勝は、関学、中大、京大、日大、とつたという、関とスナイプのよみがこの結果をもたらしたもので、健闘を続けたい。

◆第40回全国高校学生ヨット選手権大会
マ優勝 東北大学

東北大学の優勝を報ずる河北新報

述べ、皆から喝采をあげた。更に海国日本に於けるヨットの意味を述べ最後にこの良き伝統を伝える様にと言葉を結んだ。次に東北ヨット協会から祝辞が述べられ、戦前、戦中、戦後の日本ヨット界の様子が述べられ、更に東北大ヨット部の秀れている点として、第1に先輩の良い事、第2に部長が率先してセーリングする事、第3に学生のフェア・プレーの態度を挙げ、この点から見て優勝は決して偶然ではない、来年も頑張る欲しい、オリンピック選手を東北水域から出したい、と祝辞を終った。続いて高須前部長から創立回顧談として、12年に創立の準備が行われ、13年に東北ヨットクラブとして発足し、これが学生掛に認められ、全国としても東北支部とした事、終戦迄8艇のヨットがあったに過ぎなかった事、戦時中海軍報国会に入っていた事等、終戦迄の詳しい部の状況が述べられ、更に現在の事等について話があった。最後に言い足りない事は後でコンパの席で話しますと付け加え皆から拍手喝采を受けた。続いて末松茂実氏から、当時の試合の事等の回想談が

述べられた。以上に応じて泉谷主将から謝辞が述べられ、引き続き救助艇の命名式が行われ「翠」と命名された。2時45分古川主務の閉会の辞でこの記念式典は無事終了した。」

(15号)

創立20周年の記念事業として進水した救助船「翠」は、赤一色の船体に6馬力のディーゼル・エンジンを載せ、練習を支え、多くのヨットマン・ヨットウーマンを育てる大きな戦力となる。

昭和35年には、教養部の山本宗一教授を東北大ヨット部初代の副部長として迎えた。



昭和31年当時のヨット部員
(於 松島ヨットハーバー)



インカレ優勝後日談

決勝で今井さんが続けて二回トップを取ったのは、西宮の七帝で続けて二回沈をしたのと一緒にヨット部史上に残る大記録であろう。塩釜の旅館で先輩、現役共に喜びの涙のうちに優勝カップでビールを飲んだものであった。翌日の北大戦は気抜けがして、皆つかれ切った中でレースが行われ、

勝つには勝つたが、ディンギーが僅か負けて、北大の尾関キャプテンをして「インカレ優勝の東北大をやぶった北大のディンギーは正しく日本一なり」と言わしめることになってしまった。

(15号 記憶生)



創立20周年記念写真 昭和33年11月2日（於 県営松島ヨットハーバー）



20周年記念事業として進水した真紅艇体の初代救援艇“翠（みどり）”

充 実 期

(昭和36年～昭和43年)

昭和36年は、33年のインカレ優勝という一つの頂点を迎えた東北大学ヨット部において新たな時代の流れを示す年と言える。松島は、東北だけでなく全日本レベルのヨットレースを開催する海域としてヨットハーバーの整備が行われていったが、これらと呼応するように東北大学が自らのヨット関連設備を充実させることで、“東北ヨット協会＝東北大学ヨット部”という存在から東北水域における東北大学という独立した団体として明確さを増していく時代を迎えた。この大きな流れを象徴する出来事が、昭和36年の艇庫の完成であった。6月21日に吉田浜公民館にて関係者の

出席の下に盛大に落成祝賀会が開催された。

「その日はあいにくの雨降りで、来客を大学事務局前よりマイクロバスでお送りした。その中には遥ばる東京白翠会より馳せ参じた加納寛文先輩、高橋三雄先輩も見え、その前には一きわ黒い顔近藤太郎君も見えた。午後2時より吉田浜公民館で東北大学学長、学生部長、同次長、ヨット部長、学友会運動部長、その他大学関係者、地元七ヶ浜町助役（町長代理）、吉田浜漁業協同組合長、花淵漁業協同組合長その他地元関係者70数人が列席し、なごやかに行われた。



完成した総2階の艇庫

出来上ったヨット艇庫を眺めていると、「あーやっと出来たなあ」という感じで一杯でした。吉田浜側堤防の根元で夏の風当りの良いことは吉田浜随一で、二階には先輩の部屋もあるそうですから諸先輩のお出を望んでいます。」（16号 島田平八副部長）

艇の建造からスタートした創立の時代から、昭和34年にヨット部創立20周年の記念に建造された救助艇“翠”、そして仕上げとしての艇庫所有と、昭和36年は本格的ヨットクラブが東北水域に初めて成立した年であった。

歴史的に見てもヨット部として艇庫を持つことの意味は大きく、多くの大学が未だに独自の艇庫を持てない現状を振り返っても大きなエポックであった。艇庫自身が持つ存在感、また、他の大学とは違うというある種の優越感、それらが現役部員の求心力となって働いていたことは、昭和36年以降の卒業生は身を持って感じていたと考えられる。新艇庫に住

み、大学に通う部員がいたこともそれを証明している。

36年は、出来たばかりの艇庫を利用して、8月に第6回国立七大学戦ヨット競技を開催した。これに引き続き、9月14日～18日には第16回国民体育大会のヨット競技（秋田県開催）を宮城県が引き受け、東北大学艇庫を本部として花淵・吉田浜海面にて開催された。大会3日目の16日には、義宮様がヨット競技を御覧になるため艇庫を訪れ、2階の管制室（現在は4年部屋）で昼食をとり、オリンピック選手と歓談された。

現在の艇庫の表札は当時の黒川学長の手になるものである。艇庫の大きさは現状の艇庫より小さく58坪であった。その後、昭和42年、45年、52年にそれぞれ改築・拡張され現在の姿となっている。

また、昭和36年はヨット部長が福島先生より山本先生に代わられた年でもあった。10月には、東京大学と慶応大学のヨット部員が横



艇庫2階管制室（現在4年部屋）での食事風景

浜沖で1名づつ遭難した。完全な湾である松島から吉田浜に移った年に、長年定期戦を行ってきた身内とも言える東京大学の事故は他人の出来事ではなかった。これにより安全を第一に運営を行うことの大切さを身をもって感じ、基本的活動方針として定着させ、“創部以来50年間無事故という”地味ではあるが

偉大な伝統を築き上げて行ったのではないだろうか。この当時、“吉田浜は松島海岸と違い外洋であり、これまで以上に安全なヨット部活動を行う必要がある”との認識が確認されている。近年、ヨットレースがますますスポーツ化の様相を深め、よりオープンな海面にて行われる実状を考えると、これもまた歴



艇庫に住んで

6月の中旬待望の艇庫が落成し落着いてタタミの上に寝られるようになりました。食当も一段と便利になり、一段と楽しくなりました。

三方がガラス張りの管制室から松島の島々をながめると又素晴らしい。

最初のものめずらしい気持からぬけ出ないうちに長い夏休みの合宿が始まりました。七帝合宿、整備合宿、七帝戦、インカレ合宿、インカレというふうに夏休みも終り、国体も我等の艇庫を本部にして無事終了しました。そして10月の末海苔網がどんどん沖へ延びて行くと共に整備合宿も終り、一応いそがしかった我々の生活も一段落しました。

11月以降我々二人は艇庫を管理するため来年の3月再び合宿の始まる時迄こちらから学校に通うことになりました。

朝6時50分の直通バスに乗り、学校で朝食をとり、2時50分または5時半の直通バスで吉田浜海岸通りの艇庫に帰り晩飯を作

って食べるのが我々の日課であります。

申し遅れましたが我々二人とは、笹林敬吾一工学部3年応用化学科と土居昭昌一理学部1年のことであります。

我々二人がこちらへ来た動機というものが全く一致しています。それというのも仙台に於ける生活というのが全くだらしなく我と我身がふびんになり、ようし新しく環境を変えて……と思ったからです。こちらに居れば必ず5時半のバスで帰らねばならないので絶体に夜遊びなんかできません。そして毎日よく勉強しています。実に素晴らしいことだと我れながら感心しています。先日も堀江先輩が来て「俺も家へ帰って勉強しよう」といって帰りました。

吉田浜の住人としてまた艇庫の主として、これからも3月迄こちらに住むので一応近所の家へあいさつ回りました。それからというのは時々差し入れがあり、とりたてのサンマを焼いて食べるのは最高です。(16号)

史的過程の一つであった。

「吉田浜は松島海岸よりも交通には時間的に不利ですが、港外が直ぐによい練習海面である点が勝れています。この最適の地に艇庫が出来たのですから、部員も充分練習ができるはずで、今後の努力如何がヨット部の隆盛を

きめることになるわけです。

なお、本年10月横浜沖でヨット練習中、強風のため、慶大生と東大生が各一名遭難しました。この点吉田浜は松島海岸と異なり、外洋ですから、慎重に行動されることを切に要望します。」（16号 山本宗一部長）



第16回国体の払い下げにより購入したフィンJ27、J28（当部最初のFRP艇）



東大ヨット部員遭難に思う

10月19日の午前横浜沖にて試合を目の前にして練習に励んでいた東大3年加藤君・慶大2年三井君が折からの突風のため乗っていたS級艇が転覆し行くえ不明になったという我々ヨットマンにとっては誠に遺憾に絶えない惨事が起った。東大とは定期戦、国立七大学戦等を通して互に馴染の深い大学であり我々としても黙って見ているわけにはゆかない。深く哀悼の意を表するとともに次の文を今はなき加藤君の御霊に捧げたい。

この世に生を与えられしより20余りの一つの短かき君の命であったが期せずしておそいかかって来た天命に直面したときはたして君は悔いることがなかったろうか。「生有れば必ず死有り早く終わるとも命の促しきに非ず」と君はすでに達観していたであらうか。我々にはそうは思うことは出来ない。やはり生への執着のためにもがき精一杯の努力をしたにちがいない。未来を夢見、希望に胸をふくらませて何物かを成しとげべく勉学にいそしみ、たまには遊び興じ又一方ではヨットの練習に励んでいただろうが、君の今までに学びとった、あるいは学びつゝあった知識才能技術を存分に生かし社会に出て大いに活躍することなく又ヨ

ット部員としては4年生から部を引きついただばかりで、最上級生となり部をとりまとめたり対抗試合で己の実力を未だ充分に発揮できず、今まで吸いとった養分で華麗な花を咲かせることなく従って実をみのらせることのできなかった植物のように、前途僚遠な君があたり命を海の藻屑と化してしまい「昨年の暮れには同じく人なりしに、今の旦は鬼の録に在り」と嘆いたことだろう。あるいは君は我々の未だ知ることのできない世界に住み「ようやく逆旅の館からのがれ霊の郷へ帰ることができた」といって我々の死に対する嫌悪をあざ笑っているかもしれない。

……我々も今年から波の静かな松島から波の高い外洋に近い所に練習場を移したが危険が常に密んでいて一步誤れば大事に到るということを君の尊い教訓から深く心に刻んで行動してゆきたい。君が何処か遠くの方から声を大にしてそのことを叫んでいるのが聞こえるような気がしてならない。我々は決して君の死を無駄にはしない。

いつも心の要として二度とこの様なことのないよう努める。君安らけく眠り給え。

(16号 工学部3年 堀尾公亮)



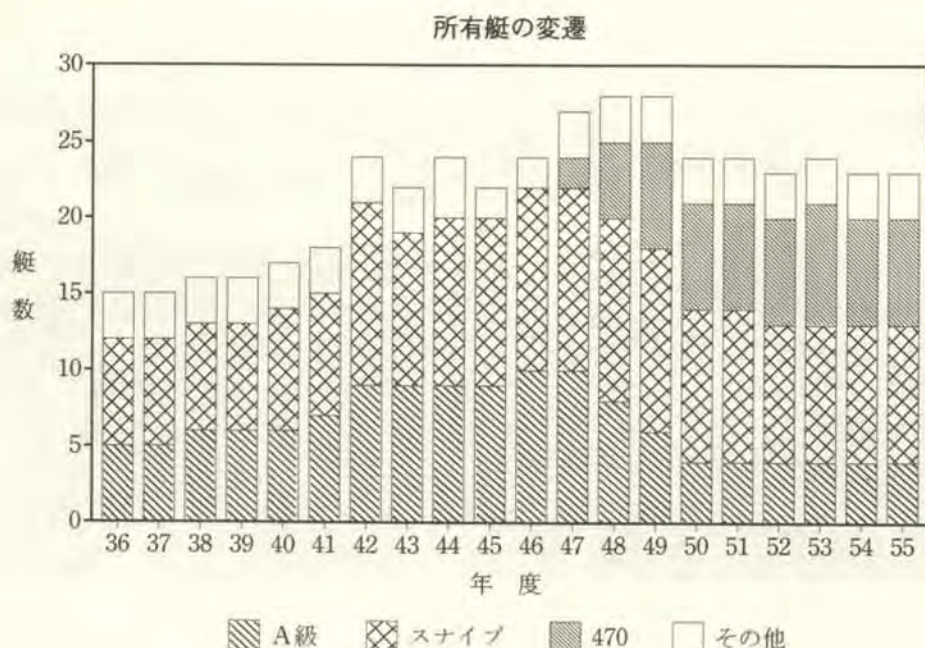
昭和37年頃の整備風景



塩釜から合宿所への足として活躍した吉田丸

これらのヨット部活動の底辺を成す設備充実や安全を重んじる活動方針が確立される一方、現役部員のレースにおける活動はどのようなものであったのだろうか。これまでは東北水域のリード役で常勝であったのが、東北学院大学の台頭によりインカレ本大会に出場する事が当たり前でなくなる時代に入った。これは、東北水域にとっては良いことであったと考えられるが、現役にとっては大きなプレッシャーとなっていた。また、本大会に出場しても予選敗退が通常の出来事となり、いかにしてヨット部を立直すかが大きな課題として現役、特に実質的にクラブ活動の方向を決定・運営してゆく上級生の前に立ちはだかって行った。この時代の問題意識として、部

員も毎年入替わり、運営主体も変わることを考えれば、画一された練習方法および運営方法はなく時代ともに変化してゆくべきものであるとの認識はあるものの、最上級生が卒業するにあたり自分の反省をもとに現役に残して（託して）いった言葉は意外に共通しており、その言葉一つ一つは現在のクラブ運営にも当はまるものが多い。ヨット部活動を取巻く環境、使用する艇は変わってもクラブ運営という側面では、いまだに多くの解決されない課題を抱えながら現役部員は活動をしているのかもしれない。ヨット部の卒業生であれば充実期の歴代主将が白翠に書き残していった言葉は、たとえそれらが単なる羅列であったとしても、この時代の現役部員の葛藤をこ



これらの言葉から思いおこすことは十分可能であらう。

シーマンとして生活する
 スポーツクラブである
 シーズンオフの使い方の充実、工夫
 基礎トレーニングが必要である
 部全員の協力と理解が必要である
 勝つための練習が必要である
 インカレ東北予選後の練習充実が必要である
 定期戦を増やす
 合宿での集中した練習を行う
 合宿に出ない者の対策をとる
 大レースの経験が少ない e t c.

インカレ本大会の制度面における変化としては、これまでA級、スナイク級両クラスの総合得点制であったものが、昭和43年からク

ラス別に変更されたことが上げられる。これにより、片クラスだけでもインカレに出場できる道が開かれるとともに、参加学校の拡大が容易になった。

充実期とは日本の戦後復興の証としての東京オリンピックが開催され、まさに高度経済成長の真只中を歩んで行くが、東京を中心とした学園紛争の広がりの中で、東北においてはその兆しはあるものの、未だ東北大学にはその影響が顕著には現れていない時代であった。

この状況を当時の島田副部長は、来たるべき時代を予見するかのよう一文を白翠に寄せている。

「現在日本中の大学は紛争の渦中にあり、東北大学も表面は一見静かなようであるが、底流は例外ではない。紛争の理由は色々言われており、その多くの原因の集まりであったり、

整備合宿風景
 (昭和43年春)



防波堤での腹筋トレーニング
 (昭和40年)

そのうちのいくつかであったりしているが、ここでは省いて、このような激動の大学における運動部のあり方、その中のヨット部の位置づけは安易に考えられるべき情勢にないように思われる。10年位前まではヨット部の悩みは土、日曜練習と学問の両立ぐらいが議論の対象になっておったが、現在の大学改革の中に於けるヨット部は何をその存在理由にすべきか、私には明確に分からない。ただ単にヨットをやることに意義がある、または人間形成の一環として有効である等々の理由だけで之からの学生を引き付けることは困難になるのではないかと危惧している。私などは単純にヨットはそのものに没入することに無限の意義があると思っているが、共鳴者は少なくなりつつあるような気がする。また選手制

度に対する基本的な疑問など大学生活の中で具体的に再検討する必要な時期に来ているように思われる。現役並びに諸先輩の関心を持たれることを期待しています。

事実ここ1、2年間に部員の減少という非常事態が生じている。新入部員の激減と旧部員の退部等、このことは一東北大学の問題だけでなく名大、中大等々全国的な傾向にあり、その原因を究明分析して早急に対策を立てる必要があると思う。その対策には抜本的なものと対処療法的なものがあるが、後者だけでも必要であろうと思う。その原因の一つに理由は分からないが、運動部員を別人種と見る傾向が強くなっている。大学入試への小学校、中学校、高校の傾斜によるペーパーテスト的人間しか大学に入れなくなった為だろうか。



追い出しコンパ（昭和42年1月 於 工明会館）

もしそうとすれば、どんな対策があらうか。抜本的には大学入試の全廃にまで及ぶし、応急的には運動部の何たるか、特にヨットとは何かを知らしめるヨット部の普及班まで作る必要があるのだろうか。

私には分からないので、問題の提出に止めておきます。諸先輩の御助言を待っております。」
(23号 島田平八副部長)

この時代のフィナーレを飾るのは、昭和43年5月9日に進水式をおこなったクルザー“日高見”の建造である。設計は横山晃、建造は小野寺ボートであった。東北水域におけるクルザーの主流はキング・フィッシャーであった時代において、これもまた一つのエポックを築いた出来事であった。

「クルザー新造の発端は東北大学の学内事件で学長が退陣して一応静まりました時に、その反省の一つとして学生に対する経費が研究費に比べて少な過ぎるという声が出て来て、各部局の費用の何パーセントかを拠出して学生経費に当てることになりました。その費用の支出について学生部の要求の中にボート部とヨット部の救助艇の項目があったのですが、その年は削られたので我々は可能性が無いのだろうと思っておったところ昭和43年に急に可能性が出て9月に入ってから予算が本決まりになりましたが、ボート部とヨット部の要求に色々の違いがあって難行しました。

学生部ではボートもヨットも同じ救助艇でよいだろうと軽く考えておりましたが、ヨットは耐波性に、ボートはスピードに重点があ



監督として指導にあられた大隈氏（慶応大学ヨット部OB）の送別会（昭和42年8月）

り、350万円の配分に苦慮しました。何回も折衝した結果共用は無理だとなり、別々に作成することになりましたが、ボート部はコーチ用なので余り金が掛からないのでヨット部で、250万位は使える見通しになりました。

そこで救助艇という名目は変えられない予算なので、その中で考慮したところ、現在救助艇として「翠」があり艇体は10年前にヨット部20周年記念のとき先輩の寄附で作ったものなので大分傷ついています、エンジンは新品に取換えたばかりで、しかも艇体は4、50万円で充分出来るので250万円は勿体ないと判断し、救助艇の名目を立ててヨットに近づける最大限界がエンジン付きのクルーザー

ということでクルーザーを考慮することになりました。そこでクルーザーを現在のヨット部に入れた場合にレース艇に対する問題など部内の運営上の問題が併発するので現役は最初反対していましたが、ヨット部も運営の基本方針さえ確立しておけばクルーザーも却って良いのではないだろうかと考えられるのでクルーザーを新造することに決定しました。私としても若し出来るのならFDとかドラゴンとかスターとかを考えたのですが、レース用艇では駄目な予算なので今回は涙をのみました。」
(22号 島田平八副部長)



今も変わらぬ昭和43年頃の吉田浜

昭和30年代と変わらぬ管制室での食事風景（昭和43年夏）





日高見進水（昭和43年5月9日）
（於 松島ヨットハーバー）



「日高見」号の由来記

山本宗一郎長

救助艇用のクルーザーの進水式を昭和43年5月9日、吉田浜の港で行い、これに「日高見」と命名した。

「日高見」は北上川の古称である。北上川は、日高見川つまり日高見国の川である。日高見はこの方面の人たちが蝦夷と呼ばれ、その国が蝦夷国とか、道奥国とか称されて、未開野蛮の国扱いされる以前、恐らく彼等自身がそう呼んだ。かれら本来の土地の名、国の名であったであろう。そして蝦夷の中央の国、日高見国びとの自負から、かれらはここを貫流する大河を日高見の母なる川という意味で日高見川と名づけたのであった。

現に日高見神社というのが宮城県桃生郡桃生町太田にある。三代実録に日高見水神とあるように、日高見川つまり北上川の水神を祀る神社である。

この日高見川の水神にあやかって新しく建造されたクルーザーを「日高見」号と名付けた。

艇名「日高見」の揮豪は本川学長によるものである。

なお「東北大学ヨット部艇庫」の門標の筆は、当時の学長黒川先生の筆である。

故事来歴は高橋富雄著「平安の都」による。
(23号)

そして、部創立30周年の節目の年でもあった昭和43年11月3日に、本川学長、七ヶ浜町長をはじめとする地元関係者の参列により創立30周年記念行事がとり行われた。

「東北大が初めて白帆を松島に浮かべてから30年、現在OBの数は200余名の多きを数えております。その30年目を記念して、昨年の11月3日の文化の日に創立記念行事が盛大にとり行われました。行事に参加されたOBは約50名、その他学校関係の方々が集まられたわけです。

式典は晴天も幸いして艇庫前の青空会場で行われたのですが、合宿所にある食堂のイスでは間に合わず、半分の方が立席で参加される事になってしまいました。

開式の辞のあとに述べられた祝辞も、そばのジャリ道を通るトラックの音や、海苔つみのポンプの音あるいは矢本から飛んでくるジェット機の爆音とにぎやかな音の中でとぎれ勝ちだったのは惜しまれます。御多忙中出席

された先輩各位、学校関係者もさることながら、本川学長の御出席は学校にごぶさた勝ちの部員には特に目を引くものでした。

祝辞を終えて、これまでヨット部発展に外部的に協力いただいた七ヶ浜町長、漁業組合長、郵便局長、高橋助役、小野寺ボートの小野寺篤氏、管理人の鈴木時夫氏にそれぞれ感謝状が白翠会会長から贈呈されました。

最後に現役代表の沢田キャプテンからお礼と、今後の方針についてのあいさつが述べられ閉会の辞をもって式典を終了しました。

先程3日に記念行事が開かれたと書きましたが、先輩の中には前日に仙台に着かれ昼ごろから部員の活動状況を観察される方もあり、その夜は11名の方が合宿所に泊まりました。

そこで脇坂、林両輩の提唱でコンパが開かれたわけですが、日頃ない金を出し合っている我々のコンパと違って、実に豪勢なものでした。

後にその一部を紹介しますが、先輩方も大いに若返って共に歌い話したものです。



30周年記念式典における
本川学長挨拶（於 艇庫前）

それで、式典終了後の対OBレースでも、コンパで意気まいた先輩が乗り、「きのうの話しはどうなったんですか」、「ナニ、まだこれからだ」とチョロチョロ吹いてくる風が大奮闘。誠になごやかな雰囲気でした。その間、交代要員を乗せたかよわい「翠」はもとより、おっちゃんの「利丸」や「日高見」も観戦組の先輩ですずなり。

夕刻、記念会は場所を換え、松島のパークホテルでレセプションが行われました。松島へは遊覧船をチャーターして回航したのですが、日曜の昼下り湾内は釣を楽しむ人でいっぱい、学院の練習風景もベロンコにバテ気味のようです。

福島会長の音頭で乾杯がなされ、先輩諸氏は酒の肴に昔のヨット仲間と思い出話に花を

咲かせておられたようです。

4時を回った頃、保田先輩から現役部員のために200万円寄付計画という有難い提案がなされ、先輩全員の拍手をもって受け入れられました。そして最後に渋谷先輩の万才三唱でこの30周年行事の全行程を滞りなく終了しました。」
(白翠23号)



微風のなかで行なわれた30周年記念OBレース



30周年記念会（於 松島パークホテル前）

模 索 期

(昭和44年～昭和47年)

東京を中心として起こっていた学生運動が、東北大学の教養部にも広がりを見せていた。

学生運動がクラブ活動に直接的な影響を及ぼすことはなかったようであった。しかしながら、自らの通っている学校の紛争は少なからぬ影響を与えたはずであり、ヨット部員にも何かしらの変化が生じていたと思われる。しかしながら白翠からこの辺の正確な状況を読取することは難しい。

「昭和44年6月から東北大学でも、紛争が教養部の事務局の封鎖に始まり、11月に機動隊による封鎖解除まで続いた。しかし、紛争はまだ終わっていない、紛争の中心が教養部であったため、私は昨年度は艇庫の方にはご無沙汰しました。運動部が紛争に巻き込まれなかったことは幸いでした。

昭和45年5月12日」

(24号巻頭言 山本宗一部長)

「大学紛争も一段落を終わり、地道な改革の時代に入り、表面の華やかさはないが永い道程に出発した感じです。ヨット部もその波の範囲外ではないが、スポーツには周囲の条件がどうなろうと変わらざるものがあると信じています。」 (24号 島田平八副部長)

「学生運動にそれ程傾倒したこともなかったし、先頭きって参加したこともなかった。しかし47年4月のあの紛争は決して忘れることがないと思う。あれは期末テストではなかったか。自分の大学の構内にいたという理由で、放水車に水をかけられ機動隊に追われ、新食からも追われるという異常な事態だった。構内のまわりを機動隊がかため、構内入口には教養部の教授どもが検閲をしていた。大学がこんな物とは思わなかった。すてきな所と思っていた。……あの時テストを受けた者は愚である。そしてテストを受けながら次の年に留年をした当時の1年生は愚の中の愚である。

そうして俺は留年をした。」

(28号 山本憲一49年卒)

全国的に大学紛争が広がり激しさを増す中で、ヨット界における学連は“インカレ採用艇種の変更”という大きな変革への準備をおこなっていた。

昭和44年2月9日、関東主将学連会議においてA級ディンギーに代わる学連新艇種として「470」が内定し、昭和46年、全日本学生ヨット連盟はその採用を正式に決定した。それまで日本のヨット界を支えている学連の艇種を代えることは、新艇種建造に伴う建造費

の負担増という経済的問題はもとより、これまで積み重ねてきた練習方法の変更を各大学に強制するものであった。しかし、トビラーズを持つプレーニング・ボートを採用することは、日本のヨット界の近代化ならびに国際化を学生ヨットを通して強力におしすすめる切札でもあったと思われる。

「学連新艇種「470」に内定

日本ヨット界の将来を左右する大きな要素の一つであるA級ディンギーに代わる学連新艇種問題が、仏艇の470に内定した事に関し、以下に記そう。

この問題の解答は、学生のみならず、日本ヨット界全体の総合意見でなければならない。

前提として、新艇種は体育会ヨット部という立場に立ち、シーマンシップの養成と、レーサーの養成という二つの面を兼ね備えたものであるという土台に立っている。過去3回にわたる全国大学ヨット部アンケートの結果によれば、新艇種は時代の趨勢して、スピン・

トラビーズ装備の二人乗り、プレーニングボートで、できればI.Y.R.U.Class Policy認定のインターナショナル艇で、しかも世界に広く普及している艇が良いという事である。

この全国アンケートの結果をもとに、新艇種委員会では日本ヨット協会技術委員会メンバーの全面的協力のもとに、ほぼ1年間にわたり十分な検討・討議を行った。

その結果、新艇種は以下の条件を持つ艇であることを確認した。

1. 安全性が確かな事（自力復元が容易である事も含む。）
2. 比較的低価格を維持できる事
3. 造艇規格が厳格な事（アローアンスが少ない事。）
4. 難易度が中級程度である事
5. スピン・トラビーズ装備のプレーニングボードである事
6. 外観が魅力的である事

そこでこの条件をもとに、新艇種委員会並びに技術委員会は以下の7艇種を挙げた。



初期のヤマハ学連用470艇
(デッキは水色だった)

外国艇 470、ファイアボール、ジャックス
スナイプ

国内艇 タイガー、プライド、バーゴ、デザ
インコンベの最上位入賞艇

(24号)

「学連新艇種「470」に決定

(26号)

全日本学生ヨット連盟では、過去40年にわ
たり使用してまいりましたA級ディンギーが、
もはや時代遅れのものとなったため、1972年
をもってA級ディンギーを廃止し、次年度よ
り新艇種を採用する事とし、新艇種は「470」
と決定しました。

新艇種への移行方法

	スナイプ	A級	470
昭和47年	3艇	3艇	×
昭和48年	3艇	×	3艇

◎3艇種を並行して移行しない理由

- ・大学運動部としての立場により、金銭的負
担が大きくなりすぎる。
- ・「A級」の廃止は、10数年前より時間の問
題とされていた。
- ・「A級」の存続の利点がない。」

一方、A級ディンギーの建造に始まった東
北大学ヨット部にとって、これまで学生ヨッ
トを戦前から支え、多くのヨットマン、ヨッ
トウーマンを育ててきたA級ディンギーの廃
止は、強い郷愁と、ある感慨をもって受け止
められた。

A級ディンギー・スナイプの2艇種による
最後のインカレは昭和47年11月博多で行われ
た。



すばらしきA級ディンギー

ディンギー屋にとって一番すばらしい瞬
間は、何ととっても強風でのジャイブの時
なのであります。何んて言ったらいいのか、
わからないけど、とにかく、ディンギーを
やったものでなければわからない心境なの
であります。次にすばらしいのが、前と同
様強風でのランニングなのであります。
セールを引き込んで、ワイルドにして、ス
キッパーはティラーを両手でかかえ、ク
ルーは体重を後ろにかけてバランスをと
る。ちょっとした気のゆるみが、全て沈に

つながってしまう。ほかにもいろいろすば
らしいことがあるけれども何ととっても、
極度に素朴で、人間的なのがいい。また、
強風だけでなく、微風でもすばらしさを発
揮するのです。そうです、ラダリングです。
スナイプよりも速くはしれるのはこのとき
だけなのです。

ぶかっこうだけど、とても人間的なA級
ディンギーよ
さようなら。

(27号 伊与田篤司50年卒)



A級ディンギーの思い出

A級ディンギーは、いよいよ終わりをつげるそうで長らく親しんでいた来たる者には愛惜の情を禁じ得ません。

昭和15年6帝大戦は、甲子園沖で行われました。このとき私に割当てられたディンギーは、グレーティングが前の方に1、2枚しか無い。まことにボンコツ艇ながら実によく走り幸運でした。クルーは中尾さんで、何しろ足がかりがなく、底がツルツルすべるので、急にヒールしたとき足がすべってようやく膝が引っかけって落水をまぬがれている状態になり、片手はシートを、片手は彼の手を引っぱりながらクローズホールドの好位置を保持し、結局トップでゴールインしました。このときは、我々は4位でした。

昭和16年秋、今の国体に相当する明治神宮大会の全国選手権の東北代表として出たときの艇は、日本大学のもので、完璧に整備された性能の良いディンギーでした。猛烈な強風のレースでとにかく沈しなければ上位になれるという状態でした。追風では、ホースにまたがって、バウの水中につっこむのを防ぎながら、股ぐらの下のティラーを操作をしました。15メートルの風と三角波とは、30年前のことながら、鮮やかな記憶に残っています。このときは、近畿が1位、これと同点乍ら着順の関係で2位となりました。このときの好成績は艇がよかつ

たことが幸いました。当時の物資欠乏を示すようにメダルは陶器で作られていました。

セールやセンターボード、ヒールのさせ方など、微妙な操作の面白さはディンギーの特徴でしょう。定年近い私達の少年時代から、ディンギーはずいぶん長い寿命を保ったものと思います。

(27号 小野弘智16年卒)



また、日高見による長距離クルージングを現役とOBにより行ったり、クラブの活動の一環として本格的に練習に取入れようとしたのもこの時期である。

この時代は高度経済成長の下、学生生活としては大学紛争、ヨット部としては競技艇種の変更とこれまでのクラブ運営の前提となっていた体制が大きく変わろうとした時期であり、部員が様々な価値観、社会変化に直接さらされていた。他の時代と比べた場合、その当時の学生生活、ヨット部生活はヨット界以外（より外部）からの影響を強く受けることになった。その結果、部員の興味が様々な方向へ流れると同時に、他の時代とは異なった形でクラブの存在意義を部員が自ら問うことになったのではないだろうか。すなわち、留年する部員が増加する一方、途中退部による部員の減少が見られるが、女子部員が久し振

りに復活するという変化にとんだ状況が形成された。

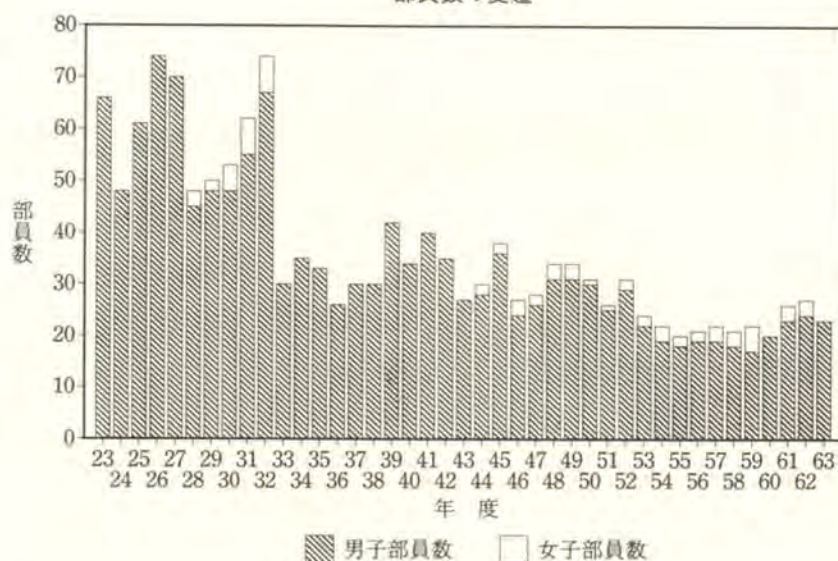
変化の激しい時代は、そこに生じる様々な変化をマネジメントするある種の大きさを運営サイドに要求するが、4年間という短い期間を駆抜けて行く学生にとって、統一されたイメージ、求心力を形成するのが困難な時代であったのも事実であった。

昭和45年には、東北大学体育会ヨット部部則が制定され、部の活動に対して細部に渡った取決めがなされた。この部則は、これまで経てきた時代、すなわち充実期の状況を前提として東北大学の新たな方向を示す、言わば充実期の総括としての性格が色濃くでているが、ヨット部を取巻く環境が大きく変化していくこの時代に忘れられた存在になっていったのは皮肉なことでもあり、また、必然でもあった。



追い出しコンパ（昭和48年冬）

部員数の変遷



先輩ニハ弱ク後輩ニモ弱ク

先輩ニハ弱ク

後輩ニモ弱ク

女ニモOBニモ弱ク

タダ体ダケハ丈夫ナノヲモチ

強欲デ

決シテオゴラナイコトハナク

イツモニヤニヤワラッテイル

1日ニ250円デ

米3合ト味噌汁トタマゴト

少シノ野菜ヲ食べ

人ノタバコヲ吸イ

アラユルコトヲ

人ノコトハ見ズ聞カズ

ソシテ忘レル

松島ノハズレノ海ノ上ニ

小サナヨットヲ出シテ

東ニツメテ走ッテイル舟アレバ

前ニ行ッテブランケン

西ニボートデ走ッテイル舟アレバ

スターボードデ行ッテジャマランテヤリ

南ニマストノ折レソウナ舟ガアレバ

行ッテ早ク折レチマエト言イ

北ニ沈ソウナ舟アレバ

オモシロイカラ沈シロト言イ

舟ハコビトノトキハ

合宿所ノ裏ニカクレ

寒サノ春ハ

オカキンカ食当ヲヤリ

ホメラレルコトハナク

ジャマニモサレズ

ソウイウ風ニ

ワタシハナリタイ

(24号 青木 強47年卒)

スポーツ化の時代（昭和48年～昭和54年）

昭和48年、この年より470級が学生ヨットレースに採用される。

部の対応方針には新クラスに長期的に取り組む姿勢が見られる。

「ディンギーは廃止され、また4年生が2人しかおらず……2人の4年生が別れてそれぞれを担当するかどうかは迷ったが、むずかしい船というわけで3年生に2年間かけてうまくなってもらおうという考えから4年生2人はスナイブに乗り、470を3年生に任せた。」

（28号 山本憲一49年卒）

又、新クラス興隆を画する意識は学内に対してのみならず東北水域全体に及んでいた。

「5大学のうち470級を3艇、あるいはそれ以上所有しているのは、弘前大と東北大だけです。何らかの対策が講じられない限り、今年度の470級東北インカレは2校の対抗レースになりかねない状況です。……うちから他大学へ貸すという方法も考えられますが、うちの大学の場合は部員数が多く艇が足りない状態ですし、また国有財産としてある艇を長期にわたって貸し出すことは不可能です。レースの時だけ貸すという手もありますが、学院大などでは1艇だけの練習で3組のメンバーを養成しなければならず、また部員の人数からも、今年度の470級への参加に難色を

示しています。今年は石油危機の影響からFRP艇が大幅に値上げされ、今後ますます経済状況も苦しくなって来るものと思われます。この状態が、ディンギー時代のように加盟大学全学の参加という状態になるまでにはかなりの時間を要するでしょう。……参加大学をふやしていくことがこれからの大きな課題だと思います。」

（28号 奥村一男50年卒）

今でこそ470級は学生ヨットの主流の様な感（これに関しては異論もあろうかと思われるが、470級の、スビンネーカー、トラビーズ帆走にみられる表面上の華やかさ、オリンピックにまで続く舞台設定の広さ、又、後にスナイブ級がFRP艇主流となりタイトリグに変遷して艀装もレース展開も470級に追従する形になった事など想うと、この感は否めない）を抱かせているが、約15年前には先行き不明瞭な新クラスであり、当部が東北水域の先導的立場として育てていかなければならないものであった。

470級の登場と並行して、スナイブ級にも変化が見られ始める。FRP艇の台頭と普及である。

昭和49年秋、当部でもFRPスナイブ（J21317）が購入されている。インカレ本大会

では、既に、珍しいものではなかったようだが、当部では初めてのものである。

FRP製のスナイプは、当時、帆走性能において特別な改善がみられたというわけではなく、木の替わりにプラスチックで造ったという感が強かったが、その密閉ダブルボトム構造は、沈後の自力帆走を可能にするという点で高く評価された。それは、レース展開上もさる事ながら、練習時における安全性、沈救助に要する練習の中断時間の短縮という観点からも重要な意味をもっていた。この時期、学連では、救助体制の具体化徹底を取り決め、当部でも初の正式救助船を購入している。

「昭和49年度上半期には、470級2艇、下半期には、待望のFRPスナイプ（奥村チェ

バスコ）1艇、並びに、救助船（東レ、レスキュー-21）を、島田部長をはじめOBの皆様方の御援助により、学校より購入していただきました。……全日本学生連盟の決定事項も5年の猶予期間を過ぎ、49年度中に、強風下においても安全に救助できる船の所有を迫られ、翠では安全検査基準に合格する能力はなく、新救助艇購入の運びとなりました。」

（29号 猪野寿男51年卒）

その後、昭和52年・54年とFRP艇の購入は続き、昭和54年以後、当部のレース艇は全てFRP艇となる。

艇体の変化という大きな様変わりを迎えたこの時代、インカレにもいくつかの変更が見られる。



泉ヶ岳青年の家にて春季トレーニング合宿（昭和52年3月）



インカレ本大会470級のスタート（昭和52年8月 於 江ノ島）

「本年度のインカレは8月25日から28日まで神奈川県湘南港江ノ島ヨットハーバーで行われることになりました。レース方法はこれまでとは大分違っています。……

①予選の廃止

例年のレース回数不足をなくすために予選を廃止し決勝レースのみ5レース行う。

②1チームの艇数

従来通りチーム3艇とする。決勝レースのみなので60艇のレースとなる。

③レース艇

レース艇は自艇とする。従って参加校は江ノ島まで運ばなくてはならない。

以上ですが、レース回数の増加、自艇参加により、内容の充実したレースができる反面、艇輸送費による参加校の負担増が問題となり

ました。今後インカレは自艇参加とする方針であり、抜本的な対策が必要と思われます。」

（31号 勅使河原栄幸53年卒）

つまり、開催時期が昭和50年に晩秋から夏へ早まり、昭和52年よりインカレ本大会は予選廃止により60艇を越えるビッグフリートレースとなる。これと同時に、レース艇は全校自艇参加となり、以後現在まで継続することになる。但し、開催時期だけは平成元年から11月にもどった。

開催時期変更は、当時の大学生就職活動が秋に集中していたため、それとインカレとの重複を避けて早められた結果だが、その後就職活動が早期化し、再びインカレとの重複が問題となって、平成元年、秋の開催に戻った

と聞く。社会情勢の反映が意外なところに現れ、興味深い。

ビッグフリートレース化により部内に起こった具体的な変化として、新しい練習海面の開拓が挙げられる。ビッグフリートレースは、文字通り、多くの艇が入り乱れてのレースとなるため、スタートラインの確保だけを考えてみても、いきおい、より広い海面にレースコースが設定される事になる。そうした海面では、同タックで10分、20分続くクローズホールド、30分続くデッドランなども珍しいことではなく、それを想定した練習をするためには吉田浜前の海面は狭すぎた。

「インカレ予選が終わってからは、出来るかぎり箱島の沖で練習を行いました。沖には合宿所前のような複雑な潮の流れ、および地形の影響によるコースの片寄りがありません。風だけが割合周期的に振れ、教科書通りのレース展開も可能で非常に面白い海面です。ロングレグでの艇隊帆走、レースも出来、大きなレースの助けになったと思います。」

(32号 庄司一夫53年卒)

箱島の南は、地理的には菖蒲田浜の沖であり、仙台新港に続く外海である。ここを練習海面とするには、吉田浜からの往復に要する時間の確保、昼食の問題なども考えなければならなかった。

「昨年からは沖へ出て練習するようになり、昼食をわざわざハーバーへ戻り、艇庫で食事

するのは時間のロスと思い、レスキューで弁当を運び海上で昼食をとることにしました。昼寝さえできた一昨年を思うと随分厳しくなったと思います。3年生がスキッパーをやる新人レースも毎日行えたし、クルーの勉強にもなり、良かったと思います。」

(33号 羽成一夫54年卒)

部員は具体策をもって臨み、広い海面、安定した風を求めて外海へ外海へと乗り出していく。これが下地となり、昭和54年、ビッグフリート化したインカレ本大会の地元開催を可能とした。

その昭和54年を最上級生として迎えた一人の次の言葉は、470級採用を契機としたレース指向の強化というこの時代の方向を逆説的に象徴して印象的である。

「ヨット部が、国家の税金と100人にも達しようとするOBの寄付によって、その運営が成立している以上、部の第一目標がレースに勝つことであるのは言をまたない。しかし、だからといって昨今全国的な流行のように、ヒステリックに練習量をふやすのはどうかと思う。こうしたレース過熱が、ひいては、現在のオリンピック至上主義や偏重された至上主義を産みだしている気がする。大学のクラブはプロではない。アマチュアである。アマチュアが一番大切にすべきなのは、“勝利”でも“根性”でもなく、“遊びの精神”だと僕は思っている。……数多きOBの中でも、『レースに勝たねばならぬ』と声高に言ってくれる人は数多くいらっしゃるのだから、こ

ういう毛色の変ったことを言う人間がいてもよいと思う。……では4年間を大いに遊んでください。健闘を祈る。」

(34号 久永 均55年卒)

この時代、470級という新艇種の採用により、操船・帆走技術、レース展開上の戦術・戦法の習得・開発をめざして全国一斉にスタートラインに立って走り始めた感があったはずである。その感覚は“より速く”という原初的課題を新たに浮き彫りにする。その雰囲気は当然スナイプ級にも伝染していく。そうして、総体としての部は、“より速く走る

事”、“レースに勝つ事”を直接の目標として再認識して進む。

新クラス導入、インカレの様式変更などの外的要因を通して、部は、好むと好まざるとにかかわらず、“ヨットレースクラブ”というスポーツクラブへの道を歩み始める。



昭和54年琵琶湖における七大戦（スナイプ級1位、470級3位、総合2位）

市民スポーツ化の時代

(昭和55年～昭和62年)

昭和55年、部員総数18名という戦中期以来なかった少数集団となる。部員数減少は、前年19名、前々年22名と、既にその傾向が現れていたが、この年、底に着いたという点と、最上級生が3名、以下年代順に6名、3名、6名からなる苦しい構成であったという点で特筆したい。

18名といえば、両クラスレギュラー12名を除くと残り6名。ここから救助船要員や食事当番を出すと、何の余裕も残らない。特に1年生が入部する前の秋の活動が容易でなかった事は想像に難くない。しかも、3名しかいない最上級生のうちの1人(主将)が、眼疾のためセーリングを断念せざるを得なくなり、彼はその後終始救助船上から部を率いた。

この年は、前年のインカレ地元開催にひき続き、七大戦を吉田浜で開催する年であり、これはかなり危機的状況だった。

「本年は恒例の七大戦の地元開催の年です。昔の七大戦(旧帝大戦)を経験された先輩諸兄には大したことはないと思われることでしょうが、部員の減少と在仙OBの老化により人員不足を来たしており、さらに最近は各大学当局ともインカレなどよりは、七大戦に払う熱意は大したもので、参加種目も毎年増加して、この大会の成績いかにが諸々の経費に

もはね返ってくる現状です。去年のインカレ本大会の不成績の原因の1つに、地元開催なのに部員数の減少がある。運動部を運営して行くには質の良いやる気のある部員だけの方がやり易いことは確かであるが、ヨット部のように七大戦でS 2隻470 2隻ずつ、インカレで3隻3隻で対抗戦をやる種目で、しかも整備等の陸上要員も確保するとなると、1年生は戦力にならないので、最低30人は必要である。部員の増加運動に批判的な一部のOBは必要条件と充分条件を感違いしているのではないだろうか。何故部員が集まらないのか、徹底的に情勢を分析して部員の増大を計るべきではないだろうか、いまのままでは、七大戦の準備運営とレース参加は不可能と思われる。現役、OBの奮起を持って大会を成功裡に終わらせたいものと念じている。」

(34号 島田平八部長)

以来、部員数は増加せず、一時期(昭和61、62年)1年生が8名、13名と入部したものの、卒業まで残ったものは両年共4名であり、依然として総数20名程度という状態が続いている。

この間に『白翠』が刊行されなかった年が2度もある事は、部の活動に殆ど余裕がなかった事を推測させる。

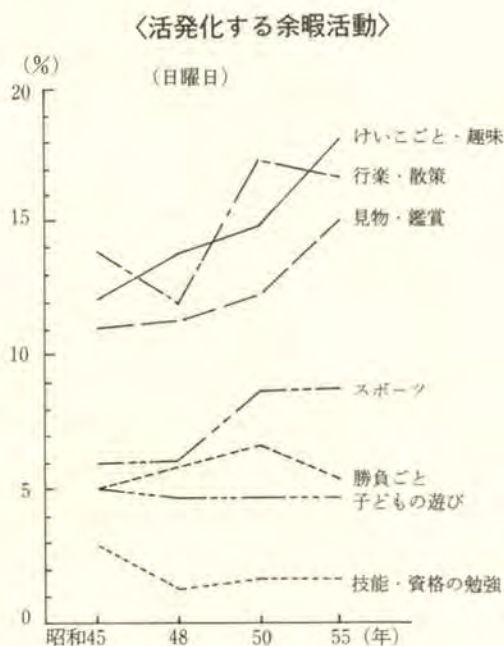
こうした少人数化は、当時いわれ始めた『大学生一般の体育会離れ』をそのまま反映したものと思われるが、妥当な資料はない。資料のないまま付け加えると、マリンスポーツブームの到来も影響した様に思われる。丁度この時期“ウインドサーファー”等のセーリングボードを核としてこのブームが訪れ、ヨットもさほど珍しいものではなくなり始めていた。そのため、ただただ物珍しさで部を訪れる人間が減る一方で、又逆に、華やかなイメージだけ抱いて入部したものの運動部としての厳しさに失望して去る、といった事があったのではないだろうか。大学ヨット部以外にヨットに接する機会が増えていた事も相乗

効果となっただろう。

こうしたヨットの一般化とでも呼ぶべき世相は、他面、女子部員の増加の遠因にもなったように思われる。

昭和55年以後、白翠会会員名簿に女性名が連なり始める。数えてみると昭和55年～60年の6年間でのべ6名となる。それ以前の40年間で7名だから、これは注目に値しよう。しかしながら、ヨット乗りとして4年間を過ごした者は6名のうち1名で、多くは艇に乗らないマネージャーとして活動した。それにしても、というよりそれこそがこの時代の特徴の1つなのかも知れない。20名そこそこの人数で活動し、陸の上の仕事は女子マネージャーの手を借りる。女子マネージャーはそういう形でも部を離れる事なく、卒業までつき合う。明確な根拠はないものの、部員の少人数化、女子部員（マネージャー）の頻出の背景にヨットの一般化が垣間見えてならない。この時代、ヨットが世に拡がる一方、大学ヨットはより専門化していく。特にスナイプクラスでは、艇体のFRP化が着々と進み、昭和59年、部の所有艇6艇（スナイプのみ）全てがFRP製となる。これにより、木造のものはリストから姿を消し、以後、シーズンオフに行なわれていた恒例のペンキ塗り合宿は行なわれなくなった。

スナイプは艇体の材質変更もさる事ながら、それを前提とした艤装形態の変革を迎える。FRP化したスナイプはそのまま470の後を追う様に、ルーズリグからタイトリグへと移っていく。



備考
 1. NHK「国民生活時間調査」による。
 2. 全国民（15歳以上）の行為者比率である。



帆走中のスナイプ級（平成2年）

そもそもスナイプ級は、470級と違って一造船所規定のないクラスであるため、クラスルールの範囲内でとりうる形態は多様性に富む。そのため、レースでの勝利追求が進む中、クラスを越えてのライバル模倣？として470化していったのは当然の成り行きかも知れない。

因に、かつて木造スナイプにおいてもウッドマストをデッキ上にタイトに固定していたものもあったが（当部においては昭和47年廃艇の445が最後）、それは多分にマストが倒れない様支持するためであり、今日のタイトリグとは質が異なる。今日のそれは、マストのベンドコントロール即ちセールシェイプコントロールを意図しており、変化する風波に合わせて即時的にセールの形を変える事を目的としている。

この結果、マストのフォアレキは殆どなくなった。つまり、スナイプ乗りは、フリー帆走時の有利さを捨て、クローズホールド時の有利さをとった事になる。これは、第1マークまでのクローズホールドの走りが、レースの勝敗を左右する事の多いビッグフリートレースに対応するものでもある。

このように、470クラスの学連採用を契機とした走りの追求、レースでの勝敗重視化は増々進み、スナイプクラスの形体、レース展開の変貌をもひき起こしていく。

学生ヨットは、愈々、複雑精妙なレーシングディンギーとなっていく。

ところで、艀装・帆走上の技術は、実業団を含めたトップレーサーひしめく水域を中心に進んでいく。又、ビッグフリートレースにおける戦略・戦術は、慣れによる体感会得に

依るところが大きい。学生ヨットの特殊化・専門化が進むにつれ、それらの条件に恵まれた関東・関西・北九州水域が常にインカレ上位を占める様になっていく。

部の上級生はインカレに出場して初めてその事を実感するが、警句・打開案を言葉として残すことしか出来ず卒業していく事が続く。

「全日本を終って考えられる反省で、最も重要だと思う事を1つ述べ、来年度の目標として検討してもらいたいと思います。

クルーにコースをひかせること。この一言に尽きると思います。……

しかし、ここによい例があるので紹介します。今年度全日本で3位に入った国立大学では、クルーに完全にコースをひかせている。条件的には、東北大とほとんど変わらないが、大きく違う点が1つだけある。それは、1・2年の知識及び技術である。」 (35号)

「しかし、いつの間にか部員不足、予選敗退というサイクルが巡り来て、全国レベルの情報、経験が断たれてしまった。本大会で勝つには、先ずスタートが良いこと。そして走り負けないこと。結局はこの2つである。しかし、現役がこの簡単な言葉を聞いたとき、具体的な技術、身近な体験を思い描くことが出来ないのが現状である。」……

近頃の競技ヨットの様々な技術を紹介する雑誌や情報の数は、私が1年の頃の比ではないくらい多い。しかし、体験が減少しているように思える。様々なフィッティングやレー

スの運び方の情報が入ることは、競技をする者にとってはとても幸せな事であると同時に、これを自分の体験として消化していかなければならない荷物を背負ったのだ。」

(36号)

「クローズでは、我々が風を逃しながらやっと走っていく中を、上位校は、ビタッとヒールをつぶしてぐいぐい進み、フリーでは、ローリングも余りさせずうまく波にのってすべっていました。

この差をいかにして、縮めるか。結局は、どれだけ走り込めるかだと思います。」

(37号)

「インカレ本大会において感じたのは、やはりボート・スピードの差です。軽くて順風ぐらいの走りやすい風の場合でも、数分間走ると2〜3艇身は確実に差はでます。微風・強風ならば、もっとひろがるでしょう。今回の江ノ島においても、はっきりしたコースというよりも、ボート・スピードの差が直接順位に現れているといえます。その差の理由はやはり技術（ハンドリング・セールトリム・ヒールのとり方など）の差もあったことは確かですが、チューニングもやはり重要な要素だといえます。」 (38号)

「やはり全国で勝つには、そのレベルのボート・スピードという事に尽きると思います。では、どうするか。こちらから出向いて、関東の実力校の合宿に参加させてもらう。艇

の都合がつかないならこちらからレンタカーで運搬してでも。又、トップレーサーを何日か吉田浜に呼んでコーチを受ける。セール購入の際、出向いていってチューニングを指導してもらおう。等々が考えられると思う。」

(39号)

かくして昭和62年。インカレ予選で敗北をきし、七大戦で総合優勝を果たすという、部の実力を測るに難しい成績を残して創立五十周年を迎えた。

近い過去は現在に直接継がっているだけに、4代部長に樋口部長を迎え、新たな半世紀へ踏み出す東北大学ヨット部の今後への想いを、第50代主将の言葉に借りて本稿を終える。

「62年度の成績は、インカレ予選両クラス敗北、七大戦優勝というものでした。この結果について、(1)実力は十分あったのに不運も手伝って学院に負けた。(2)学院に負ける様なチームが七大戦で優勝するということは国立七大戦のレベルが低下した。という2つの見方が考えられます。「冬の時代」といわれていた部が、この両極端な成績からは「いっそうひどくなった」とも「春をむかえた」とも考えられます。……

後輩諸君よ、東北大学学友会ヨット部を「氷河」にするも「真夏」にするも一にも二にも君らの手腕にかかっていることはまちがいない事実なのだ。東北大ヨット部は1つの転機をむかえている。」

(39号 柳沢一郎63年卒)



20年ぶりに七大戦総合優勝を果す（昭和62年7月 於 セッカ浜）

外 史 —クルージングの歴史—

内海から大海原へ出る心のときめき。この気持ちは、今も昔も変わりはない。ヨット部におけるクルージングの歴史を、過去の「白翠」から抜粋してみる。

東北の海に初めてヨットが浮かんだ昭和13年3月、この頃は、レースはなくただ走るだけ、クルージングを中心に練習がおこなわれた。そして8月、初めての遠乗りを実施する。小野・関口両氏は、ディンギーにて「松島」～「馬放島」～「嵯峨溪」を経由して東北須磨に一泊、翌日は、貞山堀を経て松島湾へ帰った。又、勝屋氏、吉田氏は、ヨレとディンギーで菖蒲田海水浴場へ行った。

「東北須磨へ行った時は、松島湾に面した外洋は丁度風の強さも良いようでしたが、一步嵯峨溪に出てからの追手は白波が立って、一寸心細くなるよりはゾッとしました。」

(1号 小野弘智16年卒)

その後、部はレース練習が中心となったが合間を見付けて、「巡航」と呼ばれるA級ディンギーによるクルージングが松島湾の中で行なわれた。小学生が遠足に出掛ける時の様なウキウキした様子が白翠にも記載されている。戦争の色が濃くなってきた昭和17年9月

2日、3泊4日の予定で「巡航」が行なわれた。メンバーは7人、寺田・近藤・宮沢・斉藤・原田・中本・小池・望月の各氏である。キャンプをしながらの「巡航」、このときの、最初の宿泊地は、「大高森」である。

「桂島に寄って、海水館に預けた天幕その他露営の道具を積み込むと、我々は愈々巡航の旅に立った。第一宿泊地大高森を目指して…。

犬島の右手を通して大懸ケロから入る。夕日を一杯に受けて輝く白帆、黄色の波を掻き分けて我を追う灰色のイルカ、あのスフィンクスにも似た岩の塊の間隙をすれすれに狭い水路へと入って行く気持ちはわすれられない。漁師が一行横隊でハゼを釣っているのを見ながら大高森の入江に入る。」

当時の漁師はハゼを釣っていたのであろうか。その日は、大高森の棧橋脇の小屋に泊り、焚火をかこんで、お喋りをしながらの楽しい夕食の後、床に就いた。夜中、蚊の大群に悩まされ、沖合のヨットに避難して眠りについた。

2日目は、大高森に登頂後出艇した。途中、昼飯も忘れて小エビ取りをしたり、突然の強風にあたりしたが、夕方には、石浜につき、

鈴木さん方へ泊めてもらうことにした。

「寺田達が市場で買ってきた鰹一匹は、小池が手際よく調理した。鰹はサシミ、煮付け、ハゼはカボチャといもと一緒に天婦羅にし、飯は鈴木方で炊いてもらい、六畳に八人で天幕にくるまって寝た。」

3日目は、快適な風のなか、東名まで往復し、再び石浜に泊まった。

4日目は、石浜を出て11:00頃、松島へ帰った。最後にこのクルージングでの成果を次の様にまとめている。

「この巡航では、天候の予感、カキ棚の位置等多くの収穫があったが、それにも増して部員相互のつながりが最大の収穫であった。」

(3編共2号 望月孝夫19年卒)

保有しているヨットの変化がクルージングの歴史も変えた。昭和18年5月2日、待望のL級が入った。それまで、湾内で甘んじていた「巡航」であったが、夢は一気に外洋に広

がった。5月27日、渋谷氏応召の為の送別巡航を兼ねた荻浜往復日帰り「巡航」に出掛けた。メンバーは7名、渋谷・瀧藤・望月・石原・近藤・原田・小池の各氏である。

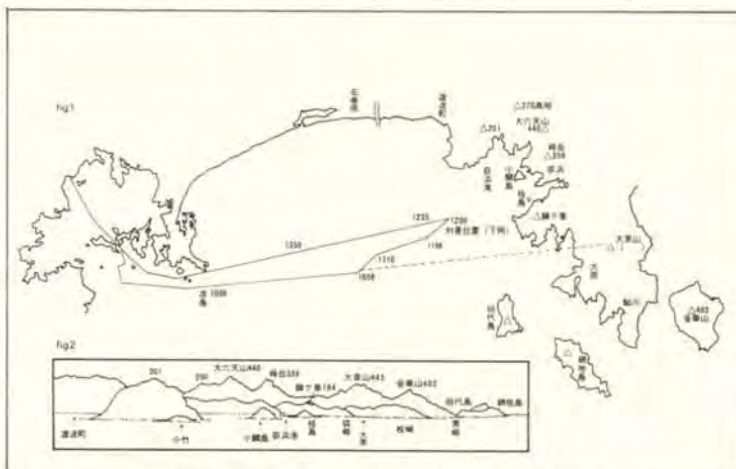
「渋谷澄男が六月二日応召となり、帆走部生誕以来のヨット生活最後の思い出として、到着以来我児の様にして手入れしたL級で外洋を巡航したいとの希望により、整備は尚不完全であったが、五月二十七日我々としては破天荒な牡鹿半島往復の壮挙を決行した。」

時は太平洋戦争下。湾内であった軍艦と手旗信号を交換した。

「船入島西側に海軍特務艦仮泊中。手旗信号を以て「ワレワテイダイハンソウブナリ」カイグンキネンビヲシユクシテヲギノハマニユカントス」応答あり。可なり離れてから艦上より送信あり。距離と背景と未熟の為、解読不能。「ハイケイワルシヨメヌ」応答後小時

して艦橋の頂上より又送信ありたるも、又読めず、赤面す。手旗の猛練習の要を痛感す。「ヨクミエヌ」サキライソグ「サヨナラ」を送り進路を波島に向く。」

初めは順調であった風も、石巻の大煙突が見える頃から弱まり、荻浜湾寸前まできて、入港をあきらめる事となった。



L級による初めての外洋巡船経路(昭和18年5月27日)

「12:00 既に萩浜湾に入り小鯛島・桂島も指呼の間に来たれどもSEE-0.5にして殆ど進まず。入港すれば本日中に松島へ帰港し得ぬので、涙を呑んでターンす。」(3編共3号)

その後、日本は敗戦を迎えた。

戦後、ヨット部は活動を再開し、ディンギーによる近海のクルージングも行なわれたとも思われるが、白翠への記録はない。ヨット部も充実期にはいった昭和37年、スナイプ2艇により、金華山へのクルージングが実施された。メンバーは笹林・土居・井上・脇坂の四氏。使用艇は、425・426であった。

8月3日、霧の中、吉田浜を出発。順風に気を許し、石巻の寄港の予定を変更し、金華山直行にしたものの、途中で風が落ち牡鹿半島の先端付近で夜になってしまった。

我々は暗闇の中で二艇をシート連結し、吹きだした風を一艇に受け、他艇を引いた。「もう一つ岬を廻ろう。そこに栈橋がある。」しかし、岬を廻れば灯も何もない。熱気を帯びた風は次第に強くなり、メインを下ろしジブのみで走る。夜光虫が白波の中で我々を嘲笑っている。どうしよう。一晩走っている訳にもいかぬ。22時、北西方向に「灯」を発見、ワラをもつかむ思いで灯に近づく。そこには大きな玉石とコンクリートで固められた粗いスロープがあり、十数隻の和船が揚げられていた。工事中のケーブルワイヤーのためマストを倒して接岸。備品の陸揚げ、艇のアンカーリング完了。救われた気持で一服する。」

和船の陰で虫に邪魔されながら寝た。

翌日になって、そこは、「新山」という、鮎川とは牡鹿半島反対側の部落である事がわかった。金華山を通り越してしまっていたのだ。出航しようとしたが、西風が次第に強くなり、旅館を見付けて待機した。夕方、台風崩れの風が東に変わり、新山は危険になった。漁船に頼んで曳航してもらい、激しい波にもまれながらやっとの思いで、鮎川港へ避難する。次の日は、風も良くなり、6時過ぎ、港を出て金華山に向かう。

「北西4〜5Mに乗り、岬のブランケットを食ながらも一時間余りで金華山栈橋に到着。あれ程まで期待していた上陸なのにたいした感慨もわかぬのは、二度までも金華山を通り越し、昨日一日は金華山を間に白波を挟んで眺め暮らしたからであろう。黄金神社にて、帰途の安全を祈って計15円也を投入する。9時30分、栈橋を離れ帰途につく。……」

16時30分、夕日が艇庫の真上に沈もうとしている頃、吉田浜到着。目的地であった金華山に着いた感激よりも母港吉田浜に帰った感激の方が大きいとは……。」

(2編共17号 脇坂菊雄40年卒)



昭和43年、クルーザー日高見の進水により、クルージングの歴史はまた新たなページにはいった。初期の日高見の活動状況は、25号に記載されている。

43年 5月 進水
5～6月 松島湾内基本訓練
7月 松島～石巻（約40km）
8月 吉田浜～鮎川（約80km）
松島～金華山（約100km）

44年 4～6月 松島湾内基本訓練
7月 松島～鮎川
松島～石巻

8月 松島～金華山 二回

45年 5月 TORC主催金華山レースに
オープン参加
8～9月 吉田浜～江ノ島
11月～12月 松島湾

往路 昭和45年8月8日（土）～8月14日（金）
艇長 中村栄一

大山健二 臼井康雄 川村大進

復路 昭和45年8月23日（月）～9月1日（火）
艇長 沢田 健

三浦 立 里村健一 脇坂菊雄

今までクラブの活動としてこういう外洋帆走の経験がなかったため、新たに学校側と外洋航海に関する取り決めをおこなった。乗艇者全員の誓約書を学校に提出し、事故に備えて保険にも加入した。

いよいよ出発である。

8月8日（土）

5:00 NE1～2曇 吉田浜出港

17:00 松川浦港入港

今まで、ディンギーでは、決死の思いで行なった金華山方面へのクルージングくらは、冒険ではなくなった。さらに長距離のクルージングを行なうべく、準備が進められた。計画よりはだいぶ遅れて、昭和45年8月～9月、吉田浜～江ノ島往復のクルージングが実施された。



無事油壺に到着した日高見（昭和45年8月14日）

8月9日(日)

4:45 SW風力1 晴 松川浦出港

20:30 W風力1 久の浜沖通過

8月10日(月)

9:10 NE風力2 快晴 茨城県高萩沖

13:40 大洗港入港

8月11日(火)

7:45 SE弱 大洗港出港 台風沖縄接近

17:30 鹿島港入港

8月12日(水)

5:00 風弱 鹿島港出港

21:00 N風力5 御宿沖 前線通過の為波浪たかしリーフ

23:00 雨 悪戦苦闘の後勝浦入港

8月13日(木)

9:15 勝浦港出港

16:30 千倉港入港

8月14日

5:30 SW風力2~3 曇 千倉港出港

12:00 WSW風力2 洲崎通過 航路横断

14:30 三崎港入港 陸路油壺の様子確認

17:00 三崎港出港

17:30 油壺港入港

待望の油壺入港、感激の様子を「白翠」から拾ってみた。

「油壺入港。スゲー。さすが油壺。クルーザーがわんさか。夕食は、久しぶりに手の込んだカレーライス。これがまた旨いこと旨いこと。皆思わず泣きだしたほど。ああ、でもとうとうやってきたんだ。チクショー、ヤッ

タゼ、ヤッタ、ヤッタ！」 (25号)

日高見は、8月23日まで、油壺港に停泊、復路のメンバーにバトンタッチ。伊豆大島経由で、帰路につくことになるが、帰路の記録は、「白翠」にはない。

その後、日高見の部としての利用活動は少なかった。そのなかで、日高見を活用して、部練習のなかに、クルージングも取り入れよう、という動きが昭和47年頃出てきた。

「日高見はいつでも宝の持ち腐れの存在でしかなかった。救助艇として今なお登録されたままなので、ちょっとした長いクルージングでも、なかなか許可がおりない、石丸さん、赤羽さんら先輩諸氏の助力により鮎川までのクルージングをやることになった。現役部員四名、OB二名、これが一回のメンバー構成である。土曜日の朝出て鮎川に一泊し、日曜日に帰ってくるという計画で、数回予定されていたが、学校側の許可が降りず、また風に恵まれず二三度中止されたあと、十一月末にやっと一回目が出航した。」

(27号 奥村一男50年卒)

11月25日(土) 8時吉田浜出航、13時半鮎川到着。

11月26日(日) 6時鮎川出航、北西風強く、10時航行を断念、11時鮎川帰着。

この時のメンバーは、青木・松山(OB)、

菊地・伊与田（2年）、山本・猪野（1年）であった。

復路は、一週間後、メンバーは、石丸・赤羽・菊地（OB）、奥村・東原（2年）、迫・金子（1年）で実施された。

12月2日（土）北西風15～20M、出航不能。待機。

12月3日（日）6時45分出航、14時吉田浜到着。

結局、この年の実施は、この一回だけで終わった。しかし、この経験は、当時の部員にとって貴重な体験を与えた。乗艇した多くの人が白翠27号に寄稿をしている。強風の時の船酔と先輩の逞しさを記述したものが多い。

「11月26日、6時30分出港。ハーバーを出ると、ものすごい風であった。軽油臭い船室で、ゲーゲーと酔っていた。外では、松山さんや菊地さん、伊与田さんが波をかぶりながら必死にティラーをさばっていた。その時の先輩

達の心境はまだ聞いていないが、僕はすっかり彼らに頼った。おかげで船酔いはいっそうひどくなった。」（27号 猪野寿男51年卒）

「日高見で初めての長いクルージングであった。はじめ、風が強く、波が荒いので、とても恐怖を感じたが、上級生が3人もいてくれてたいへん心強かった。今までぼく達は、あまり「日高見」をはじめ大型ヨットに乗った経験がなかったので、これを機会に大型艇の扱い方について勉強したいと思う。」

（27号 東原信男50年卒）

その後、白翠には部としてのクルージングの記録はない。それに変わって卒業後、所有したクルーザーや他海域での外洋レースの記述等がふえる。もはや大型のクルーザーがめずらしくなくなった今日、昔のように心おどらせ、小さな艇で不安ながら出ていった緊張感はうすれたのである。



二度目の進水式をした日高見（昭和59年7月8日 於 小浜）

50年史キーワード

	社会全般		大学の状況	ヨット界の動き	
	政治	社会・文化		全国	東北水域
黎明期 ～S12	- 世界恐慌 - 満州事変 2・26事件 - 中国と開戦	- 娘身売 - サントリーウィスキー（白ラベル4.5円） - 石坂洋次郎	大学は出たけれど	- 帝大、私大ヨット部創立 - 神宮大会 - 第1回インカレ（兼第7回神宮大会）	
創成期Ⅰ S13～S15	- 国家総動員法 - 三国同盟 - 紀元2600年	- 国民服 「贅沢品は敵だ！」立看板		第1回帝大戦	東北ヨット協会設立（S13）
動乱期 S16～S19	- 太平洋戦争 - ボツダム宣言 - 婦人参政権		学徒出陣	学徒体育大会禁止	
復活期 S20～S23	- GHQ - 日本国憲法 2・1ゼネスト中止 - 極東軍事裁判	- スポーツの復活 - 斜陽族 - 闇市	帝大名称なくなる	- 第1回国体（兼インカレ復活、S21） - スナイク採用 - 七大会復活	北海道ヨット協会第1回定期戦
発展期 S24～S35	- 自民党誕生 - 安保 - 朝鮮戦争	- 太陽族 - 売春防止法 - テレビ放送開始 - 皇太子結婚	- 駅弁大会 - 新制大学発足 - 東北大ボート部ローマオリンピック出場		- 松島に初めてスナイク浮く（S24） - 全日本インカレ開催（S26） - 国体開催（S27） - 全日本ヨット選手権開催（S29） - 全日本インカレ開催（S33）
充実期 S36～S43	- 資本自由化 - ベトナム戦争 - 公害	- 東海道新幹線 - 堀江謙一太平洋横断 - 東京オリンピック - ミニスカート	揺れる大学	- 東京オリンピック - インカレクラス別制採用	- 国体開催（S36） - 東北学院大学台頭
模索期 S44～S47	沖縄返還	- アポロ月着陸 - 三島由起夫自殺 - 札幌オリンピック	- 学園紛争 - 東大・東教大入試中止（S44）	インカレA級廃止	- 新艇種選定 - インカレA級廃止
スポーツ化の時代 S48～S54	- オイルショック - ロッキード事件	- やさしさの時代 - 王715本	- 就職協定 - 就職難 - 学生運動	- インカレ470採用 - インカレ自艇決勝方式 470世界選手権優勝	- 東北インカレ参加大学の増加 - 宮教大遭難 - 全日本インカレ開催（S54）
市民スポーツの時代 S55～	- 第二次オイルショック - 円高 - ドイツ統合	- 校内暴力 - 戸塚ヨットスクール - ソフト化	- 共通1次 - 就職協定有名無実化	- ゲートスタート - アメリカズカップ出場決定	- 松島Jrヨットクラブ設立（S55） - Intl4世界選手権（S62）

ヨ ッ ト 部 の 活 動			
体 制	設 備	練 習 等	成 績
・ 設立準備	・ 艇建造用の寄附募集		
・ 東北帝国大学ヨット倶楽部 (S13) ・ 高須部長	・ パークホテル	・ 松島	・ 第1回東大戦 (S13) ・ 帝国4大学戦 (S14)
・ 東北帝国大学報国会国防訓練部帆走部 ・ 白翠会発足 ・ 白翠1号創刊 ・ 福島部長	・ L級建造 ・ 保有艇米軍接收	・ 松島 ・ 海の写真展	・ 第12回明治神宮大会2位 (S16)
	・ 貞山堀 ・ パークホテル	・ 塩釜・桂島	・ 第1回函館高等水産戦 (S23)
・ 20周年 ・ 山本副部長	・ 救助船「翠」進水	・ 松島・桂島・吉田浜	・ 全日本個戦A級3位 (S24) ・ 第1回北海道大学戦 (S26) ・ 全日本個戦スナイプ優勝 (S26) ・ 第1回京都大学戦 (S30) ・ 全日本インカレ優勝 (S33)
・ 山本部長 ・ 島田副部長 ・ 30周年	・ 合宿所完成 ・ フィン購入 ・ 日高見進水	・ 吉田浜	・ クラス別予選
	・ 鈴木さん合宿所同居 ・ 470購入	・ 留年増加 ・ 日高見油壺遠征	・ 東大戦中止
・ 島田部長 ・ 吉田副部長 ・ 40周年	・ 船外機「きいろ」購入 ・ FRPスナイプ購入 ・ 東レ、レスキュー購入	・ 夏, 吉田浜 ・ 冬, 松島 ・ 吉田浜沖	・ 東大戦復活 (S50)
・ 樋口部長 ・ 50周年 ・ 前田副部長	・ 救助艇船外機2艇体制	・ チューニング重視 ・ 冬の整備大幅縮少	

褒章の記

川越 敬

多年ヨット関係団体の要職にあつてスポーツの振興に寄与したことに公衆の利益と無き成績を明するより褒章を授け、並に褒章を賜つてその善行を表彰せられた



昭和五十九年十一月三日

内閣総理大臣 中曾根 康弘

総理府賞勲局長 海老原 義彦

第二四八二号



昨昭和五十九年十一月三日、多年スポーツ（ヨット）振興に寄与したとして藍綬褒章受章の榮に浴しました。

趣味であり好きなスポーツであるヨットで御褒め戴くなど思いもかけぬことでしたし、晴れがましいセレモニーは不得手なので聯か躊躇致しましたが、今回の受章は多くの方々の御厚意と並々ならぬ御尽力によるものであること及び東北大学ヨット部、白翠会、延いては東北水域に対する評価の表現であつて、私個人に対するものではないことに資いを致し、僭越ながら皆様に代つて素直な氣持で受けさせて戴きました。

茲に「褒章の記」（写真）を御覽に供し、皆様に御報告申し上げる次第であります。私もはや還暦を過ぎましたが、先年の自動車に続いて一級小型船舶操縦士の海技免状を取得し、心身共尚健全であります。ヨットのため御役にたつことがありましたら更に微力を尽したいと存じて居ります。

今後共宜敷く御指導賜わります様御願ひ申し上げます。

昭和六十年三月

川越 敬

（昭和二十二年卒）

2. 五十周年記念行事

記念式典

去る昭和63年10月9日、五十周年を記念し、来賓及び会員多数出席の下に記念式典及びパーティーが催された。以下にその概要を記すと共に記念式典に於いて頂戴した祝辞を紹介する。

来 賓

東北大学学長	石田名香雄
東北大学生部長	永井 伸樹
東北大学生課	鈴木 時夫夫妻
七ヶ浜町長	赤間 今雄
元吉田浜郵便局長	鈴木 喜夫
宮城県ヨット連盟会長（代理）	高橋 順一
東北学院大学ヨット部OB会会長	勝山 卓郎
うなぎ松風	身崎 善身
西沢造船所	西沢 忠喜
片倉別荘	内海 和江
小野寺ボート製作所	小野寺 篤
円通院	天野 文子
港楽荘	永井しづえ
セールヨットサービス	我妻 幸一

記念式典次第

（於 吉田浜漁民センター）

	（司 会）	箱崎智則
開会の辞	前ヨット部長	島田平八
挨拶	白翠会会長	福島弘毅
挨拶	ヨット部長	樋口龍雄
祝 辞	東北大学学長	石田名香雄
挨拶	七ヶ浜町長	赤間今雄
表彰	鈴木時夫夫妻	
挨拶	ヨット部主将	柴田真一
閉会の辞	ヨット副部長	吉田和彦

記念パーティ次第

（於 塩釜市ホテルふみや）

挨拶	白翠会会長	福島弘毅
挨拶	学生部長	永井伸樹
挨拶	元ヨット部長	山本宗一
乾 杯		吉村 清
祝 宴		
記念基金報告		青山 翠
島田前部長へ記念品贈呈		仙台白翠会

（文中敬称略）

祝 辞

東北大学学長 石田名香雄

本日は誠にめでとう御座います。

五十周年と聞いたとき「本当かな」と思いましたが、松島という時代があってそうかと思つた訳です。

本日この席へ来てみると、東北大学の補導教員の昔の仲間であつた同級生の岡田が来ているし、また、島田先生の兄とは二高で一緒であり、いつまでも子供扱いされ今でも恨まれているなどのお付き合いがある。

ヨット部の活躍については存じあげていますが、つもりである。私自身はボート部の出身であり、ついこの間まで漕艇部長をしていた関係上、少し異質なものではありませんけれども、ボート部よりヨット部の方がモダンであり、工学部の人々がするのはヨットで医者くらいのすることがボートであると感じた次第です。全日本1回優勝、七帝戦では4回優勝され、特に昨年は最終の場面で得点され非常に面目を施したので厚く御礼申し上げる次第です。

私は運動部を非常に大事にしております。ヨット部には余り来ていないようですが、お金は出せるだけ出せと申しております。

ボートの雑誌に書いたことですが、利根川先生がノーベル賞を貰う大分以前に言っていたことが3つありましてそれを繰返して言うわけですが、それを理解する以前に、私は人間は孤独なものであると思う。孤独に耐えうるというのは運動部の選手の特技であると思



う。それを前提として、利根川先生の言っている事は、1番始めに言っている事は、利口なやつは大成しない、頭の良くない方が良いという事で、頭が良くて小細工が効く人は文献音痴になるかあるいは器用貧乏になる、即ち、最初から突出していないほうが良いというわけです。そう考えると、ボート或はヨットをやろうという人はどこか抜けているのではないかと思う。本日、棚橋先生に送ってもらったのですが、車でそのような事を感じた訳です。

2番目は、大事な事ですが、人のやらない事をやらなければならない。私は、人のやらないことをやってきたと思っているが、人のやらない事を今後やろうと思えば、人と同じ事をやっているのはダメだという心情が働いていなければならないと思う。ボートで8人が同じ調子でコックスに言われたとおりに漕いでいると思われるかもしれないが、一人一人の工夫というものは大変なものでして、その工夫を見付けない限りそのクルーは強くないのであります。その意味の、人のやらない事をやるんだという気持ちをやり抜くとい

う事は口で言うのは簡単だけれども大変な事だと思ふ。

3番目は、しつこい性格でなければダメだという事です。あくまでもある種の事をやっていくという事です。始めからしつこい人間もいればしつこくない人間もいる。それが運動部をやっている間にしつこくなってくる。その運動の種類があると私は思う。学問も運動も打ち込み方によって異なると思うが、しつこくない人もしつこい性格が自然に養われると考えている。今朝、車の中で考えたが、

どれをとってもボートとヨットではヨットの方が一枚分があると考えた。孤独で、バカさ加減もそうだし、ひとのやらない事をしつこくするという意味で。

しつこくするということに最後の話を置いて五十周年のお祝い、更に五十周年という事は今後も永遠に続くのであります。今後のスポーツとして東北大学が期待できる1つの種目と考えている。

ますますのご発展を念じて挨拶と致します。



管理人鈴木夫婦へ長年の感謝を込めて
記念品の贈呈



会場をうめつくした参列者の方々

祝 辞

七ヶ浜町長 赤間今雄

東北大学ヨット部の創設五十周年を迎えられ心から祝福を申し上げます。

五十周年と言いますと半世紀、多分昭和13年頃でございましょう。その当時は世相も戦時下であり、大変うるさかった時代だと思います。当時を回顧すると大学の艇庫は東塩釜にあって塩釜、松島湾や貞山堀にて練習の状況を思い出されます。この長い歴史の中には幾多の苦難を乗り越えて今日のヨット部の発展を見たものご推察致します。

本町も皆様ご存知の通り、今日まで海と共に成長してまいった町でございます。昔から漁業の町、魚の町としての歴史を積み重ね、古代縄文時代を代表する大木田貝塚をはじめ数多くの埋蔵文化財があるのであります。特に昭和の初期から北洋カムチャッカ漁場を開発した歴史を持ち、この吉田浜、花洲浜の先輩の漁民が開拓されたものであり、本町は、海と船との関わりが極めて深いのであります。

近年、ヨットも高校、大学をはじめ、一般社会においてもおおいに愛好され、海洋スポーツとして、あるいはレジャーとして普及も盛んとなり非常に結構のことと存じます。最近はその技術も進歩致し、内湾から外洋へと進出し、本町の漁業・港湾は漁船とヨットの寄り合い世帯となっておる状況でございます。本町を基地としてのヨット大会も年々多くなり、高校・大学・一般の県大会や東北大



会等が開催され、昨年は14フッター世界選手権大会も実施され、更に平成2年にはインターハイヨット競技が本町松ヶ浜地区にて開催される予定であります。

本町に於いてもこの豊かな青い海と緑の丘に恵まれた自然環境を育てながら、今後尚一層海洋レジャーを主とした海のリゾートの町として発展計画を定め、数百隻のヨットを収容する県営マリナ基地の設置や、仙台市と共に国際交流学術ゾーンとして国指定を受けた高山国際村の建設、或いは東北一の菖蒲田海水浴場のC.C.Z.計画に基づくレジャー基地の整備等、画期的な海洋リゾートの町づくりを推進してまいる所存でございますので、東北大学の皆様方も大いに本町の各施設や海面をご利用いただき、思う存分発展されんこととご期待致します。

本町も出来得る限り皆様のヨット諸般につきご協力を致す考えてございます。どうか、本日の五十周年を契機として、更に一層ヨット部のご発展とご列席皆様方のご健康をご祈念申し上げてお喜びの言葉に変えさせていただきます。

「東北ヨット発祥の地」記念碑建立

建立場所 宮城県宮城郡松島町字町内

36-1 県立都市公園松島内

建立年月日 平成2年4月29日

借地期間 平成2年4月より平成3年
3月まで(以降更新の予定)

借地料 減免申請(平成2年3月)
により無料

設立許可申請者 東北ヨット協会会長 三塚 博

基本案 香野(39年卒) 中村(45年卒)

題字及碑文文章 福島弘毅白翠会会長

レリーフ 昭和13年A級ディンギー帆

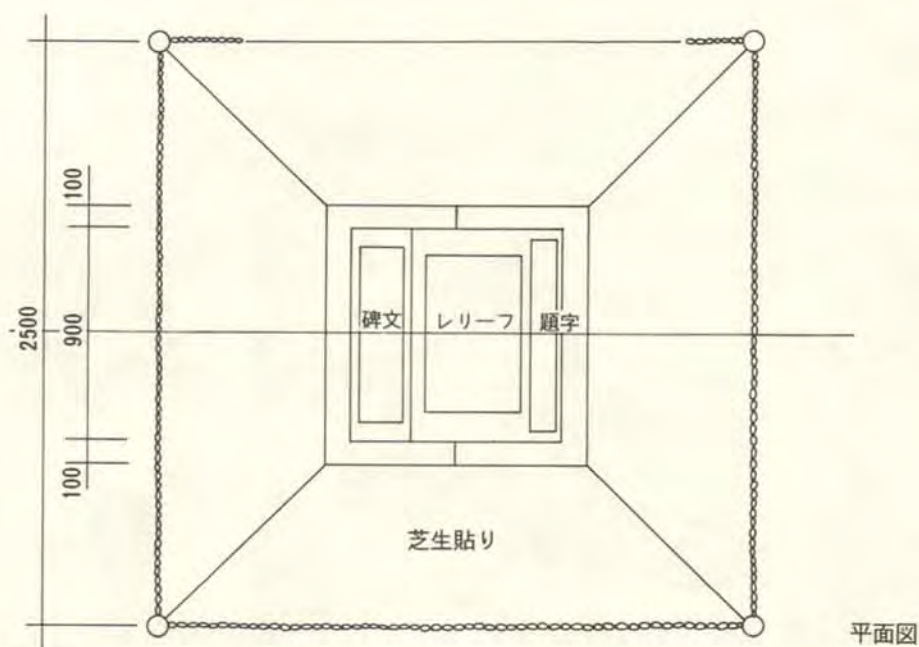
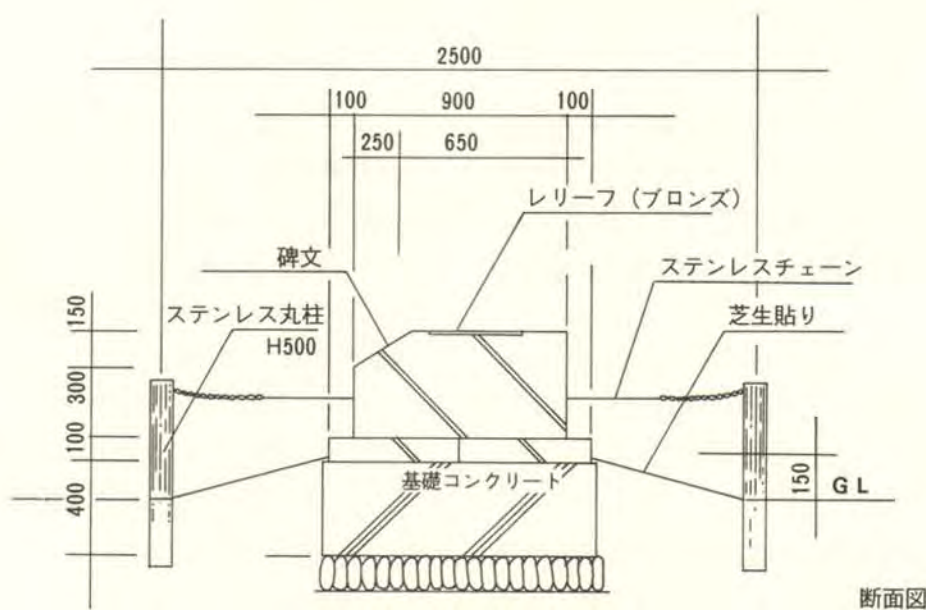
走写真より彫刻家、鷹尾俊一氏が製作

メーカー 石 ㈱タカタ東北営業所 仙台市青葉区宮町1-1-7 (225) 0285

レリーフ ㈱オオタケ産業 仙台市宮城野区郡山4-2-3 (249) 3534



「東北ヨット発祥の地」除幕式(平成2年6月2日)



五十周年記念イベント

東京白翠会 ハワイでのクルージング

小谷 昌 (31年卒)

エボモア号のオーナー会議の席で、創立五十周年が話題になり、東京白翠会でも何かイベントをやれと発議は原田（19法）、湯沢（20工）、川越（22法）、の諸先輩。酒を飲みながらオーストラリアかハワイでクルージングはどうか、確かJTBに若いのがいたはずとワイワイガヤガヤ。結局手軽に行けるハワイで日本にはないような大型クルーザーをチャーターして、島々をクルーズしようと決定。63年の賀詞交換会の席上、原田先輩が円高メ

リットと奥さん孝行の一石二鳥の企画だと熱弁、JTBの江田君（59年卒）が補足説明して、正式に東京白翠会の五十周年イベントとして決定。当日の出席者だけでも奥さん同伴含めて30余名のエントリーがあり、更に各水域の白翠会に呼びかけたが、イザとなると皆さんの都合ができて、結局は総勢22名。8月3日夜、成田のVIPルームで団結式、瀧藤先輩（18経）が団長、原田先輩が副団長で出航となり、ハワイの太陽、波と風を満喫してまいりました。



九州白翠会 ―ゴルフ・フグ・クルージング―

松元幸三郎（33年卒）

九州白翠会では、5月27、28の両日、北九州門司で、五十周年記念総会を開きました。

まず初日はゴルフコンペから……戦時中は芋畑になったこともあるという“名門”門司ゴルフ倶楽部で、はなばなしくフタを開けました。久しぶりの青春気分、絶好のゴルフ日和も手伝って、ワンラウンドハーフを、あっというまに突っ走りました。特に、末松大先輩のカクシャクたるプレーには全員脱帽。終始若手をリード致しておりました。天才を自認する野口君は別として、スコアよりも、まずは体力を競い合うという結果でした。

夜の祝宴は、メカリ山頂の山荘で杯をあげました。眼下に関門橋、壇の浦を望む景勝の地です。フグのフルコースを肴に、いにしへの懐旧談、最近の自慢話に花が咲きましたが、最後は「青葉燃ゆる」と「肥馬鞭うたせ」で

きっちり締めました。

一次会だけで終わってしまうのは、あまりにも勿体ないと、幹事の遠藤君がお得意のヨイショで、フロント嬢から門限1時間延長を取りつけ、ちょうど“みなと祭”で賑わう門司の夜の街へと繰り出しました。

翌日も快晴で、絶好のセーリング日和でした。本宮君の愛艇「春風」（6米級クルーザー。あいにくオーナーはスペインへ長期出張中）に乗り組み、初夏の周防灘へと乗り出しました。4、5メートルの順風に、イルカの歓迎を受けながら、最年少の安藤艇長の指令の下、約3時間の楽しいクルージングでした。

現在、九州白翠会総員8名。かくして五十周年記念行事は、小人数ながら、無事盛大に終わることができましたことを、全国の白翠会諸氏に御報告申し上げます。



白翠会基金

五十周年の記念行事の企画について、会員有志があれこれ検討しているうちに、記念式典、祝賀会、記念品、記念碑建立、白翠誌記念号の刊行等々、経費のかかる盛り沢山の企画をスムーズに消化するためには、かなりの資金を必要とするし、そのためには全会員に応分の負担をお願いしなければならないということになった。

そして、そういうことであれば、五十周年という区切りの年でもあるし、この際、会員の皆さんに少し多めの寄付をお願いして、基

金を設け、ヨット部現役の活動を支援する資金的余裕を作ろうではないか、ということになり白翠会基金を設けることとなった。

昭和63年7月末から会員の皆さんに書類でお願いすると同時に、夏休みに入る現役の協力を得て募金活動を始め大変良く皆様のご協力をいただいた。担当として、もう一段の努力を払わねばと考えているところである。今後とも白翠会基金の充実のため会員の御協力をお願いしたい。

報告 青山 翠（22年卒）



3. 五十周年記念座談会

逞しき創部の頃 (昭和13年～昭和19年)

平成元年7月9日、日本倶楽部に於いて保田氏を座長として、創部より終戦まで、多難な時期を経験されたOB10名の回顧座談会が開催された。

【出席者】保田、吉村、深尾、矢吹、末松、小野、滝藤、原田、石原、湯沢

保田 お手元に白翠1号の抜粋をコピーしてお渡ししてあるが、如何せん50年も昔のことであり、記憶も確かでないが、資料を参照し

ながら往時を懐古して戴きたい。白翠の記事は創部の経緯等極めて事務的であるので、特に本日は、此れに掲載されてない裏話等を御披露願いたいと思います。

△ それでは創部の経緯について。

吉村 松島にヨットを浮かべる話は、ボート部の保田と山岳部の私が、スキーマーのシェブル、松島の翠、それに白帆の組合せはどうだろうと言う様な話が端緒であった様な気がするが。

△ 山岳部、ボート部、乗馬部、弓道部など皆



後列左より 青山、高橋、湯沢、石原、原田、末松、滝藤、小野、川越
前列左より 矢吹、深尾、保田、吉村

さんの所属が多岐に亘る点は何か理由が？

保田 当時、運動部の部室は各部が共有していたため、お互いに声をかけやすく何となく部員が集まってきたような感がある。

 当時の学生ヨット界の現状は。

末松 各大学の活動状況は明らかでないが、国立大学は大正末期既に九大では倶楽部の形で活動していたと思う。スター級の艇が在った事が記録されている。国立では九大が一番古いのではないかと思う。

保田 東大ヨット部も歴史は古く、日本ヨット協会加盟時に大変世話になった。此のお蔭で日本ヨット協会に東北ヨット協会として正式加盟を認められ、独立した水域として全国大会出場権を得たことは白翠発展のため大きな契機となったと思う。

深尾 契機と言えば、本年五十周年を迎えることができたのは、保田の政治力、企画力、行動力に負うところは皆が認める処であると思う。私の名前も随所に出でくるが、私は二高、大学と弓道部の大将を務めてきたが、大学で金属に入り、私の父親時代から付き合いの或る保田と悪友になり、何となく保田に丸め込まれてしまったような感じでヨット部の手伝いをする羽目になってしまい、造艇の為に寄付集めに奔走することになった。当時、ヨット界の重鎮、財部海軍大将兄弟、古屋徳兵衛氏を廻った。古屋氏は弓道部の先輩でもあり知己の間柄であったため、新艇一艇分の寄付を戴いた。パークホテル、丸の内会館社長、五百木氏には新艇二艇分の寄付を受け、更にパークホテルの地下を艇庫に使用させてもら

う約束を得た。

吉村 小口の寄付は地元名士に手紙を出し、奉賀帳持参で仙台、塩釜、遠くは石巻辺りまで歩き廻ったが、何といっても朝日新聞仙台支局長毛利氏がロータリー倶楽部を紹介してくれたり、数多くの地元名士を効率的に廻ることを教えて呉れて大変好都合であった。土井晩翠先生の逸話もこの頃の話であり、学生時代の寄付集めは将来の社会生活の糧として貴重な経験となった。土井先生の件は忘れ難く、先年仙台に行った際に墓参させて戴いた。

保田 13年9月、待望の新艇が到着、東北ヨット協会発足でディンギーに本多光太郎総長がモーニング姿で乗艇された写真が朝日新聞全国版に載った。この写真は貴重な記録である。

保田、深尾 宮電（現JR仙石線）にヨット部員に黄色い往復80銭の特別割引券を発行させた。此れも保田の手腕であった。皆無の松島にヨットが走り出すと漁民が「学生さん、そんなに高い帆柱と大きな帆で走るのは危ないから止めなさい」といわれたり、折れたガフを知らずに東大の岩田氏に指摘されてみたり、当時の状況はそんなところであったが、その後、貴家、小野（弘）達のヨット経験者が入部してきた。

保田 技術的には九大OBの勝屋氏（全日本優勝者）に負う所が多い。又、海軍人事部長にも大変世話になり、時流に乗るような形で大変幸運な面もあったと思う。

 堅い話ばかりでなく他に逸話は？

末松 松島では遊覧船が来ると、意識的にヒールさせてカメラアングルを提供したことは懐かしい思い出である。

深尾 ヒットラー・ユーゲントが松島にきたときは、ヒールさせて歓迎したこともあった。

小野 ヒットラーというと勝手にヨットを乗り廻したナチ系のドイツ人の二高教師を、あの温厚な吉田が物凄く剣幕で怒鳴りつけた光景は忘れられない。多分、英語かフランス語かと思うが、日本語でなかったことは確かだった。

原田 兎に角、吉田はカソリックの身上に反するということで日曜日には絶対ヨットに乗らなかった。

一同 パークにはとても世話になった。沈したときは風呂でセールを洗わせてもらったり、練習が終わるとコーヒーまで御馳走になったり、他に差し入れがあったり、特に学生が大事にされた良き時代であった。

深尾 陸軍がらみの岩沼飛行場建設の学徒動員で、ヨット部員が海軍の補助要員であるとの理由で動員免除になったことは、何となく特権を与えられたようで一種複雑な気持ちであった。

保田 創部時に色々御世話になったり、又一緒に部活動をした人々で名簿に載っていない人達が回顧談に出でくると消息が知りたくなる。50年を期に改めてお礼等を申し上げたいような気がする

🚢 東北ヨット協会が設立され、従来の対抗レースと言うと東大定期戦しかなかったのが、他水域との交流レースの時代にはいる訳です

が。

矢吹 今井が初の全国大会で2位入賞の偉業を果たし、新設の東北水域のために気を吐いたのは愉快であった。初参加の六帝戦も4位と先ず先ずの成績であった。

滝藤 部員数も14年ころは20名前後であったが、戦争の影響で減少してしまった。

🚢 クルージング派とレース派が戦前から確執があったようですが？

保田 確かに創部の頃から一生懸命ヨットを走らせようとする人と、ヨットは楽しむものと考えている人がいたことは事実である。東北水域が認知された以上は名声を博す事が至上命令という硬派が圧倒した結果となった。

原田 ヨットは早く走れば良い、艇の上では禁煙、女性も乗せることは論外、レースでは姑息なS・L・Pやブランク等のタクティックに依存するより正々堂々と走り抜くことが、シーマンの信条という風潮であった。

滝藤 但し、11月3日の納艇時だけは今日というコミュニケーションのため、女性の件は例外であった。

石原 だけど、要領良く適当にのせてた人もいたようだ。

深尾 当時クルージング派などという言葉は聞かなかった。レースには出なかったけどレースをヨレで観戦するのはクルージングではない筈だ。

小野 レース派だけど、和船を漕ぐことを覚えたり、ヨット以外にも色々と教訓はあった。

🚢 それでは最後に戦争末期の状況について
湯沢 戦争色濃厚になると、用具の不足、部

員の出征、勤労働員等で部活動も低下を余儀無くされた。残った部員で白翠三号の出版は用紙不足等の困難に直面したが、明治屋の中井氏の好意でガリ版刷りでやっと発行に漕ぎ着けた。出来あがったものを警察、憲兵隊、情報局に検閲のため届ける義務のある時代であった。更に戦局が悪化すると、部の運営のバトンタッチに忙殺されてしまったが、艇の整備は誰かが責任を以って行われていた。終戦前後の確たる記録のないのが残念である。

【後記】

不慣れな編集であるが、御発言の内容については忠実に記録させて戴いた心算である。長時間座談会に出席戴いたことを深謝する次第である。

尚、後輩への提言については、運営委員会で有難く拝聴させて戴き、今後の白翠の在り方への貴重な資料として頂戴致しました。

(文責 高橋三雄)



用紙不足のなかで発行された白翠三号

混乱の戦中・戦後談（昭和18年～昭和22年）

平成元年5月30日、高輪のペルフォールに於て、昭和18年より22年までの回顧談の会が、島田氏の司会により開かれた。

【出席者】湯沢、川越、青山、原、島田

川越 司会は島田がやれよ。先づ戦前から話そう。

原 それは湯沢さんと川越さんしか知らないのだから。

湯沢 （当時の古ぼけた手帳を持参しており、それを見ながら）昭和19年2月28日に原田、望月の（学徒出陣の為の）壮行会をやった。出席者は福島、中井（東北ヨット協会）、山上、望月、中本、和田、岡田、宗田、市川、原田、湯沢となっており、福島先生の挨拶のあと湯沢が壮行の辞を述べている。白翠三号もそのときガリ版で発行した。19年3月のこと。和田さん3月3日夜行で出発、3月10日望月さん出発。

原 そのとき艇は何々だったかな。

湯沢 デインギ9隻、オリンピヤヨレとしたと思う。練習はパークホテル前から毘沙門島一周のコースを高橋（彦）、市川、岡田、岡、湯沢でやっており、19年4月から私は工学部だったので工場にいかせられ主将を岡田に引き継ぐ。

川越 18年9月26日東大戦の最終日に徴集猶予停止になり、12月に学徒出陣だった。18年の主将は瀧藤さんだったね。

青山 その当時の部員集めはどうしたんだろう。

川越 18年4月シーズン始めに「新入部員集め」のクルージングにお客さんとして集め、その中から何人残るかが問題だった。私はその日に沈をした。4月の松島は強い西風のブローが多くて、先輩が「ブローが来たらシートとテイラーを離せ」と言われたが、シートがどれでテイラーがどれか分からないものね、しっかり握っていたら、そのまま沈さ、私は何もしないでいたら先輩がすっかり仕末して呉れてね、義理を感じてそれ以来45年間ヨットとは縁が切れなくなったね。

原、青山 我々の頃は口こみで入部したね。

島田 授業をさぼらなくてはならないので大友をさそった。幸い機械工学科には4人いたので1/4の出席で済んだ（笑）。私は黒部にさそわれて入部した。彼は直ぐやめた。

湯沢 色々話しがあるが、昭和19年から終戦まではブランクなので、戦後に飛んだらどうだろう。

島田 戦中戦後のつなぎの時期は、福島先生が詳しい筈だが。

川越 福島先生は私より後でヨットに関係し

た。

島田 それで先生は「川越さんは私のヨットの先生だよ。だから彼等の部員には弱いんだよ」と小声で言っていたよ。

川越 部長になったときは頼りないと思ったが、先輩顔をしたことは無かったがな。

島田 歴代部長の中では一番良くやってくれたのではないだろうか。

原 21年春にはパークホテルと共にヨットが進駐軍に接收されたが、接收の代金が県より支払われた筈。東京白翠会で増やして艇を買うことになっていたが、仙台の連中を素通りしたので詳しいことは分からない。

川越 私は復員後、艇を買うのに卒業（22年9月）まで寄付集めに奔走した。仙台市内や塩釜市内の人で当時ヨットに関係ない、金を持っている人が学生に金をだしてくれたよ。

（個人名は少しあやしいので省略）

島田 白翠4号を見ると書いてないかな、大友が編集したのだが、彼が今日来ていないのが残念。

川越 22年4月の12呎級デインギ3隻は寄付で作ったのだ。

島田 和田朗に聞くとはっきりすると思う。ところで、戦後初めての公式戦に出場したのは11月1日～3日の第1回国民体育大会の一部として行なわれた復活インカレ全日本だ。

川越 11月1日～3日と書いてあるが、私が結婚したときは10月19日で、その翌日に近藤か望月が「明後日インカレがあるのでキャプテンとして登録してあるので出場せい。」と言われたが、復員して結婚したばかりで、生活を考えなくてはならないのでやめた。それで東京駅に選手の見送りに行ったと覚えている。

（注. インカレは間違いなく11月1日～3日



第1回国民体育大会兼全日本学生選手権（昭和21年11月 於 琵琶湖）

行なわれている。)

原 10月末のような気がする。そのとき末松先輩と湯沢さんに来て頂いた。食料難だったので、末松先輩がパン焼器を持参してこられた。

島田 そのとき予選を同点で通り決勝に出られた。琵琶湖の風には悩まされたが決勝は5位だった。補欠無しのメンバーだったので、原が高熱を出したときもディンギーの中に居て貰った。インカレの次の日、3帝大戦をさつまいもを食べながらやった。

皆んなで 次の年代は飯田等で部員が少なかった。その次は海軍出の壮々たる連中が入部して活気があった。丸山だけが福岡高校出身

で一寸しょんぼりしていたが、よく西沢造船所に泊っていた。

【後期】

この後は別の組の話と合体して録音が不明になったのでこれで打切りとします。また戦中の医専ヨット部のことが出たがはっきりしないので省きました。記憶の薄れた話になりましたが、ウイスキーだけは良く飲みました。(文責 島田平八)



戦中のヨット部 (I)

高橋彦治 (20年卒)

一緒に入った仲間では川越さんや湯沢さんあたりが熱心で、リード役を果たされておられ、多くの面で詳しい存在の方々と思われます。小生は地元松島の人間でいながら、また、そのためにヨット部由縁の土地の方々とのつき合いに億劫であったなど想起こされます。

太平洋戦争も酣の、(敗色濃い) 昭和18年の秋、冷雨の降りしきる中で壮絶な学徒出陣が行われたのは宮城野原だったのでしょうか。それ以後のセーリングは「部活」ということではなく、散発的に、個人的に声をかけ合って出る程度で、戦争が深まっていく中で、気がつく、いつしか松島湾内に白帆をみることがなかったのです。

進駐軍による接收前後の状況は、松島に居ながら全くわからない。米軍が松島に到着して間もない頃、秋も深まっていたと思いますが、一度、家の方に軍曹の肩章をつけた兵隊が、通訳と一緒に訪ねてきて、ヨットを使わせて欲しいということであった。今は、米軍の管理下にある施設物であるので、貴職の意志で使用されるのでは致し方ない、といったような返事をしたと記憶しています。数日後、碧い海に2隻ほどのディンギーが浮かんたのを見て敗者の感慨を味わいました。このことを部関係の誰かが明治屋の中井さんかに伝えたと思います。



昭和19年の日記から

湯沢豊城（20年卒）

- 2月28日（月）学徒出陣による原田、望月両兄の“壮行会”（5時30分から8時30分まで）。出席者、福島先生、中井氏（明治屋）、山上先輩、中本、湯沢、高橋、岡、和田、岡田、松山、市川、宗田、石川。
- 2月29日（火）“白翠三号”制作に大童、岡と二人で中井氏を訪ね、謄写版と紙を都合してもらい夜明治屋でやろうとしたが、目下の電力節約で駄目になり、明日大学に運ぶことにして帰る。
- 3月1日（水）8時に登校したが休講、岡と明治屋から謄写版、紙を運ぶ。11時20分の電車で原田、望月両兄と東塩釜の東北ドックに挨拶に行く。原田、望月両兄は2時半桂島丸で桂島へ。小生0時20分で帰仙し、3時から5時まで教練。夜6時半より岡、岡田、松山、斉藤（新部員）と12時迄“白翠三号”の制作。やっと半分まで刷れた。
- 3月2日（木）今日も謄写版刷りなり。
- 3月4日（土）“白翠三号”四冊だけ完成。早速、瀧藤、原田、望月の三先輩に贈呈。
- 3月5日（日）曇り、北の風1～2。朝、岡田と原町の宮城電鉄本社へ赴き、乗車割引券の件について打合せ。岡田用件があって帰仙。本日は今年最初の練習日なり。ディンギー九艇をパークホテル前の芝生に並べる。午後から寒風

をついて初乗り。1、7番艇を出す。久しぶりに乗るヨットはなかなか爽快だ。毘沙門を一周して帰る。乗艇者、湯沢、高橋、岡、市川、石川。1時間余り6名（後れて宗田が来る）でペンキはがし。5時半から千葉屋で原田さんのご両親のご馳走をうける。

3月6日（月）原田兄、市川ほか1名乗艇、桂島まで往復。原田兄この日午後8時10分の汽車で上京。部員一同「海ゆかば」、万才で見送る。

3月10日（金）望月兄、午後1時58分の上り急行で帰京。部員数名が見送る。30分ばかり遅延の間、手旗信号で「ブウンチョウキウライノル」「ヤマザルガンバレ」…

3月12日（日）大雪のため松島行中止。

3月19日（日）晴。高橋と中本、八番艇ヤスリかけ。工学部は試験の最中。

3月23日（木）午後、湯沢、岡、中本、高橋で“白翠3号”の制作。岡が借りてきた電気ドリルで穴あけ作業。金具で締めて袋に入れる。岡、警察、憲兵隊、情報局へそれぞれ届ける。

3月25日（土）1人で“白翠三号”の宛名書き。

3月26日（日）高橋と2人で2艇ペンキ塗り。ペンキも足りない。何とかしたい。

3月27日、28日“白翠三号”宛名書きおよび発送。



戦中のヨット部（Ⅱ）

市川洋氏（22年卒）

昭和18年、東北大学に入ると同時にヨット部に入部した。京都二中時代舟が好きで、よく琵琶湖でヨットに乗っていたので、大学でも自然にヨット部に入った。

その当時、入部の勧誘などは何もなかった。

当時のヨット部は原田さんがトップで望月さんや川越さんが上級生として頑張っていた。

松島のパークホテル地下にディンギー5, 6艇、L1艇、ヨレ1艇が預けてあった。

戦時下で大学も休講が多く、天候さえよければ、宗田君と即、松島へ行きヨットに乗っていた。

当時は、レースの概念がなく、唯、クルージングで海を楽しむことに専念していた。

先輩達の指導も、セールの張り方、タックの仕方、バランスのとり方など基本的な動作に関する事だけだった。

したがって、レースのための練習とか合宿とかは全然無かった。

艇の手入れはペンキハガシなどをしたが、金のかかる修理はしなかった（しないで済んだ？）ように思う。

当時、医専から2人程練習に参加していた。

戦争の末期に近く、原田さん、望月さんなどが次々と学徒出陣していかれた。

その壮行会の席上、原田さんから“市川、ヨット部のことは頼んだぞ！”といわれ“お

まかせ下さい”と胸を叩いて（？）引受けたことを憶えている。

その後、松本高校当時同級だった原君をヨット部に誘いこみ、なにかにつけて相談しながら先輩の留守を預かっていた。しかし、実際には何もすることがなく、空襲の危険も出てきてそのまま終戦になってしまった。

終戦の当時、進駐軍がきて、パークホテルを接収するという噂が流れ、預けてあるヨットはどうなるのかな、どうすればよいのかな、など心配したが、現実にはどうすることも出来なかったという記憶がある。

その後、わたしは家庭の都合で大阪大学へ転学することになり、あとを原君に頼んでヨット部を離れた。

湯沢さんの日記にある通り、“白翠三号”の刊行にはいろいろ苦勞した。ガリ版切りや印刷を夜おそくまで何日か連続してやった。このときの紙は、明治屋の中井さんのお世話で入手したと思う。

中井さんには、この紙ばかりでなく、何かというと相談にかけ込んで聞いてもらい、解決してもらった。

白翠三号をつくるとき、原田さんや湯沢さん達と部歌を作ろうということで、歌詞を各人から提出させ、皆で選んだことがある。湯沢さんの作ったのが一番よかったような記憶がある。あれは、どうなってしまったのかなー。

ヨット部＝東北ヨット協会の頃

(昭和23年～昭和27年)

平成元年5月31日、高輪ベルフォールに於て、昭和23年より27年までの座談会が開催された。

【出席者】渡辺、小島、武田、加納、早坂、大原

❖ 戦後のヨット部建て直しから、昭和26年のインカレ、昭和27年の国体と、東北ヨット協会が大きく発展した時期に部生活を送られた訳ですが、先ず建て直しの状況から話を進めたいと思います。

渡辺 戦後の艇建造の寄附廻りには川越先輩がお膳立てをして、その通りに動いた。岩本協会長（岩本病院長）のお顔で、奉賀帳を持って、初対面の名士の方々を訪問して回った。童顔の「ヤロッコ」だったが、大人の扱いを受けた。今から思うと良い経験をした。

小島 塩釜の網元連中（丹野氏他）松島湾汽船社長栗野氏等、塩釜関係を回ったが、門前払いは一度も無く、皆が奉賀帳に協力して下さった。角帽が巾のきく時代であった。

渡辺 昭和24年春にA級新艇2隻が松島に到着し、A級10隻となり、戦後の建て直しは一段落した。

小島 その時島田さんのスナイプが入り、松島に初めてスナイプが浮かんた。

L、ヨレ、スナイプ、各1艇、A級10艇、

和船1隻の体制となった。

❖ 昭和26年初めて全国大会（インカレ）を開催した際の苦労話は？

加納 艇、ハーバー等の施設は、翌年の国体の役員だった福島先生、島田先輩、和田（朗）先輩が県との折衝で御苦労された。

早坂 プログラムの広告取りで藤崎、三越始め一番丁、名掛丁辺りの商店街を回ったが良く協力して呉れた。角帽のきく時代であった。

大原 昭和26年、インカレ用に県で購入したスナイプ20数隻が東塩釜の東北ドッグに舟便で到着し、部員総出で、解梱し、新設の松島の県ハーバーまで帆走で運んだが、一度に20数隻も走る姿は壮観であった。

❖ 艇の整備について

加納 入部して初めて、塩釜のボート部艇庫に行き、整備のために、ペンキを剥がしたら、下から五層位古ペンキが出てきたのは驚いた。

渡辺、加納 ペンキは一般に入手困難な時期であったが、ヨット部用のペンキは大学の学生課から支給された。

早坂 ロープ、ワイヤー類は長尺で購入し、自分達で用途に応じ、寸法に仕上げて使った。ステアーを作る為のワイヤーの「サツマ編み」は、指に刺さって傷かったが、和船漕ぎと並んで、当時のヨット部員の必須科目だった。

武田 春の陽を浴びながら皆でやったペンキ

塗り等の整備は、楽しい思い出だ。

小島 ワイヤ類のグリース塗り、沈した後のセールの塩出し等、日頃の点検整備にも気を使って艇や備品は大切に居た。

ヨット部の経済状況は、

渡辺 野球部と並んで、体育会の予算の最高額を獲得して居たが、全国規模の試合で活躍して居たのは、ヨット部とボート部だけだった。

加納 我々の時も最高額を獲得して居たが（1万円位？）（当時の大学卒の初任給7～8千円）部活動全体の費用にはとても足らず、部費も徴集していたが、遠征等の費用は、先輩の方々から多額の寄附を戴いて賄って居た。又ダンスパーティを開いて、セール一枚分位の費用を稼いだ覚えがある。

渡辺 ペンキ等を支給して呉れる学生課の職員を年に一回招待し、セーリングパーティと

称してヨットに乗せてあげた。娯楽の少ない時代だったので、家族連れで皆さん参加する位人気があった。

武田 女子職員を乗せると、わざとヒールさせ、悲鳴を上げさせたりして、楽しかった。

加納 課長をわざと一番傷んで居る艇に乗せて、惨状を見せ、大学予算で新艇を買って貰えないかと試みたが、駄目だった。

昭和24年に新制大学が発足した訳ですがその頃の部員の状況等について、

小島 昭和23、4年頃は海軍兵学校出身が非常に多く、結索、手旗信号等はお手のものであり、潮や風に対する感も鋭かった、ヨット部のノウハウの半分位は海軍のものが入って居た。

武田 海兵出身は、声が大きく練習に対して厳しいものがあり、海の上では、怖い存在だった。



ヨット部必須科目の和船漕ぎ

加納 海兵、陸士等の出身者が居た関係か、昭和23年度から27年度迄の五代の主将が同じ年令だった。

早坂 昭和24年に新制大学が発足し、若い人達が入って来た。上は大正14年生まれから、下は昭和8年生まれと、部員の中で9才も年令差があったのはあの頃だけであろう。

大原 旧制、新制がオーバーラップして居たので、5学年が在学して居た。インカレの時に多勢の部員を集め得たのも、五学年あったことが支えになっていたと思う。

女子部員の誕生もその頃では、

加納、早坂 昭和27年の国体（宮城）で、初めて女子府県対抗が正式に種目となった。地元としては是非これにも出場と言うことで、昭和27年春、阿部（旧姓菊地）今野（旧姓堀）達的女子部員第一期生が誕生したのだが、その経緯、苦勞話は28年卒の平野達でなければ判らない。女子の正式競技は国体だけであったが、国体では毎年上位入賞と頑張っていた。最盛期は、10名位的女子部員が居り、川越先輩の肝入りで、旭硝子の女子と定期戦をやる等、大いに活躍をして居た。

東北ヨット協会即東北大学ヨット部の時代で、全日本インカレ始め、全日本個戦・国体等の競技にでられたと思うが、

渡辺、小島 あの頃国体に、学連対抗があり、一般の部の他に選手を出すために、部員は殆ど全員国体に参加した。

小島 合宿の夜は模型を使つてのルール勉強、カリーの戦術集によるタクティックスの研究を熱心にやった。

武田 全日本個戦のL級の試合の時に、中部水域の艇が追越し乍ら酒を差し入れて呉れた。それを飲んだら元気が出て、トップでゴールしたことがある。Lは3人乗りで、楽しいレースだった。（昭和24年葉山を最後、レースは無くなった）。

渡辺 個戦のA級は一人乗り（本来の姿）で、ガフ入れ換え、センターの上げ下げ等、忙しかった。前半は良いが、後半のスタミナ切れで、三位入賞が最高であった。軽量であったが、一回も沈したことは無かった。

早坂 昭和26年東大戦で六戦トップ、インカレ予選で二戦トップで、小沢氏（日本ヨット協会理事長）から「スナイプの神様」と言われた大原の活躍は素晴らしかった。

加納 昭和26年の個戦スナイプで優勝したが、全日本級で優勝するのは、技量だけでなく、「運」が多分に作用すると感じた。

早坂 渡辺、大原は軽量級だが強風を上手く乗りこなして居た。風の逃がし方が上手かった。

渡辺 ランニングは難しい。耳朶から頬の辺りに当たる風を敏感に受けとめ、微妙な風の変化に応じた走りをすれば、追い付き、追い越しが出来る。追い風だと、走るだけは走るので注意が散漫になり易い、ランニングの走りで上位に入った。

大原 当時45キロしかなかったが、クルー平野は75キロあり、二人合わせれば大体人並であった。クルーが重い方が、艇のバランスには有利である。ランニングの重要さは軽視され勝ちだが、渡辺の言うように、耳の辺りで

風の微妙な変化を知り、うまく対応すれば他艇と差はつけ易い、ランニングで他艇と差をつけていた。

🌀その他の逸話は？

武田 松島海岸のうなぎ屋「松風」は、納会、東大戦のコンパ等で良く利用したが、日頃は肝焼きをよく御馳走して呉れた。村山はお女将の受けが良く、彼と行くと、肝焼きを沢山出して呉れた。

加納、早坂、大原 合宿の時に「松風」から鰻の頭と骨とを貰い、炊き込み飯や、汁のダシに珍重した。炊き込み飯は美味ったが、骨がバラバラになり、注意をしないと、口の中にササると言う代物であった。

渡辺、加納 五十周年式典の翌日「松風」に行ったら、当時可愛い女子高生だった娘さんが、女将になって居り孫も居るそうだが、昔の面影はそのまま、元気で店を切り盛りしていた。

加納、早坂、大原 昭和26年、東大定期戦に勝ち、「松風」でのコンパで、中井協会長（明治屋仙台支店長）から、ビールの寄贈を受け、飲み放題に飲んだのは、あの時代だけに、忘れられない思い出である。

全員 戦後の復興期で、物資、食糧もまだ不十分の時代であったが、先輩初め、周囲の人たちの温かい御援助により、楽しく、充実した部生活を送ることが出来た。僅か3年間と言う短い期間であるが、生涯の中で忘れられない貴重な思い出である。

【後記】

編集は生まれて初めてで、当日酒も入り、オフレコの発言が多く、まとめるのに一寸苦労しました。発言の趣旨については、一応まとめさせて戴いた心算であるが、表現等の不適切な部分は、編集者がお謝びします。

（文責 加納寛文）



4. 五十年史に寄せて

オリンピックヨレ自叙伝

福島弘毅

オリンピックヨット競技では参加国がそれぞれ自分の艇を用意するのが原則であるが、一種目だけは例外で開催地で準備した同一規格の艇を使用する。1936年開催のベルリン・オリンピックで採用されたモノタイプが私の同族であるオリンピックヨレである。悪名高いヒットラーではあるが、少なくとも三つだけ後世に残る業績がある。それはアウトバーンと呼ぶ高速道路網を世界に魁がけて整備したことと、国民大衆向にフォルクスワーゲンという名車を産み出したことである。陸上のフォルクスワーゲンに比肩する傑作が私共オリンピックヨレである。

4年後の1940年には東京でオリンピックが開催されることに定まっていたが、ヨット界の後進国である日本で新しいモノタイプを設計することなど思いもよらず、あの気の強い小沢吉太郎氏としても同じオリンピックヨレを採用するはかなかった。せめて建造だけは何とか国産でというわけで、ドイツから設計図をとり寄せて試作にとりかかった次第である。

保田氏ら東北大学の学生の有志が集まって、松島湾にヨットを浮かべたいということで奉賀帳を持って寄付集めを始めたのが昭和12年（ベルリン・オリンピックの翌年）の暮のことである。当時帝大生と言えばエリート中のエリートとして自他ともに許された古き良き

時代でもあり、学生達の熱意と地元経済界の善意が実って若干の資金が集まった。

当時日本のヨット競技の主力はもっぱら12呎A級ディンギーであったが、彼等が最初に発注した艇がこの私であった。乏しい資金の内から大枚200円！の出費（当時ディンギーは新艇でも100円はしなかったと思う。なにしろ大学出の初任給が6、70円の時代である）は大変な英断であった。彼等の夢は恐らく晴れのオリンピックで一旗と言うことだったろう。

昭和13年バルサ工作所の建造に係わる私が東北大学ヨット部の第一艇として松島湾に浮かぶこととなったのは、以上の経緯である。全長5.00mセール面積10.0㎡マル・ユニーリグの真白い艇体は、輝くばかりの美しさで、後に湯沢豊城先輩作詞のヨット部歌に「佐保の女神」と歌われたのも無理はない。

オリンピックヨレの設計には幾多の細心の注意が払われている。その一つは艇体の線図で、どんなヒール角度でも浸水面積が対称となる点である。普通のディンギーではヒールすればウェザーヘルムになるのが当然であるが、ヨレの場合は殆ど舵を引く必要がないほどバランスが良い。最近のレース艇設計ではスピードさえ出ればよいといった過激思想が横行するなかで、ヨレの抜群の操縦性は久遠の

理想の設計と思う。戦後横山晃氏（白翠会員の横山氏とは同名異人…念のため）が設計したシーホースとかいう舟は、盗作ではないかと疑わせる程よく似ているが、ジブを付けて2人乗にした分だけ改悪である。

当時、だんだん戦時色が濃くなり初め、政府の号令で「見よ東海の…」ではじまる愛国行進曲が無理に流行させられた。その歌詞にちなんで私を「朝雲」（あさぐも）、もう一隻

の中古の12呎ディンギーを「八州」（やしま）と命名したのは初代部長高須鶴三郎先生である。帆走部には艇庫が無かったので松島海岸のパークホテルの庭先がディンギーの置き場で、備品類はホテルの縁の下に保管されていた。昭和13年9月には12呎ディンギー6隻の新艇が加わった。

わたしの一生の中で最も晴れがましい思い出は、同年9月18日、東北ヨット協会創立記

念式典がパークホテルで開催されたとき、当時の東北帝国大学総長であった鉄の神様本多光太郎先生を乗せて帆走したことである。たしかスキッパーは保田氏だったと記憶する。

たしか昭和17年頃L級という18呎の中古艇が横浜で売りに出た。電気通信研究所長であった抜山平一教授に実験艇という名目で出資を勧誘することに成功したのは当時の部員の外交手腕によるもので、これが松島湾にスループリグつまりジブセールのついた艇が浮かんできた最初である。同教授のもとで水中超音波の研究に従事していた福島助教授（後の第2代部長）がヨットに関係するようになったきっかけでもある。

第二次世界大戦の戦局は日に日に不利となり、東京オリンピックは幻と消え去り、毎年の恒



オリンピックヨレ「朝雲」

例の明治神宮大会さえ満足に開催されなくなってしまった。文科系学生は学徒動員で学業を中断して戦場に駆り出された。理工系は戦場にこそ行かないで済んだものの、勤労動員



本多光太郎先生を乗せて（昭和13年9月）

で勉強どころではなかった。その間ヨット部の伝統を守ったのは僅か数人の医学専門部の学生だけであった。

そして敗戦、仙台市は一望の焼野原と化し、パークホテルは占領軍司令官の宿舎として接收されてしまった。占領軍にして見れば、ヨットはホテルの付属物と思ったのも無理はな

い。日本人全部が呆然自失、食料難に追われヨットどころの話ではなかったから、この時点でヨット部が潰滅しても不思議ではなかった。この危機を救ったのは島田、岡田、川越といった諸先輩の寝食を忘れての奔走の賜物である。ディンギーの数隻は正式に接收されたが、残りは米軍に交渉して返還して貰い塩釜のボート部艇庫に回航した。米兵が勝手に乗り回して、海岸に乗り捨てた艇がかなりあったが、部員がそれを捜し出しては艇庫に運んだものである。進駐軍当局や宮城県庁にブローケン英語の陳情書を持ってゆき、ディンギーの接收代金をせしめる迄には、部員諸氏の苦労は並々ならぬものであったろう。しかし、あの急激な戦後インフレの真最中である。放っておけば、貨幣価値は見る間に下がってゆく。東京白翠会の尽力で今日の言葉でいう「財テク」を試みた訳であったが焼石に水程度の成果はあった。戦後の窮乏のさなかに復員し、まともな学業さえ意のままでなかった時期に、ヨット部再建のため寄付金集めに奔走し、新艇を工面した当時の部員諸氏の苦闘は敬服に堪えない。

私は松島海岸の一角に半分ヘドロに埋まって、無残な姿で腐りかかっていた処を部員に救出された。肋骨の大部分は腐食が甚だしく、一時は再起不能と診断されたが、西沢造船所の応急修理で何とか一命をとりとめることができた。L級の方も同様な運命であったが、こちらは頑丈な出来の故か案外早く戦列に復帰できた。

終戦の翌年昭和21年には逸早く第一回国民

体育大会が京都で開催され、ヨット競技が琵琶湖で行われた。あの頃の東北ヨット協会の加盟団体は実質的には東北大学ただ一校であったから、各種目ともわがヨット部員が出場する訳である（実業団は東北大職員であるOB）。高校男子が国体種目にとりいれられたのは、第5回（愛知県半田）からであるが、こればかりは大学生を出すわけにはいけないので、仙台一高に勧めてヨット部を作って貰った。

昭和27年の第7回国体を宮城、福島、山形の3県共同で開催することとなり、ヨット競技は宮城の担当で松島湾で開催することに決定した。その予行を兼ねて前年には全日本インター・カレッジを開催することとなった。何しろ松島水域初まって以来の全国大会である。レース海面は桂島と松島海岸の中間で陸岸からかなり離れており、乗り回しで1日に何回もレースを消化する必要から、半田方式に倣って海上本部方式とせざるを得なかった。競技艇（スナイプ、12呎ディンギー各40隻）の建造やヨット・ハーバーの建設は国体のために県の費用で賄うことが出来る。それを一年早く用意して貰いインカレに間に合わせようという計画である。

インカレ開催の連絡のため東北ヨット協会幹事の福島が岸体育館（当時はお茶の水にあった。）の日本ヨット協会を訪問した際、小沢吉太郎氏から厳重に言い渡された事は、補助役員要員として選手のほかにもヨット部員100名を確保せよとのことであった。この無理難題を見事に実現させた当時の主将加納先

輩の統率力は見上げたものである。また仙台一高、二高のヨット部員もよく協力してくれた。

12呎ディンギーは地元西沢造船所を育成して製作した。スナイプの方は浦賀ドックが在庫品20隻を保有していたので、それを県費で購入する予定であった。ところが県予算はスナイプ分が27年度回しになってしまい、インカレ開催が危ぶまれる事態となってしまった。松島瑞巖寺の副司が観光事業の一環としてヨットを肩代わりする話があって辛くも窮地を逃れた。あとでこの副司の背任事件が発覚したが、ヨット協会側には実質的な被害が及ばずに済んだ。

インカレの準備には県経済界の各位の多大な支援を受けた。中井会長をはじめ平野和夫氏（早大OB・白翠会員平野節夫氏令兄）島田先輩等東北ヨット協会役員の苦勞を多とするが、特に桂島を基地として、泊まり込みで競艇の整備に当たった補助役員の部員諸君の苦勞は大変なものであったろう。

昭和26年度のヨット部は部員数が多かったばかりでなく、技量の点でも充実していてインカレでの優勝候補と目されていた。しかし主将以下レギュラーといえどもインカレ開催の準備作業に忙殺されて練習も意のままにならなかった。予選レースの最終戦で他校から集散的にマークされて遂に長蛇を逸したのは気の毒であった。ただし、その夏蒲郡で行なわれた全日本選手権のスナイプ級では加納・平野・丸島組が見事優勝して雪辱している。

インカレおよびその翌年の第7回国体に際

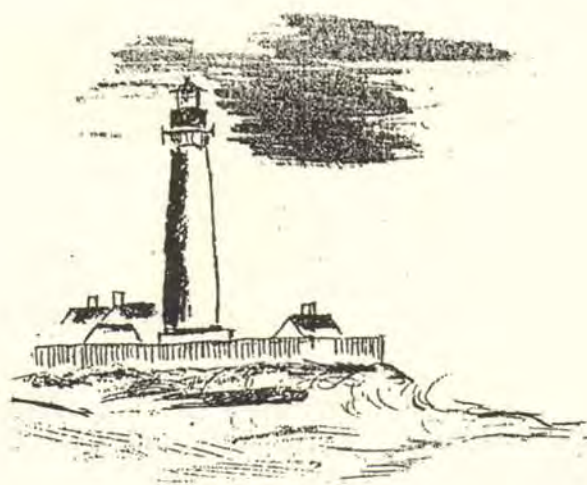
し、運営の応援に全国各地から馳せ参じたOB諸氏のチーム・ワークはさすが海に鍛えたシーマンと感心したものである。第7回国体で新に採用された新種目は一般女子で、東北大も女子学生を勧誘して俄か仕込の練習をやった。わがヨット部に女子部員の誕生した始まりである。今でこそ女流ヨットマンは何も珍しくはないが、最初の頃は抗議の裁決で失格を言い渡されると、泣きだす選手がいたりして審判員を悩ましたものである。国体のお蔭で松島海岸には県営の艇庫が出来た。レース艇の払い下げを受けて多数の高校にヨット部が創設された。現在でも宮城県は高校の数では全国有数のヨット王国である。

私自身終戦時の損傷が完全には元に戻らず、艇体は当て木ですっかり重くなってしまいい、その上いくらまきはだとパチで胡麻化しても水漏れが止まらない。セールはボロボロの継

ぎだらけで、昔日の面影は無くなった。私の仕事は部員諸氏の練習の時の発着艇と、福島部長のプレジャー用に成り下がり、部員の活動を横から眺めるだけであった。

昭和33年、東北協会主管の二度目のインカレが花淵浜で開催され、東北大は初の優勝をなし遂げた。その年の秋、松島ヨットハーバーで催されたヨット部創立二十周年記念式典には、久しぶりで高須前部長にお目にかかることが出来た。先輩方の御尽力で新しい救助艇「みどり」も進水した。

しかし、私は寄る年波で艇体の損傷はますます激しく、遂に再起不能となり廃棄される運命となってしまった。高須元部長以来の宿願であったヨット部艇庫の新築落成を見ないであの世へ行ってしまったことは返す返すも残念である。いまはパウのクリート1個を残すだけである。



私の今だから言える話の一つ

中尾 良（昭和17年卒）

貴重な陶器作りのメダルを三個もっています。

当時は、成績とは関係なく、朝日新聞宮城版には、インタビューの記事が出ました。特に16年は矢吹さんと出場して下から数えた方が、早い成績であったにもかかわらず、写真をとられました。国民大会に出ればニュースであった時代です。私は、競技よりも絵の展覧会や各大使館より、水雷艇の宣伝用映画を取り寄せ、一番丁の映画館で一般無料公開をやる等の様なことが好きでした。

白翠会1号の編集もそんな意味で一生懸命やったものです。

17年10月1日にNYK入社、且つ自動車隊に入隊。（よって会社は予備書記）

20年1月盲腸炎手術のため一時退役し、3月に出社。8月には終戦を迎えました。

日本郵船ヨット部主将となり、ディンギー2隻、改造L型1隻でNYKヨット部を再建した。民間会社、戦後最初の艇庫を貯木場岡本造船所のとなりに建て、登録部員70名、実働部員30名で26年までつとめました。

毎年2回社内ヨット大会を行い、個人戦があつて最後まで私に勝つ相手はいなくて、今でも冗談で、一戦交えたいと挑戦してくる人がいます。



①紀元2600年秋季明治神宮
国民体育大会章
（厚生省 昭和15年）

②明治神宮国民体育大会章
（厚生省 昭和16年）

③明治神宮国民錬成式大会
選出章（参加章）
（厚生省 昭和17年）

私が日本郵船会社の本店勤務をしていた23、24年頃、上司に一人の米軍人を紹介された。背の高いひどく品のいいG.H.Qの佐官級の軍人で、「レース用のヨットを自費で造りたいようだから、相談にのって上げてほしい」とのことであった。

当時、横浜の岡本造船所専属のヨット設計者、横山さんが自ら試作して、テスト中であった新艇があった。私もちょくちょく乗ってみて、その滑走する様な走りには、新しい近代ヨットの時代が来たことを感じていた。

私は会社にけんめいをお願いして、このシーホース艇の購入許可をとりつけたばかりであったので、彼にも当然これをすすめた。

それからは月に2回程、私の職場にストレートにやって来て“さー行きませう”で彼のジープに乗せられて横浜がよいをつづけて、

注文し、完成し、支払いにも立会って、そして、外人のヨットクラブに加入をすすめ、以後毎日曜日、クラブレースをたのしんでいた。

彼とのこの一連の交渉で日本海運が好転したかどうかはわからない。

彼は毎回、コーラ3本と軍用ランチボックスを1ヶと時折タバコをカートンで頂戴した。それ以上のものは最後までもらうことがなかった。

尚、シーホースの登録番号のことであるが、当然NYKが1番2番をもらえるものと思っていた処が、1から10番までは駐留米英軍にとられ、11~14番までは横山さん、岡本さん関係となり、15番以降をやっとあたえられた。

その後、転勤の折り私はかべかけに改造された、15番のセールを送別記念品として頂いて、今これを大切にしている。



シーホースのセールで作った
ペナント 15はセールナンバー

初めての全国大会

加納寛文（昭和27年卒）

国体の前年に全日本学生選手権（インカレ）を行うという当時の日本ヨット協会の方針により、昭和26年8月3日～5日に松島でインカレが行なわれた。

東北ヨット協会の加盟校は東北大と仙台一高の2校のみで、日本ヨット協会としても、果たして開催出来るのか危惧して居た由であるが、国体の一環として、レース艇の建造、松島海岸にヨットハーバー・艇庫の建設を県費で賄い（全国で初の県営ハーバー）施設は整備された。

全国から15校が集り、これを抽選（ノーシード）で5校宛の3組に分け、3回戦の予選を

し、各組上位2校の6校で決勝3回戦を行い、予選と決勝戦の合計得点で最終順位を決めると言う、例年と同じ競技型式が取られた。レース艇は、S級・A級2艇宛、開催地で用意した艇の乗り回しで行なわれた。

この時の記録は、白翠8号に記載されて居るが、裏話的な事柄を思い出すままに述べることにする。

●補助役員の確保

「インカレ要員としてレギュラー以外に、50名の部員を用意すること。」昭和26年4月新入部員の歓迎会を前にして、福島部長より、御指示があった。新入部員を加え、60名を超



完成した県営ヨットハーバー艇庫

す大世帯となり、大学保有のヨット、和船では捌き切れず、仙台一高が所有して居た9米カッターを借り、これを本船として練習をした。ヨット部の歴史の中で、カッターを漕いだ経験者は、この時の部員だけであろう。

大会直前の準備の追い込み期には、東北大、仙台一高の部員の他、前週の土日曜に定期戦を終え、そのまま松島に合宿して居た東大ヨット部員も艇の整備等に協力して呉れた。

開催期間中の人員不足が心配されたが、開会の前日に多数の先輩が馳せ付けて下さり、本来は学生がやるべき仕事迄も、テキパキと捌いて下さり、無事大会を終了することが出来た。

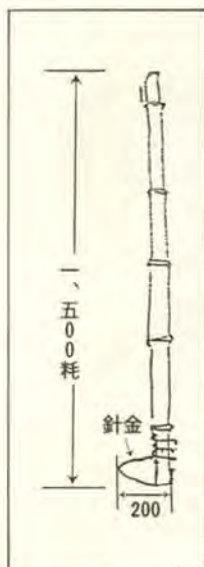
後日、福島先生から、「日本ヨット協会からは選手の他に100名の人員を用意するように言われて居たが、とても無理な話なので、50名なら何とか集められると思い、50名と言ったのだ。先輩諸兄の協力により、インカレ

は無事終了することが出来た。」との裏話を聞かされ、改めて先輩の有難さを痛感した次第である。

●藻掻棒

松島の7月・8月は浮遊藻の最盛期である。帆走委員会もこれの取扱い方には頭を痛め、浮遊して居る藻の塊はルール上の障害物として処理することとなったが、艇体や

藻掻棒



舵等に引っかけたものを除去する手段として「藻掻棒」なるものを各艇の備品とし、これで取除くことを許すと言うローカル・ルールを設定した。

これは前代未聞のものであり、この時のインカレに参加した他水域の人に会うと、今でも必ず「藻掻棒」の話が出て来る程である。

この「藻掻棒」は東北大の創作品で、大会直前に、皆で竹を切り、針金細工をして、試合に間に合わせたものである。

●抽選会

試合前日(8月2日)の主将会議で予選組合せの抽選会があり、東北大は第1組を引当てたが、この組は大変な組合せとなってしまった。

関東大会優勝の東大。同じく2位の早稲田。近畿大会優勝の同志社。関西大会優勝の関西学院。当時の学生ヨット界のベスト4が同じ組に集まってしまった。これを見てその時の帆走委員長・小沢吉太郎氏(日本ヨット協会理事長)は、「優勝校はこの組から出ること間違いなし。」と言われた。その言葉通り、関西学院が優勝した。

●予選レース

予選は3レースであるが、第1組は初日に2レースを消化し、東北大は東大に次ぎ2位であった。(2位迄が決勝進出)2日目の第3レースは「3位以下のチームが狙って来るから、順位は多少犠牲にしても、失格をしないようにする。」との作戦で臨んだが、S級・A級共夫々1艇が、スタート時に失格させられ、4位に落ち、決勝進出は果たせなくな

った。

この第3レースは、後にも先にも経験したことのない程緊迫したものであった。ベスト4の面子にかけて、東北大の下位にはなりたくないとの意地で、3位以下の各校は臨んで来た。ルールの許容限界一杯の攻撃・防御。それを為し得る的確な操艇技術。流石名だたる激戦区を勝ち抜いて来たチームの技術力、精神力の凄じさには感服すると共に、東北大は井の中の蛙だと痛感させられた一戦であった。

●監視艇の艇長

大会3日目決勝戦の日はレギュラー全員補助役員の業務に就いて大会運営を手伝った。亡くなられた今井先輩(帆走委員)の監視艇の艇長を務めたが、「監視艇の位置はレース艇の動きを見て、次に起り得るケースを予測し、そのケースを最も正確に判定出来、尚かつレース艇の邪魔にならない場所に、監視艇を位置させる。」との基本を実戦で教示戴いた。理屈は判るが、実行はなかなか難しい。各艇の動きから、次のケースを予測するには、可成りの習練が必要であり、これを十分訓練して置けばレースでの失格は防げたのだと、日頃の練習の着眼点の不十分さを痛感させられた。

インカレは予選落ちで終了した。

当時、7大戦はインカレ開催水域の大学が主催し、インカレの翌日に、その場所、施設、レース艇を使って行うのが慣例であった。

これは、①、7大学の殆どがインカレに出

場して居り、その場に集まって居る。(松島の場合は大阪大以外の6校がインカレ出場)

②、改めて施設、レース艇を準備するのは労力、金銭両面からも困難であった。

この2つの理由からで、最近の如く、7大学全種目の対抗戦ではなかった。

この慣例に従い、インカレの翌日(8月6日)、同一施設で3レースの試合が行なわれ、九大優勝、東北大2位で競技は終了した。この競技での裏話の思い出を次に述べる。

●幻の第2レース

快晴、南風4~5米の快適なコンディションで第1レース終了。第2レースも同様のコンディションでスタートしたが、後半になり、



インカレ開催ポスター

一天俄にかき曇り、凄まじい雨が松島を襲い、島影は勿論、マークどころか周囲のレース艇も見えない視界10米位の状況となった。この盲目的状況の中で、南風が北風に180度変化した。この風向の変化に気付いたのは東北大メンバー以外には殆どなく、20分位で雨が上がり、視界が開けた時に、正規のコースを走って居たのは、S級・A級共に東北大クルーだけであった。雨が上がると共に風もピタリと止み、無風状態となってしまった。東北大のS級2艇は最終マークを回りゴールとの中間位に居り、A級2艇も最終マークの回航寸前の状況であり、他校の艇は、SもAも遙か後方に漂って居る。南の超微風が吹き始め、艇は少し動き始めた。このままゴール出来れば、大差がつく、南の海面が黒く、風はすぐ近くまで来て居るが、タイムリミットも近付いて居る。風が来たのと、N旗が上がるのと同時であった。

東北大が視界の無い中でもコースを保ち得たのは、①、夏の俄雨では北風に変わるケースを経験的に知って居た。②、近くの藻の流れで潮流の方向を知り、潮流から方位を判断した。何れにしてもホームウォーターの強みである。2位グループに留って居たベテラン連中は「周囲が全く見えなくなったので、艇を止めて、視界が開けるのを待った。」とのことであった。風向の変化に気付かず、盲走した連中は、遙か彼方に行ってしまったわけである。

このレースが成立して居れば、最終順位も変わった筈である。しかし、それでは余りに

も地元有利になり過ぎ、不公平である。不成立で良かったと今でも思っている。

視界0の状況下では、艇を止めて置くと言うのが正しい航法であろう。しかし地元校として、「眼をつぶっても、松島は走れる。」と言う処を6校に見せることが出来たのは、痛快事であった。

創部以来初めてのビッグイベントであった全日本インカレ及び、7大戦を無事に終了出来たのは、

- 1、あの腰の重い宮城県庁を動かし、レース艇のみか、ヨットハーバー・艇庫を松島に建設させた東北ヨット協会役員（福島先生、島田先輩、和田（朗）先輩他）の方々。
 - 2、国体と異なり、県からの役員委嘱状もなく、全て自腹で仕事も休み、馳せ付けて下さった先輩の方々。
 - 3、インカレ要員で多人数となり、碌に艇にも乗れぬのに、途中で止めたりせずに最後まで縁の下で力持ちで頑張ってくれたヨット部員の方々。
 - 4、あたかも東北大の予科生の如くに、我々に協力してくれた仙台一高塩浦部長先生始め部員の皆様。
- これらの方々の御尽力の賜物に他なりません。ここに改めて厚くお礼申し上げます。

選手宣誓

平野節夫（昭和28年卒）

『ここに高松宮並びに同妃殿下の御臨場を忝くし、風光明媚な松島湾於て、第7回国民体育大会ヨット競技が行われますことは我等の深き喜びであります。本大会を通じ正々堂々と競技を進め、スポーツマンシップの発揚に努めますことをここに誓います。』

以上が私の最初にして最後の宣誓で、簡単なためか今もお記憶している。

宮城県的一般代表であり、しかも大学の主将であり、宣誓の指名は当然だったと思うが、私としては予想もしてなかった事なので非常に困り、宣誓文は県の教育委員会（国体の主催団体）に無理にお願いして作成・清書して戴き、私は暗誦しただけであった。

宣誓の本番は、晴れの舞台であり初めての体験でもあり相当に上がったが、それでも県の担当者からは何とか合格点を戴き、ほっとした記憶がある。

その当時の国体では、競技艇は全て主催者が準備することになっていた。宮城国体のスナイプ級では、種々の都合により2つのメーカ（浦賀と岡本）の艇が用意されたがその性能には著しい差があった。従って同時にスタートしても、間もなく性能の違う2つのグループに分かれるので、まるでスナイプ級とA級ディンギーで一緒に一つのレースをやるような感じであった。勿論、艇は毎回乗り換

えるので競技の結果は平均化されるが、ライバルをマークすることも出来ず、やりにくく気合いの乗らない大会であった。

また、競技海面が藻の多い松島湾内であった為、センターボードやテラーにたまった藻を藻かき棒で随時除去し、藻による艇速の低下を防止する必要があり非常に煩わしかった。しかしその反面食い下がる相手を巧みに浮藻に突っ込ませてマークを外すという利点と面白さがあった。

このように特殊条件が多いので、地元水域の選手には可なり有利な大会であった。私を知っている他水域の選手・特に東京代表の平田さんが厳しくマークしてきた。しかし私の調子が悪くあまり走らなかったのも、彼も後半戦ではマークしなくなった。

この大会の最終成績は、三宅君との慣れたペアだったにも拘らず地元の利を生かせず、6～7位だったと思う。しかしこの大会は私の5回の国体出場の中で、最も思い出の多い国体であった。

風見糸と思い出

阿部てい子（昭和29年卒）

今ヨットのことを想い浮かべただけで、広い海や舟べりを打つ波の音、風をいっぱい受けふくらんだ帆、そしてレースでのいろいろな出来事が走馬燈の如くよみがえってきます。

そもそもヨット部に入ったのは、友人の紹介がきっかけだったのですが、丁度昭和27年松島で国体が開催され、女子のレースも初参

加するために、女子部員が必要であつたらしく、早速部員として活動することになってしまいました。

それからは、すべてが初めてのことで、女子は勿論のこと部員一同にとって大変だったと今になってつくづくそう思い起こされます。

その練習の中で今でも頭に残っているのは、



前列中央若かりし旧姓菊地てい子さん（昭和29年 於 中井直二氏送別会）

風見糸のことです。よい風をキャッチして帆走することが大事であると、練習の中で教えられたのですが、それは松島の風がよく変化することと関係があり、その風の微妙に変化する方向、強弱などを見逃すことなく対応すべきだということで、海に出てはただひたすら糸を見続け、こだわり続けてきました。又レースで失格することについても思い出があります。レースの前に先輩から念入りにレースで失格すると得点は0になってしまうので、くれぐれも失格は避けるべきだと注意をされていました。それで自分でも充分注意をし、レースのルールなどの研究もかなりしましたが、経験不足のために実際は理論通りにはいかず、結局、レースの混乱の中に入ると、その中にまきこまれ、失格となっていました。それを委員から言い渡された時には、口惜しいやら、先輩や部員に申し訳ないやらで、急に体から力が抜けてへたへたとなりました。このように、まったく初めての国体のヨットレースではすべてが無我夢中で何もわからない内に終わってしまった感じでありました。こういう状態ながら、短期間の練

習をしただけの私達が、他の長い経験者達の間に入り、レースが出来たのも、男子部員の教えのお蔭と感謝いたしております。

それから10年後、又松島での国体がありヨットを愛する女子の会が何らかの形で開かれたらと思っていましたが、その国体の最中に先輩方があちらこちらへ走りまわりお骨折り下さってその女子の会が開かれることとなったのです。結局その会は顔あわせで終わったものの、先輩の尽力で開かれたのと、そういう集まりが出来たということには大きな意味があると思います。これからもっと顔あわせだけでなく、何らかの交流のある場になることを切に願っております。

私達が苦勞してヨットと共に過ごして来た時もすぎ、数年たつと、太陽の季節の小説や映画のヒットによりヨットが盛んになり、女子のヨット人口が増え、太平洋横断が成功したりして各方面に活躍しているのを見ますと、長い月日の経過が感じられます。

我が東北大の女子ヨット部員も大いに頑張り活躍してほしいと切に思います。



昭和28年より32年迄のヨット部を語る

高橋三雄（昭和31年卒）

此の世代は、学制では新制大学に切り変わる過渡期であり、軍人体験の有る上級生と、旧制高校転向組及新制高校卒と、学制の谷間に在る人間が同居しており、年令的格差も一昔と言う極めてユニークな時代であった。

軍人組は加納（海）、早坂（陸）、垂水（海）、平野（陸）、古宇田（海）、阿部（陸）など層々たるメンバーであり、軍隊調の可なり厳しい規律ある部活動の時代であった。

インカレに既にスナイプが導入されたが、当時島田先輩のスナイプ艇を好意的に御借り出来た様な程度であり、ナイロンセール、ロープ類、ステンレス金具が新素材として使用され始めた様な時代であった。まだ戦後の影響が褪めず、部員の服装も各自各様であり、インテリ乞食のスタイルも当時の社会状況では余り気にならず、合宿も1日米4合、30円、米なし50円で納豆、生玉子、味噌汁の定食、夜は草履の様なステーキが食べたいと言う様な話だけで、結構練習に精を出していた様な感じがした。

低迷せる此の時代に東北ヨット界の画期的行事として、全日本学生選手権及七帝戦が26年に、翌27年に第7回国民体育大会が、いづれも松島に於いて開催された事である。昭和13年に東北ヨット協会が発足以来、戦中戦後の波乱を乗り越えて、日本ヨット協会主管

レースが初めて開催されたインパクトは、我々にとって大きな刺激となった事は当然の事であった。レース運営のために部員の大量確保、OBにも貴重な時間を割愛して戴き一体となり、高校生の部分的協力は有ったが、東北大主体で運営が全てなされた点で極めて意義深い出来事であった。技術的にも各水域のレベルを目の当りに接し将来の糧となった事は勿論の事である。協会保有艇の増加は、ヨット人口の増加に連り、翌年の国体に向けて、仙台一高、二高、石巻高等に相次いでヨット部が誕生し、東北学院大にもヨット部が創立され、東北ヨット協会も、東北大主体から脱皮する事となった。更に国体に女子競技が登場する事となり、我が部に女子部員の誕生となり、菊地、堀、若生、梶谷、高橋の諸嬢が入部し、いきなり国体三位入賞の偉業を果たした。

施設的には松島海岸雄島寄り県営艇庫、クラブハウス、栈橋が完成しヨットハーバーの形態が整備されると、自動的に部員層も厚くなり、艇も増加し又練習量も充実し、対東大戦初勝利、七帝戦初勝利の実績を残せる好結果に連った。此の補完として、ヨット経験を有する新人として、仙台一高から、東原、武藤、渡辺、氏家等が、仙台二高から泉谷、手島等が続々として入部して呉れ、彼等が後の

インカレ初優勝に布石をして呉れた事は否定出来ないと思う。

合宿も松島、桂島の双方を、対外レースの海面を想定しつつ、より実戦的な内容で選択した。練習量は豊富となったが、反省すると量のみを追求して質的な工夫が欲しかった様な気がする。

誠に残念な事であるが、我々の世代に早世したメンバーが多い事である。高橋直靖、服部京也、佐藤宏、小梁河令二、名簿に残っていないが、相沢、昆布谷の諸氏である。一緒に元気に活動した個性豊かな仲間が、何故早く逝ってしまったのが、往時を回顧すると、ど

うしても話題の中心に登場する人達の冥福を改めて祈る次第である。

我々がヨット部から学んだものは、実社会に出で、折りに触れ貴重な体験として甦ってくる事は、誰しも共感する処である。此れからの白翠の会員として、我々は後輩の為に何か残すべきであるという使命感がある。折りしも五十周年と言う契機でもあり、OB間に提唱の有る白翠基金の設立に、経済的にも余裕の有る現在、各位に呼びかけ、積極的に推進するのが、我々の使命と考える。



高橋直靖氏追悼帆走会（昭和30年5月15日 於 松島）

あの日の松島湾

林 昭正（昭和34年卒）

昭和33年7月29日は我々にとって忘れられない日である。花淵沖で行なわれた全日本インカレに思いもかけず、優勝した日がその日だからである。全てが終わって花淵から塩釜へ引き上げる船上、先輩、現役の顔々々が折しも一段と明るさを増した夕日に映えて輝いていた光景が30年以上たった今でも昨日の様に想い出されて来る。レースに勝った充実感を体中全体に実感した日でもあった。

しかしこの勝利はそう易々と手中に出来たものではなかった。予選、決勝の記録を見ても解る様に予選は1点差、決勝は2点差で将に綱渡りの勝利であり又幸運な勝利でもあった。

予選3回選の明大の失格が我々の予選通過の決定的要因となり、これが決まってから、花淵の石だらけの突堤を走って当日発着係の指揮をとっておられた加納さんに報告に行った事を覚えている。

本当の所は、殆んど先輩が予選通過不可能と考えておられていて、我々現役は28日の夜塩釜の旅館に集められて油を絞られる所であったそうである。

当時のヨット部の実力は事前の戦績から見るとむしろ弱小ヨット部であり、前年の東大戦、年が変ったの西宮の七大学戦で惨敗して居る。いずれも強風下のレースであったが、

全日本級の実力を有していたのはS級の渡辺組だけと言ってもよかった。それが花淵インカレが近づくに従って実力が向上し、インカレの間我々向きの軽風が吹いた事も幸運であった。又事前の10日間位東大からの依頼で合同練習をやったが、関東水域でもまれて来た東大勢が以外に歯応えがなく練習レースは常に東北大が優位であった事も我々の自信につながったと思っている。

32年の夏が終わって我々4年がヨット部の運営を引継いだ時我々が考えた事は、いかにして部を活性化し、全体の実力を向上せしめるかという課題であった。偶々過去の記録を調べているうちに4～5年前の記録の中に走率と言う文字が眼にとまり、ヨシこれを採用して本レース出場の条件にしようと考え部員全員に伝えた。即ち直前の合宿の走率上位4組を出場者とし各レースの最下位者が次の組にとって変わるローテーションを組むと言うものである。これは一応出場艇3艇を前提としているが、7大戦もインカレ本大会も3艇出場でありこのルール通りに運営しようとした訳である。

当時の3年生は質、量共に充実し我々4年生が安閑として居られない状況にあって、それがこの実力者出場と言うルールと相まって部内が活性化したと思っている。特にA級に

は3年生に伊吹と言う実力者が居た事が非常な刺激になったと思われる。

かような次第で過去10カ月の練習と試合を経てインカレに臨んだ訳だが、レースもさる事ながらその準備にも多くのエネルギーを費やした。A S共に18艇を用意せねばならなかったが、当時の松島にはレースにたえる舟が12、3杯位しかなく後は水舟をビッチで内張りし何とか使おうと言う事であった。特にスナイプにはひどく苦勞したが、艇を整備していくうちに艇差がよく頭に入り本大会のレース運営に非常に役にたったと言う予想外の利

点もあった。

この整備に関連して当時の現役部員には大変な苦勞をかけたが、学院は頼りに出来ず大会の準備から舟の整備まで全てを東北大でやらねばならない為どうしても準備が遅滞気味であった。確か6月頃だったと思ったが、4年生以下主だったもの達が片平町の工学部の会議室に呼び集められて準備の遅延について在仙の先輩からこんな状態でインカレを開けるのかと気合を入れられた事を記憶している。

予選を通った夜、我々は塩釜の菊屋と言う旅館に合宿していたが、A級の決勝1回戦の



インカレ本大会優勝記念セーリング

メンバーについて協議した。ローテーション通りであれば予選3回戦の部内最下位の伊吹組が抜けて今井組が入り艇差は上から森谷組、林組、今井組となる所であった。しかし予選2回戦の今井の走りが悪く、一方伊吹の走りがよい所から最終段階で決めかねていた所、今井が是非自分を出場させ、しかも一番良い舟に乗せるべしと大変な勢いで主張して来た。ルールを尊重すべきか今井の言い分を通すか迷った末、あれ程言うのだから今井に賭けて見ようと言う事にした。

その結果は今でも語り継がれている2回連続トップであり3回戦の直前、当時の部長であった福島先生をして今回もトップであったら自分から頼んでも彼の媒酌人をやらせてもらおうと言わしめたそうである。加えて今井のトップはS級の渡辺と泉谷を発奮させ2、3回戦のトップに繋がり図らずもインカレ優勝と言う快挙を手中にした訳である。

その夜、塩釜で行なわれた祝賀会では、我々を厳しく育てて下さったいわゆる、おっかない先輩の島田さんと加納さんの両先輩が真っ先に涙を流され、その後は我々も涙が止まらず、福島先生を初め先輩を胴上げし、将に酒と涙の一夜であった。

さて責任者としての我々は決勝1回戦の艇差順についてはルール違反をした事になる。しかし結果は吉と出た。逆目が出ていたら我々に対し部内から相当な批判が出て来た筈である。結局自分自身を突き上げる様な今井のあの情熱が冷哲なルールを上廻ったと言えるのだろうか。ルールか、個人の能力か、その

優先順位をどうつけるかは仲々難しい問題だと思っている。

以上で今回私が書こうとした事は終わりであるが、予選におけるA級森谷組の活躍及び全レースを通じての小野寺組の健闘も忘れてはなるまい。所で昨年川越さんから1通の書類を頂いた。確か阪大OBのお医者さんが学会報に投稿されたものと記憶して居るが、その中で、『ヨット部の合宿生活は昔の若衆宿の様なもので、先輩と後輩が起居を共にして長所も短所もさらけ出しながら競い、怒し、助け合い、協力して事にあたる生活がそこにあり、相互信頼の下での協力がいかに大切であるかを知る事が出来る。その間に育かれた友情は永続し、消失する事がない。』と述べて居られる。翻って我がヨット部生活を見るに全くこの通りであり、ヨット部4年の間に形成された友情が30年たった今に至るまで続いていて変わることがない。松島湾と言う共通の海が先輩、同僚、後輩、年令の老若を超えて我々を1つに融和してくれる事を何と表現したらよいのだろうか。

あの4年間の貴重な体験に較べればインカレ優勝と言えども思い出のひとつに過ぎない。松島の海、それは美しくまた、不思議な海である。

全日本学生個人選手権について

伊吹万里（昭和36年卒）

我々の現役時代（昭和30年代前半）は、学生の参加出来るレースは少なく、特に「全日本」級のレースは、インカレと全日本個選のみであり、（当時、国体は全日本と名のついた大会出場者には参加資格が無く、素人大会に徹していた）後者は自艇自セールのため、金のある実業団チームの天下であり、結局学生は、インカレのみに全力を集中する結果となっていたが、これとてもチームレースであり、学生が個人の實力を発揮出来る場が殆ど無かったのである。

このため、学生個選の必要性を感じ、33年

当時学連委員であった田中（重明）君を通じ、学連委員に諮^{はか}ったところ、幸い全員一致の賛成を得、34年秋に第1回大会が蒲郡で開催されることになった。

試合方法は、各地で地方別予選を行い、ディンギー、スナイプ各1艇が本大会に参加すると言うものであり、私事で恐縮ながら、第1回東北予選を制し（ディンギー）、本大会でも優勝せんものと満を持していたが、この9月、かの伊勢湾台風が東海地方を襲い、大会の為準備された艇その他が大打撃をうけたため、第1回大会は遂に中止となり、ここに涙を呑んだのであった。

現在も同大会は試合方法は異なるようであるが、継続されており、敢えてその誕生の経緯を記録に残す必要を感じ、筆をとった次第です。



第16回松島国体開会式で
選手宣誓をする伊吹氏
（昭和36年9月）

A級ディンギーの思い出

山本憲一（昭和49年卒）

今でもよくハーバーに通う私であるが、ヨットを始めとするマリンスポーツが最近華やかになったと感じる。カラフルなドライスーツに身を包んだ若者達が、軽快なプラスチック艇に乗って海に出ていく。何も恐れるものはない。沈したって起こして再帆走出来るし、ドライスーツがあれば寒くも無い。ヨットもファッションの時代なのだ。

こんな時、ふと20年も昔のことを思い出す。A級ディンギーとは、今流行のヨットが備えている装備をすべて備えていない艇のことだ。ジブセールなどとんでもない。ティラーエクステンションもなければブームジャッキ、ホースロープも無い。それにマストを倒せばただの手漕ぎボートだ。もっと違っていたものがある。それは乗り手の服装だ。ドライスーツ、ウェットスーツなどとんでもない。破れたズボンにロープのベルト、破れた靴に着込んだジャンパー。ましなものがあつたとすれば、どす黒い雨合羽。ファッションの欠片すらなかった。このみすぼらしさはハンパじゃなかった。

しかし、待て、そう卑下することも無い。今のヨットにガンターラインが有るか、美しい竹で作ったガフが有るか、タックの時のガフ入れが今のヨットマンにできるか。これだけではない。強風時のランニングとジャイビ

ング、これらはもうアクロバットの世界だ。そうだ、我々はオリンピック正式種目に選ばれたことのあるA級ディンギー乗りであるのだ。ただしこの誇り高きヨットマンも沈したらおしまいだった。翠が来るまで冷えた松島の海で震えているしかなかった。あのみじめな思い……。

結局は海があつて風があつて若さがあれば、外見ではなく艇速でもなく、帆の数でもない何か燃えるものをいつの時代のヨットマン達が求めているのだろう。それが当時はA級ディンギーだったのである。

学連の正式種目として470級が採用されたのが昭和48年。昭和45年に入部し、すぐディンギー屋になった私にとって、3年間は楽しい付き合いであった。思い出が最後になってしまったが、私はA級ディンギー最後のインカレ本大会に出場した事が、いまでも忘れられない。また、長い夏休みの間、毎日のようにA級ディンギーに乗って、松島めぐりをしたことも、やはり忘れられない思い出である。

一言付け加えれば、微風の時のA級ディンギーほど速いものはない。この技術のおかげで、私は今、クルーザーに乗っていても、微風スタートには自信がある。何も考える必要はなく、腕にまかせるのである。

平成元年度主将として

柴田真一（平成2年卒）

我らが東北大学学友会ヨット部は、創部五十周年というある意味では大変に大きな節目を迎えました。50年という年月は、私達現役部員の年齢の倍以上に当たるものであり、改めてヨット部の歴史と伝統の重みを感じます。

この記念すべき年に私自身現役部員、そして主将として活動のできた事は大変光栄であり、またそれだけの強い責任を感じました。

4年間のヨット部での活動において、ヨット部というのは他の部に比べてOBの先輩方との結びつきが強い部であり、またそれがヨット部を支えている大切なものと思っていました。そして今回の記念式典の準備や、記念誌の編集にたずさわる中で、部を創設された先輩方、そして様々な形で部を発展させてこられた50年間の先輩の方々の御活躍に触れ、長年にわたる縦のつながり、横のつながりというものの認識を深める事ができました。また、記念式典当日は各年代の先輩方が多数七ヶ浜の合宿所までお見えになり、現役部員が多くの方々のお話を直接お聞きし、また現在の合宿所の様子・艇の様子を見ていただく事ができました。

現在東北大学ヨット部は、かつて無い厳しい状況にあります。61年に470・スナイブ両クラスがインカレ本大会に出場して以来、不覚にも予選で東北学院大学に敗れ続けていま

す。不振の原因は東北水域の状況の変化もありますが、やはり根本的なものは日頃の練習内容と練習量、そして部員自身の意識です。この事について私達は各先輩方からのアドバイス、庄司監督の御指導、そして部員同士での話し合い等によって、様々な対策を練り、実行してきました。残念ながら私達の代の結果は出ませんでした。徐々にこの成果は挙がっていると私は確信します。今、部員一人一人が先輩方の期待に答え、そして自分自身が納得するために、精一杯努力しています。我が部の目標であるインカレ上位入賞を必ずや達成してくれるでしょう。

この50周年を機に、東北大学学友会ヨット部が歴史と伝統の上に新たな一步を踏み出し、再び栄光の時代を築き上げる事を願います。



50周年記念式典にて挨拶する柴田主将（昭和63年10月）

エバ・モア号の活動と白翠セイリング・クラブ

片岡 克（昭和35年卒）

「航海日誌 日付 昭和63年5月1日 湯沢記

正午 3回目のタックで、千波崎を抜ける。アビームで快適なセーリング。波浮の竜王崎灯台を確かめ、狭い港の入口を通過する。波浮港の最奥のヨット係留場所にアンカーリングして、バウを岸壁に着ける。時に、13時、38海哩、約8時間半の航海である。セールを始末し、しばらく様子を見る。連休とあって周囲は10数隻のヨットが舳すれすれに舳いである。右隣りは、34ftのモーターセーラー、左隣りは、37.5ftの仏製の真新しいクルーザー、その間に挟まれて、我がヨットの何と小さい

ことよ。原田氏曰く“ノミのキンタマだ。”

15時徒歩7～8分の民宿福椿に行って横になる。小谷氏との関係で、東海汽船からビールと地酒御神火、焼酎の差し入れがあった。夕食の刺身は生きが良く、美味かったが、伊豆特産のアシタバのおひたしは山菜の苦みがほどよく、絶品であった。」

エバモア号

（全長）25ftクルーザー

（定員）8名

（エンジン）ヤンマーディーゼル 8PS

（建造）昭和51年



横浜沖を帆走中のエバモア号（昭和61年10月）

(停泊地) 横浜市民ヨットハーバー

(横浜市磯子区)

昭和61年春、小谷さんの発案で、ヨット購入のお話が入り、大先輩の皆さんの協議の結果、東京白翠会有志の共同所有ということで内定した。後で紹介するオーナー会員が数々の打ち合わせの中で決定され、白翠S・C(セーリングクラブ)がスタートしました。

定例会として、2ヶ月に1回、小谷さんのオフィスに集まり、ビールをつまみに、整備のこと、クルージングのこと等を語り合い、そして今日まで無事に、湾内の1日周遊から、伊豆房総方面への遠征まで、小柄な中古船SK25が奮闘している訳です。

滝藤さん、川越さんを軸に、整備の原田さん、会計の湯沢さん、往年の“桂島パワー”が、渉外の小谷さんの御協力で会を引っ張ります。全員4級免許も取得されました。最近では、残余の壮年期を更に充実したものにと、30ft級が欲しいなあと話合っている処です。白翠S・Cは、東京白翠会の支援活動でもあ

る訳ですから、横浜来訪の折には乗船のチャンスをつかんで下さい。

(オーナー会員) 滝藤(18経)、原田(19法)、湯沢(20工)、川越(22法)、小島(25工)、加納(27工)、氏家(29工)、大谷(30工)、小谷(31法)、林(34経)、渡辺(34経)、片岡(35工)

尚、クルー会員は、鈴木(52法)以下4名となっています。

(追記)

平成元年10月念願の35ft艇(仏国製ベネトー350)を取得し、現在に到っています。

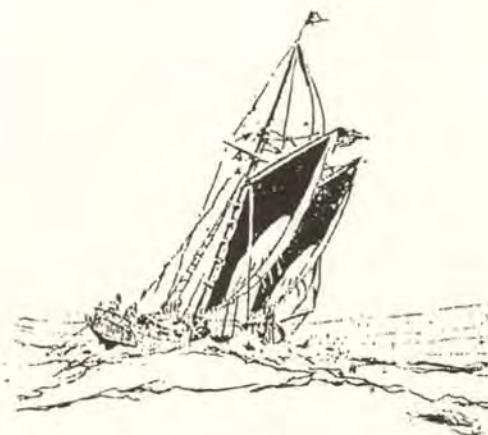
(全長) 35ftクルーザー

(定員) 12名

(エンジン) ボルボン28ps

(健造) 昭和63年

また、上記の会員の他、小池(19法)、岡田(21医)、大原(27工)、羽田(27工)、赤尾(28文)、南館(29経)、佐藤(29工)、伊吹(36農)が入会されております。



私の「ヨット歴」思い出すまま

脇坂菊雄（昭和40年卒）

創部五十周年。東北大学ヨット部は私がこの世に出る以前から在った。私とヨットとの出会いは、約30年前の昭和35年入部当時、今はインカレ種目に無い「A級ディンギー」から始まった。それは、ヨット部5年プラス卒業後研究室に残った2年の計7年間続いた。入部2年目の時、合宿所が松島・円通院から現在の吉田浜に移った。その頃、平成天皇（当時皇太子）の国体ヨットレース御観戦席として今の合宿所が建てられたのである。ヨット部7年間の思い出にはとても筆では書き尽くせない様々なことがあった。2年目の頃、ワンマンでA級ディンギーに乗り、桂浜沖にアンカーリングした時、風に流され海岸に打ち上げられたことがあった。仕方なく近くに居た小中学生ら数人に懇願し、あの重いA級ディンギーを御輿^{おみこし}よろしく肩にかつぎ上げ島の長い細道を横断し波のない北岸棧橋に移して貰ったことを思い出す。4年目の時、前年初めてインカレ予選に負けどうしても東北学院大に雪辱しなければならぬ宿命を負った。敵のメンバーは前年とほぼ同じであった。しかし、結果は勝った。第1レース、トップで第1上マークを廻りランニングとなり後を振り返った時の「これは勝てる！」と思った時の気分は今も忘れられない。その時、クルーの矢島氏の顔がとても良かった。5年目の頃、

笹森氏、井上氏、土居氏とスナイプ2艇で金華山へクルージング。ところが夜中に突風に流され牡鹿半島の名もない小さな漁港に漂着した話は前に書いた様に思う。その時、これは絶対にヨット部での忘れられない思い出になるぞと確信したがやっぱりそうだった。

昭和42年東京へ就職後の1～2年は温和しくしていた。やがて江の島で「Y-15」、佐島で「K-16」などのディンギーに乗り始めた。しかし、その数年後に腹筋力の衰えを感じ、クルーザーはどうかと思い始めた。そこで、機会あって伊豆半島西岸でOBの所有艇「さきがけ」、油壺～松島でヨット部の「日高見」に乗せて戴いたりした。「さきがけ」では、野口（泰）氏、笹木氏らと同乗、トラブルでスピナーカーが降ろせず、帰港目前で高価なスピナーを切断したことがあった。勿体ない。「日高見」の初乗船では、臼井氏らと松島から三浦半島を目指した。しかし、途中で常盤の原子力発電所用の港に寄り田舎パーでふしだらな行為（それは主に〇〇氏ら？）に及んだのが災いして、シケに会い茨城の大洗に足止めされる破目となってしまった。私は丁度社用の出張の帰りだったので、親類に不幸があった旨会社へ電話し休みを取らざるを得なかった。翌年、逆コースで油壺から松島行に再挑戦した。スタートは快調、

千倉に寄りうらみの大洗も過ぎた。四倉～小名浜沖でやや風が強くなったが好漁ーサバ、イワシが入れ食いで面白い程よく釣れる。

その時、海上保安庁の大型巡視艇が寄って来て、「貴艇の目的地はどこか？これから間もなく台風のため風波が強まるので貴艇は四倉港に避難されたし」とメガホンで丁重なご助言。漁に気を取られて居たが、そう言えば大型タンカーなどが港に向かって急いでいるのがあちこちに見える。そこで保安庁には逆らうが港のより大きな小名浜に向かうこととした。風も一段と強くなり大きなうねりの上をプレーニングしながら小名浜港内に逃げ込んだ。私は今回も社用出張がらみなので入港の翌々日お先に失礼して陸路仙台へ向かった。後日聞くとところによれば、その後数日間台風が過ぎ去るまで小名浜に足止めされたということである。

昭和46年～47年の米国（ペンシルバニア大学）留学中は、機会のあるごとにヨットハーバーを見物したが、すばらしい設備と生活に密着したヨットの楽しみ方に感心させられた。乗艇の機会は唯一度だけ、アナポリスの沿岸で金髪の御夫人とシーホースのようなディンギーに乗ったことである。海軍兵学校の専用ハーバーに数百の練習艇（主としてドラゴ級）が整然と並べられ、アメリカ海軍の強さを知る思いであった。

そして、昭和48年頃東京白翠会で会ったO



石原裕次郎メモリアルカップレース出場中のケロニア
(昭和63年 於 小網代港沖)

Bの矢島氏らの甘い誘いに乗って「ケロニア」グループに入団、やがて共同オーナーの一人となり現在に到っている。そこでケロニアのことを少し書く。ケロニアメンバーの方！多少の誤解と偏見は許されたし。

ケロニアグループの創立は25年前、ヨット部50年の半分になる。私のヨット部現役時代、塩釜の小野寺ボートでつくったケロニア一世を救助艇「翠」で花淵沖まで見送った時、自分が将来ケロニアのメンバーになろうとは予想もしていなかった。ただ、こんな小さなフネで夜昼かけて東京まで行くななんて随分乱暴な人達だと当時は思ったのである。

「ケロニア」なる命名は、^カ寡聞に寄れば「××ケロニア」というある種の海亀の学名に由来する。この海亀は、昼寝と酒が大好きで夜になると目を覚まし砂浜をうろつく習性があるそうだ。これは、今のケロニアメンバー

の一般的な行動様式を思い浮かべると直ちに理解できる。しかし、その先祖は、浦島太郎を竜宮城へ運んだりした由緒正しい亀なのである。

私のケロニアグループ参入は、ケロニア二世（1/4トン）の後期であった。関東地区のレースでは幾多の優勝、入賞を勝ち取り「恐怖のケロニア」と言われていたと言うが、これは記録から確かである。その後、1/2トン2艇乗り継ぎ現在はケロニアV世（YOKO HAMA-33：3/4トン）である。私のヨット部1年生の頃4年生以上であった大谷氏、手島氏、鈴木氏らがメンバーに居られる。これらの方々はかつて「雲上人」、「神様」であったが、今は人を介さずとも親しくお話をさせて戴いている。これがヨット部とは違うところである。メンバーは老若男女しめて30数名、電気屋、電器屋、雑品店、銀行屋、薬屋、花のOL、教師等等様々である。従って、幅広い雑学が自然に身につくような仕組みになっているが経済的効用は全く無い。メンバー共同で2階建一軒家のアパートを借り、週末になると必ず誰かが居る（ケロニアハウス：TEL 0468-82-2243）。レースやクルージングの時、責任者がまとめて人員を確保する。レースでは、通常の三角レースの他に初島、大島、神子元島、清水、鳥羽などの謂ゆる「島廻りレース」がある。この島廻りでは、近代兵器「ロラン」なるものによって一瞬にして自艇の位置がわかる。艇体やセール材質も進歩し、今やレースはハイテク勝負ともなっているが、やはり基本は人間(技

術と体力)である。ケロニアメンバーも次第に高齢化し体力の衰えを感じている。ぜひ、若い人(40才以下を指す)の参画を望んでいる。気軽に上記に電話されたい。

クルージングでは、大島の波浮、東伊豆の伊東、川奈、稲取、下田から西伊豆方面、三宅島、新島、神津島、千葉方面など様々であるが、楽しみの一つは夕食の手巻き寿司パーティーである。これをやると、みんな飢えているので狂乱(いいネタの取り合い)が起こる。

そう言えば、ある年の正月15日の千葉の船形へ「船形寿司」なるものを試食せんとしてクルージングがてら出掛けた。この船形寿司は、赤子の頭ほどもある大きさなのにネタに隠れてシャリが見えないジャンボ寿司なのである。一人前でも食い切れない。そして、ビールも飲んで満腹で棧橋(さんざし)へ戻ったら、何とケロニアが砂浜の浅瀬に乗り上げていた。すっかり酔いも醒め、必死の脱出作業でやっと何とか離岸。風と波は強烈でMax50ノットまでしかない風速形は完全に振り切れた。ストームジブ半分をマストに付けて焼け糞の東京湾横断であった。誰かが言った「ホーン岬」もこうなのでしょうか。

以上、思い出すまま漫然と書いて来ましたが、気が付くと、何で自分がヨットを始めて、何でこんなことまでしてヨットとの縁が続いているのか解りません。要するに、「船の中の懲りない面々」も居るのです。

さきがけ 魁との20年

入月一夫（昭和41年卒）

無事、学業とヨット部を卒業させてもらって、千代田化工に入社したのは、20数年も前のことです。

ヨットばかりに熱をあげていたので、こちら辺でXXをと考え、ヨットはしばらく休むつもりでした。ところが、私の人生にとって幸か不幸か、私のヨット病を再発させた人がいました。現ノース・セール社長の川島氏です。川島氏は当時、千代田化工のヨット部のキャプテンをやっており、私のヨット暦をどこで嗅ぎつけたのか、歓迎会とかなんとか言って、酒を飲ませダウンした私を自宅に泊め、翌日のレースに無理やりに（？）連れ出したのです。二日酔い気味の私でしたが、その日のセーリングは海の素晴らしさ、ヨットの素晴らしさを私に思い出させたのです。これが魁の始まりです。

千代田化工のヨット部でスナイブを続け、国体、実業団等に参加しているうちに、もっと、もっと大海原へと夢が膨らみ、とうとうクルーザーのグループを発足させたのです。メンバーは私の他に千代田化工の3人と同期の野口（明治生命勤務）の5人でした。毎月6,000円づつ貯金を開始しましたが、当時月給が16,500円でしたので、毎月赤字、借金の繰り返しで非常に苦しいときでした。4年かけて450万円貯め、1号艇の発注にようやくこ

ぎつけました。

1号艇は横山晃氏設計の、28フィート・スループ・ダブルチャイン（合板）艇でした。貧乏グループだったので、設計図は他にも利用してもらうということで、非常に安い設計料で我々の要求どおりのオリジナル艇を設計してもらいました。製作は、あまり乗り気でなかった小野寺造船に何度も足を運び、これもかなり安く作ってもらいました。また、当時千代田化工の工務部長だった加納先輩には、イギリス製アルミマストを油壺から塩釜へ運ぶトラックを融通してもらったりもしました。香野さん達が手伝いに来てくれた塩釜港での進水時、クレーンで吊り上げられた魁が着水したときは、胸にジーンときて涙をこらえることが出来ませんでした。私にとって、思い出の一シーンです。塩釜からホームポート沼津・江の浦への回航は、小野寺さんに艇長になってもらい、無事終え、沼津・江の浦を中心とした魁Iの活動が始まったのです。

魁Iのころはまだ若かったせいか、年間を通じて殆ど毎週週末、横浜から沼津へ通い、クルージングやレースやらを楽しみました。

魁Iで一番印象に残っているのは、江ノ島から沼津への帰途、夜中の相模湾で、突然のシケに襲われたのです。出発当初は月が出て微風でスピンランのノンビリ航海でしたが、

夜半過ぎ突然強風に豹変し、大波でコックピットは海水で溢れ、45度以上のヒールでもうダメかと思いました。ようやくスピンとメインを降ろし、ストームジブに張り替えること30分。後でメンバーに加わった佐々木君（42年卒）は慌ててストームジブを逆さまに張ったりしました。大波のため、DFも用を足さず、暗闇の中どこに走っているのかも見当つかず、このまま伊豆半島につっこむべきか、あるいは江ノ島ヘリターンすべきなのか非常に悩みました。遭難の新聞記事が頭をかすめ、海とはこんなにも恐ろしいものかと……。幸

いにも、前方に初島の赤緑の発光を確認、夜明けまでの2時間なんとか耐えしのぎました。

さて魁グループのメンバーも5人から10人程度に増え、益々活動も盛んになってきましたが、沼津は遠いとか、関東のNORCレースに参加したいとか、いろいろ意見かでてきました。魁Ⅰが進水してから6年目頃からだったと思いますが、たまたま葉山マリーナの艇置きに空きがあって、ホームポートを葉山マリーナに変えることにしました。ホームポートを変えるのなら、いっそのこと艇も変えてしまえということになり（小野寺さんには顔

が向けられませんでした。が……）、その当時良く走る艇として有名になりつつあったピーターソン設計のDPU30（30フィート スループ、FRP製、チタ製造）を購入することになりました。

購入資金の1,300万円確保のため、新メンバーを募り、結局のところ旧メンバー5人が退会し、8人が新しく参加することになりました。（計15人）

途中で退会してしまいました。が、赤羽君（47年卒）、小杉君（48年卒）もメンバーとなりました。

魁Ⅱはレース参加を目的とした艇だったので、内装は全くシンプルなもので、きわめて軽く良く走る艇でした。進水して2



魁Ⅰの進水

～3年のレース成績は、我々の実力からしてみれば、かなりのものだったと思っています。

戦績としては、

鳥羽パールレース クラス優勝

NORCオータム・シリーズ・レース 3位、

同大島・初島レース 2位

SSCR(相模湾小型ヨットレース)

1位3回 2位6回 3位多数等々でした。

世の中、艇体やセール等の開発は日進月歩で行われたので、やがて魁Ⅱの活躍の場はNORCレースから葉山マリーナのクラブレースとクルージングへと変わっていきました。夏の伊豆七島(神津島・式根島等)へのクルージングはレースとはまったく異なった楽しさを与えてくれたのは言うまでもありません。

魁Ⅱで印象に残っているのは小型船舶操縦士の免許のことで、メンバーの1人がある年のゴールデン・ウィークのとき、家族と一緒に葉山沖で釣りを楽しんでいたところ、海上保安庁の艇に臨検され、免許不所持ということで取り調べをうけ、書類上のオーナーである私が横須賀の海上保安庁へ呼び出され、事情聴取されました。私は長い間、ヨットの免許をモーターボートの免許と同一とし、モーターボートでテストすることに大きな疑問を持っていたので、自分自身も含めメンバーに免許取得を奨励してきませんでした。この点を取り調べ官に話しましたが、同調するも所詮法律は法律、許される筈がありません。争点は、私が名義上のオーナーであるので私に責任があるのか、共同オーナーである一人一人がそれぞれ責任があるかということ

でした。法律ではオーナーは10万円の罰金を払うことになっています。こんなこともあろうかと思って、グループの会則にこの事(後者)を明記しておいたので、結局のところ、私は無罪放免、当事者が3万円の罰金を払うことで決着がつけました。

こんなことがあって、いつまでも権力に逆らっていても大人気ないと思い、メンバー6人とともに毎週土曜・日曜 横須賀へ通い、1.5ヶ月かかって免許を取得しました。これも苦い思い出の一つです。

魁Ⅱも今年で12歳となりましたが、まだまだ捨てたものではありません。

昨年は葉山マリーナ・クラブレースで、年間全レースに出場(8レース)で総合優勝を成し遂げました。そうは言っても、寄る年波には勝てず、エンジン・トラブルが続出し、マスト廻りのトラブルも出始め、外洋にでかけるのもしんどくなったので、新艇の計画を開始しました。

一方、メンバーも年寄りが多くなり、それぞれ会社の幹部となって、活動もままならず、このままでは……との危機感が募り、思い切って新陳代謝を計りました。あまり活動していないメンバーには退会してもらい、代わって若手を多数メンバーとしました。結果的に、魁Ⅰからのメンバーは私と野口他1名の計3名となってしまいました。でも、これで、新艇計画も軌道に乗った訳です。

3号艇「魁Ⅲ」の艇種選定にあたって、レース派、ブルーウォーター派が喧々がくがく…。

1号艇は 基礎を身に付けた



魁 I 進水式後の小野寺ボートでの酒宴

2号艇は レースにチャレンジしたということから、3号艇のコンセプトは「レースもそこそこ走り、クルージングも楽しめる内装のしっかりした艇」とありきたりのものに落ち着きました。

ところが、これを満足する艇がなかなか見つからず、艇の選定に4ヵ月かかってしまいました。最終的に選んだのが、1号艇の設計者横山晃氏の息子さんである、横山一郎氏設

計の“SWING31”31フィート スループ (FRP製 ツボキヨット製造)です。この艇はIORを意識せず1/2トンでありながら3/4トンの走りが期待でき、かつ、クルージングには快適な内装をもっている……と、我々のコンセプトにはぴったりの艇です。

既に発注を済ませ、8月末には進水の予定です。私もそろそろ50の歳に近づいてきましたが、今後

も若手と一緒に、益々海の男になりきって頑張ってみようと思います。最後に私の大好きな言葉……

1895年、50歳を過ぎてからスプレー号で世界初の単独世界周航を成し遂げた、あのスローカムいわく、

「皆さんはお金を貯めてから(ヨットで)出かけようとするが、私は思い立ったらすぐでかけます。」

感激のランドフォール

中井信行（昭和42年卒）

東京湾を出港して42日目、天測に間違いがなければ今日あたり島が見えるはずだがと不安を感じつつ朝を迎えた。水平線を双眼鏡で何度も何度も眼を凝らして島影を捜す。午前8時、スコールの間から島を発見。喜びで42日間の疲労と緊張が一瞬にしてふきとんだ。とにかくこれでハワイに近づいているとの確心に心身とともに安堵した。その日の航海日誌の頁には次のように記されている。

「1982年8月19日。ハワイ諸島北西200マイルに位置するニホア島ランドフォールの予定。前日夜からオールワッチ体制。日の出とともに

に天測2回。現在位置—北緯23度29分。西経161度50分。スコール有。視界5～10マイル。152度方向微かに島影発見。感激！！丘を見てこれほど感激したのは生まれて初めて。天測に誤り無し。ビール、ワイン、ウィスキー次々と飲み干す。」

この喜びと感激を味わう為に費やされた歳月とお金や諸々のことが頭をよぎり感慨無量になったことが今でも思い出される。

ヨットマンの夢は太平洋航海に尽きるのはないだろうか。私もヨット部に入部して以来いろいろな航海記を読んでは感情移入させて、航海に思いを馳せていた。ところが思い



東京港を出港する中井氏

掛けず1979年6月、35歳の年にニュージーランド設計キャベリア32、スループの中古艇を購入することが出来た。追波I世を命名した我が愛艇との巡り合いが4年後に東京港を後にすることになったのだから人生わからないものだ。

追波I世は内装改修、補強、ジブフェラー、ウィンドベン、無線気象ファクシミリ等を搭載して次第に外洋航海に耐えうる姿に整っていった。

1981年7月から2ヶ月にわたり外洋テスト航海したが、下田ー沖繩往復のこの航海は今思うに東京ーハワイ間の航海よりも厳しいもので、改めて日本の海況の難しさを再認識させられた。

テスト帆走を無事に終えて、航海計画はハワイ・タヒチ、出発は来年の夏頃と決め準備にとりかかった。諸々の出港手続、会社の整理、食料の調達等々で忽ちに1年が過ぎてしまった。

1982年7月9日、天候に恵まれ多くの友人、身内に見送られて東京湾を出港した。「命あって日本にもどれるだろうか？」舵持つ手も震えぎみだったがもうあとには引けないという思いもあり、所信を貫くしかないと洲崎燈台・野島崎灯台を通過して一路針路は145度に向けて航海が始まった。

初めの一週間は2つの低気圧の通過で悪天候が続き、出港準備の疲労もあり船酔いに悩まされ、何度か針路180度小笠原に変更した。い衝動にかられた。惨澹たる一週間が過ぎてみると艇は南系の風で東に追し出され、野島

崎南東方向約500マイルまでできていた。ここまでできてしまっただけは迷いもふっきれ、ハワイへ向けて最善のコースで航海することに専念した。北緯30度を中心とした温暖でシケの少ないコースの選択が功を奏し、台風にもあわず相模湾より楽な帆走だった。本業が気象屋なので毎日気象ファックスを受信（日本、グアム、ホノルル）日々の気象状況の把握はコース設定にも役立ち勇気づけられた。

船上の生活は朝一番に天測、次に食事、艇の点検、舵取り、再度天測、食事と結構繁忙な毎日だった。

8月3日、日付変更線通過。8月19日ランドフォール。8月23日ハワイ・オアフ島アラモアナヨットハーバに46日目に入港した。体力回復も兼ねてハワイ諸島帆走を楽しんで2ヶ月間過ごした。

最終目的地は南太平洋タヒチ諸島の計画だったがシングルハンドによる気力、体力の限界を痛感し、残念ながら私の航海はハワイで終了となった。

太平洋半分の航海であったが無事に実現出来たのは、幸運に巡り合えたということもありますが、土井先輩の御指導や棚橋氏の医薬品に関するアドバイスを頂戴し、猶且つ広くは伝統ある東北大学ヨット部のシーマンシップのお蔭と心より感謝致しております。

紙上を拝借し、遅ればせながら諸先輩、諸兄の皆様様に御礼と御報告を申し上げる次第です。

社会人とヨット

菅原憲人（昭和60年卒）

東北大ヨット部のOB、OGの方々、現役の皆様には各方面にて御活躍のことと推察致します。私も早いものでヨット部を卒業して旭硝子に入社し4年が過ぎました。当社には、東北大ヨット部の大OB川越氏が設立された旭硝子ヨット部があり、毎週土日になると江ノ島で活動しております。今回は、学生時代のヨット部のことを思い出しながら、「社会人とヨット」について話をしたいと思います。

私は、社会人になってもヨットを続けたいと思い旭硝子に入社しました。旭硝子ヨット部は現在部員60名と社内だけでなく国体・実業団等での優勝実績を持つ歴史あるヨット部です。入部して最初に感じた事は、部員の目的意識の違いでした。全員ヨットを愛し、海を愛している事はわからないのですが、学生時代と異なり大会で優勝する事だけを考えている訳ではないのです。もちろん実業団国体等でバリバリに活躍したい人達もありますが、ヨットを通じて仕事のリフレッシュ、仕事関係以外の人達との出会いを求めて等々種々の目的の人達が集まっています。学生時代私は、ヨットを楽しむというよりは、大会に優勝することに楽しみを見出して来ましたので、当座は本当に面喰ったものです。

また、社会人になると極端に自分の時間を

つくりにくくなるということです。平日の練習はもとより、土日ですら時間を作れなくなる時もあります。学生時代を思い出しながらしみじみ「昔はよかった」というのが実感です。

大きく言ってこの2点が学生で経験したヨットと社会人で経験したヨットとの違いだと思います。この違いによって学生時代見い出せなかった、ヨットの楽しみ方を種々の人達から教えられ、ますます、ヨットが、海が好きになり、一生のヨットマンとして意識が育まれて来ます。さらに自分で無理して作った時間だけに自分自身有意義に時間を利用しようとしそういった意識がさらに加速してゆきます。

自分自身学生時代よりもさらに、ヨットの楽しみが判って来た様に思えます。

さらに私は、入社2年目にして関東地区代表として沖縄での全日本実業団の大会に参加した経験も持てレースの味も忘れることなくヨット活動をつづけられています。

ここで「社会人とヨット」とは違いますが江ノ島でヨットをやって来て感じたことを現役の方々に伝えたいと思います。

① 東北水域では、全国レベルに到達するのに不利である。

こんなことを書くとOBの方々から怒ら

れるかもしれませんが厳しい現実だと思います。

関東水域には、学生、社会人共に大勢のヨットマンがいて、一年中大海で長いレグを走り、スピードトレーニングをすることができます。また東北では、雑誌等でしか見られない甲斐選手、歌田選手、または各国の代表選手と一緒にトレーニングをすることが可能です。新艇、セールのカット、チューニング等々最新の情報が容易に入手できます。これだけ書いていただいても関東水域の学生の有利差がわかってもらえると思います。

② ヨットは、艇速で8割勝負が決まる。

ヨットはもはや根性論や気合いでは勝てないということです。タクティクスは、同等の艇速間で通用する話であって、勝利へ導く2割にしかすぎないということです。数字については、違う意見はあると思いま

すが内容的には正しいと思います。

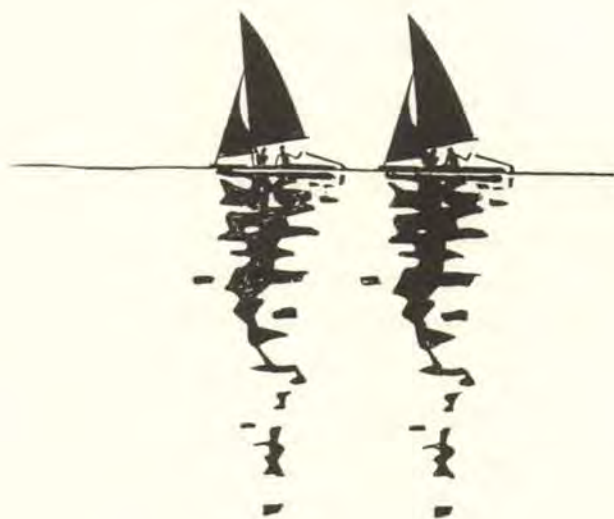
①②の難関をクリアすれば、東北水域のヨットのレベルが上がることはもとより、全日本での大会で良い成績が上げられると思います。

その為に、現役の方々はぜひ、関東水域で試合ではなく練習、情報交換を多く取れる様努力してみたいと思います。

旭硝子のヨット部は470艇は、ありませんがスナイプ艇なら最新型を2艇所有しており、平日であればいつでもお貸し致します。

私が書いた以外にも方法はあると思いますが、部員の皆様で相談して良い道を考えていただきたいと思います。

最後は、本題と関係の無い事になってしまいましたが、現役の方々の全日本での活躍とそろって旭硝子ヨット部に入部される事を希望して、筆をおかせていただきます。



5. 五十年を支えてくれた人々

懐かしき円通院 (天野文子さん)



円通院住職天野さん御一家 (前列左 住職御夫婦)

まずヨット部が円通院にお世話になる経緯のお話しをお聞きしたいと思います。

天野 戦前戦後にかけてパークホテルやニコニコ屋でお世話になって、私もニコニコ屋は良く分からないのですが、昔の木賃宿・商人宿ではなかったでしょうか。米沢さん(24年度卒)の頃だと思います。ニコニコ屋さんで合宿が出来なくなるという事で、当時の方が川越さんや島田先生に相談があったらしくて。そしたら、尾張屋さんが家にいらしたの。「東北大学ヨット部の皆様の合宿所が無くなったので本堂を貸していただけませんか」と。それでもって「どうぞ」という訳なの。

尾張屋さんと円通院の関係はどんなものだったのですか。

天野 クラブやサークルでお付き合いをしていましたの。一緒に絵を書くとか町の文化事業とか。5、6人集まると家に来てはお茶を入れてお話をして、そうして知り合いになったのが初めなの。私はお茶をやっているから尾張屋さんが習いに来た事もあって。

奥様はいつ円通院に来られたのですか。

天野 私ですか。昭和19年の12月です。

すごい時期に来られたんですね。

天野 防空頭布をしていた時代に、私は高島田を結って真赤なコートを羽織って。上野の駅で皆が振り返っていました。普通の日本髪ではなく高島田だから「あら、お嫁さんだわ!」って。空襲警報の鳴る中、東北本線を真黒になりながら、伊東から13時間掛かりで

来ました。夜行で来て、翌日瑞巖寺で仏式で結婚式を挙げました。瑞巖寺はそれまで女人禁制の寺でしたの。私が初めてで、ほんとうにもう何百年の禁を破って本堂で仏式結婚をしましたの。瑞巖寺でも皆出征いたしました。だから御飯炊もいなかった。その代わり私がやりました。

🍷 それは歴史的な結婚式でしたね。その当時の松島はどんな様子でしたか。

天野 その当時は松島には文化というものは何も無かったんですね。何もないのよ。広い境内の中に一灯だけ電灯がポツンとあるだけ。真暗でした。

🍷 パークホテルはどういう存在だったんですか。

天野 松島としては非常に画期的なものではなかったかしら、外人のホテルというのは…。トイレも洋式の水洗で。天皇陛下、皇后陛下がお泊りになったとき、お部屋の花は私が生けたんですよ。ホテルは焼けてしまったんですけれど本当に惜しいですね。一流の方は皆様パークホテルにお泊りになったんですよ。

🍷 住職が円通院に來られたというのはどんな経緯があるんですか。

天野 住職は奈良の法隆寺で修行しました。本当は瑞巖寺の弟子ですから瑞巖寺で修行すべきなんですが、体が弱くて当時の住職が「お前は学問で行け」と。仏教哲学を専攻したわけです。円通院には70年間住職がいなかったんですの。廃仏毀釈で、伊達家が神式になってしましまして、一人だけでお守りするお寺でしたの。私が来た時は、私の荷物が縛った

まま家に置いてあって、ほこりがいっぱいです。毎日毎日お掃除に明け暮れて、翌年から皆さんにお茶ぐらい差し上げる事が出来るようになって、お稽古もするようになって…。

🍷 戦後のひどい時に、よくヨットなんかに乗って遊んでいたんですね。

天野 本当にそうですね。すごい文化を持っていたと思うの。

🍷 廻りの人はどのように思っていたのでしょうか。

天野 「ああヨット。あらヨット！」と思いましたね。「素晴らしい！」と思ったの。松島にヨットが浮かぶでしょ、一つの風物詩ですよ。藻がいっぱいでしたね。

🍷 当時の合宿生活とはどんなものだったのでしょうか。

天野 その頃の本堂は荒れた葺ぶきで雨が漏って、学生さんは桶で雨を受けて寝ていましたよ。練習に出かけて行ってしまっ、濡れた布団を干す人もいないの。だから廊下に広げて干して上げるんだけど、梅雨時でしょ。ほとんど乾かないの。だからグチャグチャの布団の中で寝て…。

今の人では想像もつきませんわね。終戦後の人は苦勞してたと思うわ。だけど苦勞を楽しみに変えていらしたのね。そういう事は素晴らしいと思うの。食べる物は無かったし…。そして、ヨットがひっくり返るとビジャビジャになって帰って来て。寒いでしょ。お風呂に入れて上げようとするけど姿を見てからでしょ。1時間ぐらい掛かるんですよ。そして

2人ぐらしか入れないでしょ。そのうちに乾いてしまって「いいですよ」ですって。そしたらその人達罰で“トイレ掃除”ですって。そしてバケツを置いておいたら、それで便所掃除して、その後で学生さん達それで米を研いで味噌汁を作ってたね。驚いて「これトイレの掃除用なのよ。」と言ったら「いいですよ」って言ってました。色んな事があったわ、ハハハ…。

🍽️食当に食事の作り方を教えて下さったりしたのですか。

天野 最初は「こうすればいいのよ。」とか言っていたけど、男の人と女の人の力って違うのよね。五升釜で炊くでしょ。家じゃ一升でしょ。五升じゃへらを入れて掻き回すって言ったって大変なのよ。私の力では出来なくて「ほらほら学生さん火を止めて！焦げるわよ！」と言ってね。何回も“メッコ御飯”を炊いたんじゃないかしら。梅干を持って行って上げたら、すごく喜んでましたねえ。ジャガイモも皮を剥くと量が減るでしょ。だからガラガラと洗って、そのまま味噌汁の中に入れてました。「皮がいやな奴は自分で剥いて食え！」って言って。

🍽️食糧事情が良くなったのは何時頃ですか。

天野 人並みに食べられるようになったのは七ヶ浜に移ってからじゃないですか。学生さん達が遠征に行くとき、私、おはぎを作ったの。お茶室に呼んで。鎌田さんも印象的な人でした。一人だけ髪を短くして、年中ボロを着て、年中麦わら帽子を被っていました。大きなおはぎを作ったら甘いし2、3個食べれ

ば皆さん沢山でしょう。そしたら鎌田さん、残ったおはぎを全部平らげてくれて。「美味しい、美味しい。」って食べてくれて。

その当時の学生さんはベルトも無いんですよ。ベルトの代わりに縄で結んで。食べるものも無いし、着る物も無いし。でも一人一人の方の思い出、ありますよね。

遠征から帰って来た時には、お赤飯を炊いてあげるの。そういう事をやれたというのは私も元気だったし、ある面では長閑だったのかしら。今みたいに、こんなに忙しくなくて忙しいながらもうちの女の子を動員して。当時から働いていた事務員が5人くらいおりまして、声を掛けて頂いたら分かります。せっちゃんは、だいたい全部覚えていると思います。

🍽️薪とかの燃料はどうしていたのですか。

天野 薪は皆で拾ってきたの。この裏山に行けばいくらでもありましたからね。本堂には電灯が一つありました。時代がだいぶ良くなってから石油ストーブを入れて。「ストーブを持って行きなさい」と言ったら、先輩だけ



昭和30年当時の円通院本堂

が暖まって下級生は「寒い寒い」って。あの広い本堂に1個の石油ストーブを置いたって暖まるわけないでしょ。

近藤さん達の頃かしら、学生さん達とは別に古屋さんという方が離れに宿泊しておりまして、朝の5時頃から学生さん達が枕元で薪を割るんで「うるさい！ 静かにしろ！」と怒鳴ってた事もありました。

🔊 これは困ったという事はありませんでしたか。

天野 本堂が文化財になってから、県の職員の方が見に行らして、布団が本堂に山積みになっている事。そして、お掃除をする事が出来ない事。1カ月か2カ月に1遍しか見に来ないんですが、布団が積んである時に限って来るんです。ぶつかる訳なんです。それでどうしようもなくなって、矢野さん（昭和57年卒）が最後だと思います。

吉田浜に移ってからでは、昭和49年から再び秋合宿は円通院にお世話になりました。その時に私も住職には怒られました。

天野 私も住職には難儀したんですよ。住職は禅宗坊主でしょ。“学生たるべきものは”という事なんです。学生さんと禅宗の住職の修業時代を比べる事自体ねえ、無理でしょ。

🔊 御子息の広道さんもヨット部の学生と色々なお付き合いがあったようですが？

天野 広道は皆さんのマスコットのように可愛がって頂いて、悪戯ボウズでしたけど人懐っこい子で“ヒロボー”って可愛がられて、小さい頃からヨットに乗せてもらっていました。その影響もあって、初代の仙台三高生

なんですけど校長先生に「ヨット部を作って下さい」と言ったら、「ヨット部はお金が掛かるから簡単に出来るものじゃないぞ」って言われて。大学に入ってから中古のヨットを8万ぐらいで買い乗っていました。その後学生さんから聞いたんですけど、「なんか持って来ないと海に沈めるぞ」とか「店に行ったら羊羹盗んで来い。盗んで来ないと逆さにして池につけるぞ!」とか言われて羊羹を持って行ったりしたらしいですよ。小さい時から、皆さんの御陰で育まれたんだと思います。だから今でもヨット部の方から連絡も来ますよね。

私共がヨット部一人一人の方々に持つ思い出というのは深いし、今日迄こうして皆さんにおいで下さってお付き合いして頂いている事はとても有難くて、うれしく思っております。どうぞ代が替わりましてもずっと円通院を使って下さるようお願いします。

【後記】

あっという間に時間が過ぎ、心の底に何か暖かいものが残ったインタビューでした。部誌白翠からだけでは読みこめない戦後の先輩の生き生きとした合宿生活を記録に止どめることが出来たのではないかと思います。また、東北大学ヨット部は、地域の様々な人々と関わり合いを待ちながら今日まで続いて来たという事を再確認致しました。良き理解者を持つヨット部は正に幸せであります。

（インタビュー 庄司）

ウッド艇の生みの親“小野寺さん”（小野寺篤さん）

🌀 今と昔とでは東北大生はどういうに変わってきたと思いますか。

小野寺 まあ、東北大生って限ったことじゃないけど、昔のモノがない頃の学生は苦労していたというのは確かだなあ。だから自分で工夫したりして、色々とやってみたいだねえ。それこそ船壊したな

んつったら大変だったよ。ちゃんとしたもんなあ。でも、今の学生は壊して当たり前という感じだからなあ。俺にいわせれば壊れたんじゃないくて壊したんだよ。大体、今の学生は物事に感動しないだろ。昔の学生は苦労して新艇、手に入れたなんていったらそれは、それは、踊って喜んだもんなあ。まあ環境とか教育が変わってきて、世の中全般がそうってんだから、今の学生が良いとか悪いとかの問題じゃないと思うけどね。

🌀 では東北大ヨット部との付き合いの中で特に印象に残っているのはどういうことでしょうか。

小野寺 そうだなあ、色々あったけどなあ…。インカレの直前にスナイプの整備が間に合わなくて、こっちの仕事が終ったあとに船のペンキ塗りに艇庫まで行ったことがあったよ。板橋さんのお兄さんの方のときだったなあ。



小野寺さん（小野寺ボート製作所にて）

あと覚えてるのは艇庫の砂浜に古いディンギーを持ってってコンパやったこともあったなあ。

🌀 古いディンギーを持って行ってどうするんですか？

小野寺 そのディンギーを燃やすんだよ、風の強い晩でなあ。茶わんの中に砂とかが入ってきたけど、それで酒飲みしたんだ、その時に寝まきに火がついた奴がいてあわてて消したりしたなあ。あと前は艇庫が七ヶ浜じゃなくて松島の雄島のところにあつたら、合宿所があっちにあった頃は自転車に道具とかつけてよ、一生懸命漕いでいったよ。

🌀 自転車で松島に行くなんて、今じゃ考えられないですね。

小野寺 今、松島まで自転車こいで行くなんていったら、それこそ命がけだよ。あの頃は今みたいに世の中がせわしくなくて、車も少

なかったからなあ。

☞じゃ今だと僕らが船を小野寺さんのところに運ぶということが多いですけど昔は結構、行ったり来たりという感じだったんですね。

小野寺 そうそう、昔はよくなあ、日曜とかでも艇庫に遊びに行ったよ。鈴木さんも艇庫のところに住んでたなあ。だから今の学生は顔も名前も分かんないけど昔の学生の方は結構覚えてるもんなあ。

☞では、今までの部員の中で特に印象に残っている人もいるんじゃないですか。

小野寺 そうだなあ、みんなそれぞれ個性的な人達だったけどねえ、俺が最初に接した先輩というと、手島さん、大谷さん、あと伊吹さんとかだったなあ。そうそう五十周年の式典の帰りに寄ってくれた野口さんとか、あの頃からの付き合いだよ。手島さん達が卒業して、うちで最初にクルーザーつくったんだよなあ…「ケロニア」だな。あと49年に入月さんとかが作った「魁」とかなあ。東北大学とは本当にずい分色々あったなあ。卒業証書もってきて見せてくれた人もいたし、艇庫に行けば必ずタバコをたかってきた人もいたしなあ、みんな偉くなってるよ。学生の頃の姿からは想像できないよ、もう、みんな部長クラスだよ。

☞でも、会えば、やっぱり昔の面影とかは残っているんじゃないですか。

小野寺 うん、面影は残ってるなあ。そういえば、何時だったかなあ、笹林さんと会ったなあ。出張かなんかのついでで艇庫に寄ってくれたんだと思うけど、やっぱりそういうの

は嬉しいもんだよ。女子部員っていうのは今はいないのか？

☞今は一人もいないですねえ。

小野寺 昔は、毎年国体にいった先輩とかもいたのになあ、みんなこっちに帰ってくるようなこともないんじゃないの。

☞そうですねえ東京とかで就職しちゃうとなかなか仙台にくる機会もなくなりますからねえ。ところで東北大学につくった船で今も覚えていらっしゃるような船はありますか。

小野寺 色々作ったから特別は覚えてないけどなあ、A級ディンギーとか保管してあのか？

☞ええ、A級ディンギーのセイルとかはちゃんと保管してあります。

小野寺 そういふのはちゃんとしておいた方がいいよ。持ちだし禁止にしてな。あれはもうできて150年位になる船だからなあ。

☞えっ、そんなになるんですか？

小野寺 あれは、もともとイギリスの設計だからな。

☞A級ディンギーは竹が走りを左右するっていうことを聞いたことがあるんですけど。

小野寺 そうそう竹の良し悪しもあるなあ。あの船はバウ沈するんだよ。ランニングで走っているとズズッとそのままバウ沈するからみんなトランサムのところまでめいっぱい下がりてティラーを股にはさんでトリムするんだ。それ以上吹いてくると、ステイのところにブームが当たってな、そこからブームが折れるんだ。

☞ブームの部分も竹だったんですか？

小野寺 あれだって色々工夫したんだよ。マストを中空にして張り合わせたりなあ。

☪合板みたいにしてですか。

小野寺 そう、中をえぐってなあ、パイプみたいにしておよ。その前はただの丸太だったんだよ。一本の角材を丸くけずって唯、立てただけだったんだよ。

☪じゃ、ただでさえ重かったのがなおさら重くなっていたんですねえ。

小野寺 そう、水ぬきだって今みたいにセルフペーラーなんていうのが無かったから必ずペーラーを一個ずつ積んでたんだ。アカ汲むところは決まってるだろ。だから、その部分の外板がすりへって、穴が明きそうになってくるんだよ。

☪ペーラーっていうのはスコップみたいな、いわゆる“ペラ”のことですか？

小野寺 そう、柄のついた。ちりとりみたいな形したやつで、それでアカを汲み出すんだ。ヒールすると、コックピットがオープンだからガバッと入って来るからなあ。

☪それじゃ、くみきれませんねえ。

小野寺 ヒールを起こすのでも、俺なんか体重が軽いから船につんでたオールを、2本腰かけのところに差してさあ、その先に乗かって船の外まで出てトリムするんだよ、昔はエクテンションなんかなくてティラーローブだったから、吹いてきて、引く分にはいいんだけど、出す分がなあ…。

スッともっていかれるから加減が難しいんだ、だからローブにコブ作ってよ、それでトリムするんだ。

☪じゃ、手とかすぐに皮がむけちゃいますね。

小野寺 ブロックだって今みたいにベアリングとかステンレスじゃなくて真ちゅうだったからなおさらなあ…。俺もなあクルーザーに乗ったときとか艇庫の2階とかでこういう話を学生達に聞かせたもんだよ。でも最近は学生とそういった交流がなくなっちゃったなあ。俺も年とってしまっって若い人と話が合わなくなっちゃったけどたまには呼んでくれよ。若い人の話もききたいし。

(インタビュー 安部)



沈の救世主 “おっちゃん” (鈴木時夫さん)

🚣 鈴木さんはヨット部とは長い付き合いですが、その思い出を話していただけますか。

鈴木 ここに勤めるようになったのが昭和36年がな。先に2年間女房が管理人を勤めてて、炊事も手伝ってたんだ。材料は部員が買いに行くんだけど、“こっちの店でだけ買って別な店では買わない”というごときがあって、それをうちの女房が指図しているように言われたんだよ。それで、「炊事は一切部員に任せるように」って学校の方から言われて女房は管理人をやめたの。

それがら1〜2年してがな、どうしても救助とかが必要だから俺が管理人をやるようになったの。昔はA級ディンギーとスナイブでしょ。スナイブもウッド製でエアバックも何もないがら、沈すつとね、艇を浮がすまで1時間ぐらいかがかから大変だったね。

そして、そのあたりは船外機つうのはなくて動力船だったがらね。

🚣 動力船っていうのは、どういう船ですか。

鈴木 動力船っていうのは、漁船の小さいやつで、6馬力ぐらいで大体1.5tぐらいかなあ。そのあどうちで2tぐらいの漁船を作ったがら、それで救助するようになったのね。A級ディンギーの方は軽いがら、沈しても漁船で半分あげてやっとな水がダァーッと流れっから、そのまんま微速で引っ張ってやりながら水汲みすれば大体10分ぐらいで走れるよう



合宿所管理人” おっちゃん”

になっけど、スナイブは大変だったよ。

🚣 じゃ、あまり風が強いときは出艇しなかったんですか。

鈴木 うーん、それでも出したことは出したよ。昔はマストが木だったでしょ。それでステイをジャックルでなくロープで6目ぐらい巻いて止めてたから、完沈してしまった時には、そのロープをナイフで切っと、スポッとステイがとれっからマストがぬげて浮ぐんだよ。そういうふうにして沈おごしをしてだね。

🚣 じゃ、艇がおきたら海の上でまたマストを立て直すんですか。

鈴木 そうそう。思い出っていつて一番びっくりしたのは、5月の頃だったがな、合宿が休みの日で部員が全員でなく5人ぐらいしか来てながったときでね、スナイブ一艇だして毛無島の辺り走ってたんだっちゃ。あれは後藤だったと思ったけど、その時に雷が鳴るりだして突風が吹いできたの。瞬間的に30mぐらい吹いだんでねえがなあ。

突然、そんなに吹いてきたんですか。

鈴木 そうだよ、その時なんてセール降ろしてんのに沈したって言ったがら…。それで陸に残ってだ学生3人が昔の翠で救助に出たんだよ。だけど風が強いがらハーバーの所で流されてロープをからんでしまったんだっちゃ。直ぐにうちの漁船を出したんだけど、セール降ろしたまんま沈してだし、今みだいにドライスーツどがもながったがら、もうダメでねえがなあとと思ったんだけど、船につかまってだがら何とか助かったげどね。

3月頃がら5月頃までは、沈すっと助けにいくまでにはほとんど顔の色なくなっただけ。だからその間は、お風呂のお湯を流さないでおいで、沈したあと体を暖っためんのに使ったりしたね。そのあと女房がみそ汁作って飲ませたりしてね、体を暖っためでんだよ。

あと宮教の時もびっくりしたねえ。宮教は表浜から出艇したがら、こっちは全然わがなかったの。あの時も吹くって分がってで、「今日はダメだよ」って言ったんだけど、朝のうちはベタッとしてるもんだがら学生はどうしても出してみるんだよね。学院とうちとで様子みに一艇ずつだしてみたんだけど、提防の近くを走ってるだけで沈してしまうんだがら。そんではとっても無理だから艇をあげさせて、その後はみんな何もするごとないがらその辺でワァーワァーって遊んでんだよ。あの時は北西の風で灯台のカゲは風があんまりあだんないがら。しばらくしたったけそこであわび取りをしてだ人が、「何だかヨット

が何回もひっくりがえったりしてだよ」って学院の生徒に言ってきたんだって。

そのあどうちの方にも連絡きて、学校の船出すとごしたんだけど、うねりが大きくて危いがら、俺が吉田浜の漁協さ連絡して4tぐらいの大きい漁船を出してもらったんだ。それでもなかなか進まないんだ。港ですぐのところで大体うねりが1mぐらいあったんだけど、いつも予選やる辺り（花淵灯台沖）までいぐど、3mぐらいになってだがらね。むこうの航路からは、海上保安部の船が来てで。大体4kmぐらい沖まで出て行ったのがなあ、スナイプがセイルを降ろしているのを見つけたんだよ。そして、海上保安部では「人だけ助けて船ば流してしまった」つうがら、俺達の船は流したヨットば引っ張って来たのさ。

その後俺達のあどがらきた船がら、一人重態だって無線で教えてもらったんだよ。俺達も来る途中で亡くなった遠藤君のいるところ通ったんだろうけど、白波がすごくて見つけられなかったものなあ。その無線入るちょっと前にライフジャケット流れでんの見て、名前見だっけ遠藤となってたんだものなあ。

保安部の人が「これで終わりです」っていうがら、学生に聞くと「あと3艇いない」って言うんだなあ。そのうちの1艇が灯台の1km先ぐらいで完沈してだ宮教のキャプテンと亡くなった遠藤君で、あとの2艇は大きい漁船15隻ぐらいで探してたんだけど、日没の30分ぐらい前に波島灯台の3kmぐらい先まで流されてしまっただのを仙台新港がら出た貨物船が見つけて、海上保安部に連絡してくれた

んだよ。ほとんど水ブネだったらしいけど沈はしてなくて、ウェットスーツ着て、セールを体にまいて消耗を防いでだっていったなあ。あと30分遅がったら危ながったなあ。5月末までの風はね、おっかないんだ。

北西の風づうのは、朝に1時間ぐらい強く吹いて30分ぐらい治まんの。そしてその後パーって強く吹いてくっから。あと夕風っていつて陽おちる前にまた30分ぐらいベタって、陽おちっとまだ強く吹いてくんだ。西の風っていうのは、6～7月の時期は、雷雨になることが多いんだ。西よりの風がパーと吹いてきて、10分ぐらいずっと山の方が真っ暗になってくっから。そして雷雨になっことが多いね。雷雨の間は西風が吹いて、それが過ぎるとまた風が回るんだよ。そうだねえ、うちの部は今までずっとやってきて大きい事故つつうの無がったからよがったけど。

☞そうですねえ、そういう意味ではないですからね。

鈴木 ただ、今はみんなバイクだの車だの通って来っからそっちの方も心配だね。

海に出れば心配しなきゃいけないし、陸でも心配しなきゃいけないとなると大変ですよ。学生達自身はそんなに危ないとは思ってないんですけどねえ。ところで御家庭の方とはいつ頃までこの合宿所で暮らされていたんですか。

鈴木 うーんとね、昭和61年ぐらいまでがな。

☞前にはね、コンパとかするでしょ。そうして飲んで裏の浜さ行くんだけど、畑のキャベツを踏んだりしてね。次の日になっとうちに

怒こってきたもんだったよ。

☞以前は合宿がない日でも合宿所で寝泊まりしていた先輩がいらっしやったって聞いたんですけど。

鈴木 荒木さん、野口さん、平塚さん、中井さん。赤羽さんが一番最後だったかな。

☞その頃は鈴木さん達と一緒に暮らすっていう感じだったんですか。

鈴木 その頃はね、合宿所の管理はやってたんだけど、家はこのすぐそばにあったから通ってたんだ。それで、俺が休みの日だったんだけど、艇庫さ用あって行ったみだら、二階の方でガタガタって音すんだよね。上がっていったらば、合宿所は鍵をかけてなかったから、中学生が5人ぐらいコタツにあだってたのさ。「何やってんだ」って聞いても頭かいて答えないんだよ。そこに赤羽さんが帰ってきたが、子供達を引き留めておいて、なくなっものないが調べさせたら、1万円なくなっって、そうしたら子供達も持ってだんだ。中学生だから「こういうことをしたらダメだよ」って話したんだけど、その後がらだね、ここに入るようになったのは。

昔はここ（＝今の管理人室）が食堂だったんだよ。そのためにこの部屋に4枚ガラスついてカウンターみだいになってるでしょ。こっから御飯をだすようになってたんだから。

☞その時に、ここは畳敷きだったんですか。

鈴木 ううん畳でなくて、板張りで、今食堂に置いてある長いテーブルがあったのよ。

☞そしたら今、調理場になっているところで作ったものを、そのカウンターから出して

らって、ここ（＝管理人室）で食べるっていう風にしてたんですか。

鈴木 そうそう、今テーブル置いてある所は昔はながったんだから。

🌀じゃ、あとから増築したんですか。

鈴木 ここ（＝管理人室）で食事しないようになった次に二階の突き当たりの部屋に移って、その後今のどころに移ったんだよ。二階の突き当たりの部屋は昔は観覧部屋って呼んでただけど、あそこにテーブルおいで、釜とか他のもの運んで食事してたのね。釜も今のバイク置いてあるどころに石を組んでおいで、御飯炊いたりしてたんだから。

🌀何んかキャンプみたいな感じですね。

鈴木 んだねえ。だけど、どうしても熱いものを運ぶのが危ないがら、今の食堂を増築したんだよ。だから観覧部屋は畳しいてがら12～3年ぐらいにしかなくなってないんだよ。

🌀たくさんの学生を見守ってきて、印象に残っている学生はいますか。

鈴木 そういう学生はたくさんいっけどね。俺はねえ走っているのを見てると、大体2年生ぐらいでこの子は上手になるっていうのがわかるよ。

🌀はあ、そうですか。永年の間に養われた目ですかねえ。下級生の頃から特に光っていた先輩はいましたか。

鈴木 うん、いだよ。笹木さんは2年生あたりがら上手だったな。よく夏休みとかね、部員がいないときは、船運べないがらハーバーさ浮かべて置ぐんだっちゃ。あの頃は木の船で重がったからね。そういうふうにしておい

て2人ぐらいてきて練習すんだよ。

🌀僕達が昼食のときに一回あがってくるような感じで、ずっと舳っておくんですか。

鈴木 そう、昔は、そんなに漁船が多くながったがら、舳っておいてもぶつかる心配どがながったがらね。笹木君、1年のときがな、夏休み毎日きて練習してたんだって、そして2年生の時がな、インカレで学院に負けでてガッカリしてるわけだ。そごさOBの人がきて、2年生だけど笹木君を出してみろどなって出してみだんだな。そしたら結構走って1位をとって逆転したごどもあったっけな。

🌀やっぱり練習量がものをいうんですかね。

鈴木 練習もあっけどね。艇に乗ったときの身軽さっていうのが大切だなあ。

🌀動きが良いか悪いかっていうのがポイントですかね。

鈴木 うん、大体それで分かるね。

🌀最近ではそういう笹木さんのような人はいましたか。

鈴木 庄司君とかは上手だったねえ。あと昔はねえ、学校の方もお金があって色々なものをわりと直に買ってくれたんだげどなあ。

🌀今なんか、艇を買ってもらうのも大変ですからね。

鈴木 学校としては一回買うと、それでいいもんだって思うらしいんだよね。学校の方には言ってるんだげどね。でも今度入った係の人は友達が大きいクルーザーを持っているって言ったがな。わかってくれてるみたいだけどね。昔は管財の人どがもよく釣りどがをしにきたりして、合宿所でお茶飲んだりしたん

だけど、今は学校の方から来るっていうこともないし。学生部全体の予算自体も20年前に比べると大分減っているらしいがら。

🌀 鈴木さんは合宿がない日とかはどういうことをされているんですか。

鈴木 浜に救助艇があるがらね。合宿がない日でも一応ここさはきてるよ。最近は余り大きな台風だの来ないがらいいけどね。10年前のクリスマスの頃だったなあ。艇庫の前に並

べてたヨットが高波でパーと道路の方までもっていがれたごどもあんだがら。あん時は低気圧が停滞してでね、それまでうねりなかなかあったのに3時間ぐらいで波きたんだよ。

🌀 高波とかも怖いですけど、地震も怖いですよねえ。

鈴木 津波警報どが出っと心配なるよねえ。津波は沖にある分には大丈夫なんだけどなあ。

🌀 じゃ、いつも沖練とかやってる辺りだった



チリ地震津波



花淵浜小浜（現在の小浜港）へ押し寄せた津波。花淵城跡より写す。

昭和35年5月24日、1万7000キロも太平洋を渡って東北の太平洋岸に押し寄せたチリ津波は、外洋に面している七ヶ浜町の護岸や防波堤を乗り越えて、海岸沿いの民家を呑み込んだ。県沿岸への第一波は午前3時すぎと記録されるが、七ヶ浜町には午前4時ごろ、なんの前ぶれもなく突然襲った。

七ヶ浜町誌には当時の模様をつぎの通り記している「波高が5メートルないし6

メートルと言われ引き潮の時は花淵湾底まで現われ、1キロ余にわたる赤肌礁、高根礁周辺は一大岩塊となって、真黒い岩肌を現わした。その物妻さは名状する言葉もない。初めて見るこの姿には、たた驚くばかりであった。この光景が繰り返し行われたが、次第に弱まってゆくので町民もこれに慣れて、湾底に下り立ってアサリを取る人も出たほどだった」。

ら大丈夫なんですか。

鈴木 うん、大丈夫だね。チリ地震津波のときも塩釜の方はあげられたみだけけど、この前あたりはアンカーうってけい留しとけば大丈夫だったがらなあ。

🌀津波の時は一度波が引きますけど、どの位まで引くんですか。

鈴木 この場合は、チリ地震津波の時で、500 m ぐらいひいたのがな、ずうっと引いて、ハーバーの水も全部なくなっただがら。その後で、グーと波が高くなって岸に寄せできて、この道路のどごまで来たのがなあ。その次の年にこの艇庫が建っただけど、そういう津波の心配もあるつつうのでここにブロックを作ったんだがら。ヨットもね、鍋島あたりを走ってるときには、松島湾内の奥の方までもっていがれるわなあ。

🌀じゃ沖練のときは大丈夫ですけど、内海面は、すごく危ないですね。

鈴木 だから津波の心配があるときは、消防署の人がスピーカーで警報を出すんだっちゃ。ヨットの場合はエンジンがついでないがら放送どかも聞こえ易いんでねえが。

🌀津波っていうのは、警報が出てからどれくらいで来るもんなんですか。

鈴木 うーんとね、十勝沖のときは警報が出てから30分ぐらいで来たがな。三陸沖の時は、ここまでくんに10分ぐらいだったなあ。俺が北洋がらあがった年に、今のレース海面のあたりさ友達と3人して魚採りさ行ったんだっちゃ。朝の4時半頃に釣場について底をみると、波も立ってねえのに何だか濁ってんだ

な。「おがしいなあ」って友達と言ってたんだけど、錨を打たないうちにドンドン船が菖蒲田の方さもっていがれっから、ずい分速い潮だなあと思って、こんでは駄目だって帰ってきたわけさ。帰ってきたら西箱の全体がぬれでんだなあ。雨でも降ったのがなあなんて言って、そうこうしているうちに、家は流れでくるは船は流れでくるはで、びっくりしたのさあ。ああ津波だなんては思ったけど、湾内さいって100 m もしないうちに水がなくなってしまうて、船があがってしまったんだわ。しょうがないがら、そこにアンカーリングして歩ってきたんだわ。

🌀そういうこともあったんですか。ところでさっき北洋の話がありましたが、北洋のサケマス船に乗ってらしたんですか。

鈴木 そう、サケマスね。大体4月に出て行って10月までね。25歳ぐらいまで7年ぐらいだなあ。

🌀北洋の海は、どういう感じなんですか。

鈴木 北洋はね、大体7月ぐらいまではすごく荒れてるよ。3日に1度は低気圧だから。

🌀そうなんですか。体がよっぽどしっかりしていないとちませんねえ。

鈴木 そういう時はねえ、漁が出来ないんだよ。北にいぐど、どうしても低気圧って発達するでしょ。風だって20 m がら30 m 吹ぐし、すぐそばに母船がいるのにうねりで母船のマストが見えなくなるんだがら。

🌀本当に大変そうですねえ。

鈴木 若がったからねえ。慣れたらあとは結構楽しかったよ。(インタビュー 阿部)

七ヶ浜移転からのお付き合い“かすや”（糟谷商店）

㊦ 糟谷さんとヨット部とのお付き合いはいつごろからなのでしょうか？

節子 あの何時だったか、国体のとき、義宮さまがいらっしゃって、その頃からなんだわね。ヨットの艇庫もその頃出来たんだものね。

㊦ ああ、昭和36年の第16回国体ですね。たしかあの時は、開催県福島にかわって、ヨット競技を宮城県ヨット連盟が主催したんですよ。義宮さまは、糟谷さんにもお立ち寄りになられたのですか？

節子 うちにはこれなかったけども、ヨットの艇庫にいかれて、それから船に乗られたんだわね。

㊦ そういえば、私たちも先輩から、義宮さまがお成りになるのに、この近所には水洗のお手洗いがないので、東北大の艇庫のお手洗いを水洗式に変えたと聞いたことがありますね。合宿の、ミーティングのあと、お腹が空いて、なにかちょっとした食べ物を買いに来るとおばあちゃんが、「ちょっとあがっていかい」といって、よく漬物やわかめのおひたしやお菓子などをご馳走してくれましたよね。

節子 そう、コタツさ入って、お茶飲みながらだわね。

㊦ ところで、おばあちゃんは何時亡くなられたんですか？

節子 4年まえだから、昭和61年だわね。

㊦ おいくつだったんですか？



おじさん、おばさんそしてお孫さん

節子 82だったのね。

㊦ ところで、俺達は、いつも“かすやのおばあちゃん”と呼んでいたから、実はお名前を知らないんですけど、なんていうお名前なんですか？

節子 ミサオっていうんだわね。

㊦ ミサオさんの“オ”は、あいうえおの“お”ですか、それとも？

節子 おしまいの方の“を”だわね。

（ここで、優しかったみさをさんのご冥福をお祈り致したく存じます。）

㊦ すごく印象に残っている事ってなんでしょうかねえ？

貞善 あれ、舟入島にクルージングにいて、
帰りに大時化になったときがあったっちゃ。
あんときは、うちの船だして、全部ロープで
曳航して来たっちゃ。

㊦ ええッ、そんなことがありましたかね!?

貞善 あんときは、棚橋さんはいなかったか
な?

㊦ いやァ、ちょっと覚えていないですね。後
藤!、おまえ覚えてるか?

い、いやァ、ぼくなんかも、知らないなァ。

貞善 そういえば、後藤さんは、しょっちゅ
うずぶ濡れになって、大きな体を左右にゆす
りながら海からもどってきて、お風呂で暖っ
たまっていったっちゃ。

㊦ そう、そしてついでに、お雑煮なんか食べ
さしてもらってね。

㊦ たしか、お子さんは3人いらしたですよ
ね?

節子 一番上が女で、二番目が男、三番目が
女なんですよ。

㊦ へえ、お上手ですね。

貞善 そんなこともないよ。(笑う)

㊦ みなさん、もう結婚されているんですか?

節子 みんな結婚してるんだわね。

㊦ お孫さんは?

節子 一番上のが2人、長男のが3人、三番
目の女川にいるのが一人なんだわね。

㊦ そうすると、6人ということですか。いい
ですね。

節子 笹林(敬吾)さん、荒木(武文)さん、
中村(栄一)さんなんかは艇庫に寝泊まりし
てたのね。それで、うちの子供たちが遊んで

もらったり、勉強をみてもらったり、よくし
てたのね。菊地さんもそうだったのね。

㊦ ああ、亡くなった菊地(義雄)君ですね。
あいつも、いい男でしたからね。

節子 荒木さんは、いまでも、ときどき顔み
せてくれるんだわね。

㊦ あァ、荒木さんは、奥様が菖蒲田の方です
ものね。いいですね。

ところで、2階の食堂は、何時から何時ま
でやっているんですか?

節子 今は、11時から3時ぐらいまでだわね。
あったかくなると、5時ぐらいまで、ひらい
ているけど。

【後記】

東北大学ヨット部が、七ヶ浜町に移転して
から、部員の生活と糟谷さんとの関係は切っ
ても切れないものがあります。合宿中のおか
ずの材料の調達をはじめとして、いろいろお
世話になったものです。

宮城交通のバスは、塩釜・下馬行き、菖蒲
田経由大学病院前行きともに糟谷前の停留所
から乗車することが多かったので、バス待ち
の間、糟谷さんでなにか口に入るものを買っ
て食べるのが常でありました。このときのメ
ニューでもっとも評判がよかったのが、“ス
パーク”というアイスバーでした。これは、
アイスクリームの上にチョコレートを被せて、
さらにその上に、ナッツの碎片をまぶしたも
ので、とくにその舌触りがみんなに好まれた
ようです。たしか、“しまかげ”というメー

カーのものであったと記憶しています。値段は50円だったと思います。普通のやわらかいアイスバーが30円ぐらいでしたから、結構な高級品でした。

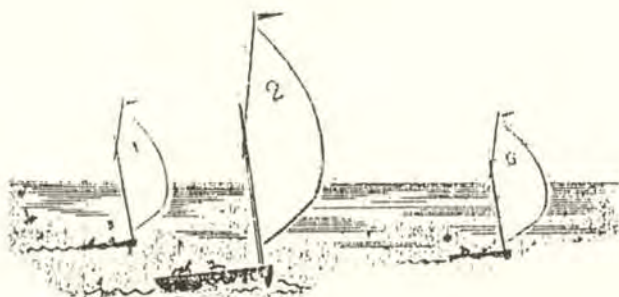
夕食後も、お腹が空くので、鯨肉のステーキ（鯨当番というのがあって、糟谷の隣の魚屋から、一人当たり30～50円を集め、鯨の肉の塊を買ってきて、出資額に応じてその肉を切り分けて、フライパンの上で焼いた）、それに糟谷で調達した日水のインスタントラーメン（ラーメンにすでにスープが染み込ませてあるもので18円）や薩摩揚げ（当時は、一枚10円）が毎日の夜食のメニューでした。

現在のお店の2階には食堂があり、ラーメン、かつ丼、親子どんぶり、定食類（かつ、えび、さしみ）など、たくさんのメニューがそろっています。コーヒーの自動販売機もあ

ります。艇庫にお立ち寄りの節はぜひ一度お試しください。なお、この2階の食堂からは、吉田浜が一望に見渡せ、スロープでの現役諸君の働きぶりも、手に取るように観察できます。現役諸君にハッパをかけにいらっしゃる先輩諸兄には、最適のシチュエーションといえます。なお、この日は風が強く、濃紺の海面いっぱい白波がちりばめられ、塩気の抜けたわれわれにもなにかエネルギーがみなぎってくるような気がいたしました。

これからも、おじさん（貞善さん）・おばさん（節子さん）が益々お元気でありますように、そして引き続きヨット部現役の面倒見をよろしくお願いしたいと思います。なお、糟谷さんの電話は、022-357-2603です。

（インタビュー 棚橋、後藤）



藤沢の小母ちゃん

平成2年六月、松島ヨットの碑除幕式の早朝、盛岡光照寺の名をたよりに藤沢家の菩提寺を訪ねました。亡くなる前の年からかぞえ十八年ぶり、白翠会の近況報告を兼ねて念願の墓参でした。

故人と白翠のおつき合いは、近藤先輩が下宿のご縁以来、戦中戦后三十年に汎り七十名余の現役OBに引きつがれて参りました。

連坊小路のお宅は折にふれ連絡集会所、塩出し作業場となり、内職下宿の紹介、野暮用^{とろろ}萬引き受け、居候、就職、身上相談、縁談等々歴代の部員が代る本当にお世話になりました。

青春の一時期に、おふくろさんか姉さまかまたOB先輩の如く、昔からの親戚の小母ちゃんの様
に何かとお世話を頂いた日々が昨日の様に偲べれます。
(小島達矢25年卒)



西沢オンツァン

○九州遠征の事

西沢のおっさんを総大将として川越先輩を始め総勢十一名、四十時間余汽車に揺られて志賀の島、博多ブギウギをロずさみながらレースに出場、府県対抗では惜しいところ優勝を逸し、学聯対抗、水域対抗はまあまあと言ふところ、しかし楽しかったですな。博多ブギウギを覚えてし、ミッチャンも綺麗だったし、やどやのお春ちゃんの顔が忘れられません、なんて言っているのは誰ですか、かく言ふ河童も……。



九州から歸って、最後の二十三年度第九回合宿をやり、西沢さんで分散会をやって貰て皆それぞれ大暴れして、思い出の西沢造船所前の繋留場を抜錨し、半年振りに塩釜艇庫に引上げ、雪の降る中、納艇作業、かくしてシーズンを恙なく終りました。
(6号 松島河童)

○ボンボン船

西沢さんの所に半分水につかり、殆ど使いものにならない様なディンギー位の大きさのボンボン船があった。米軍の発電用エンジンをつけた船であったが、ヒョんな事から借りて使用する様になった。使って見れば便利なので、それから合宿事に借りていた。公称五馬力と云うが大分使ったエンジンと見えて半分位しか出力がないだろう。それにしてもガソリンエンジンなので力はある。

(12号 エンジン屋)

資 料 編

歴代役員の記録

年度	名 誉 会 員	会 長	部 長	副部長	監 督	コ ー チ	主 将	副 将	主 務	学 連	白 翠 編集者	白 翠 No.
13		—	高須鶴三郎	—	—	勝屋弘知	貴家寛而	—	小野 一 深尾泰三	—	—	
14		—	—	—	吉村 清	—	今井彦太郎	—	深尾泰三	—	—	
15		—	—	—	—	—	小野弘智	—	矢吹祐男	—	—	
16		—	—	—	—	—	伊関俊三郎	—	矢吹祐男	—	—	
17		—	—	—	—	—	横田好意	—	中尾 良	—	中尾 良	1
18		—	↓	—	—	—	藤森四郎	—	—	—	—	2
19		—	福島弘毅	—	—	—	原田俊作	—	—	—	湯沢豊城	3
20		—	—	—	—	—	岡田多摩男	—	宗田 清	—	—	
21		—	—	—	—	—	原 保太郎	—	—	—	—	
22		—	—	—	—	—	原 保太郎	—	—	—	—	4
23		—	—	—	—	—	丸山充夫	木沢泰三	清野朋義	—	青野朋義	5
24		—	—	—	—	—	渡辺 明	—	小島達夫	—	宮城島勝也	6
25		—	—	—	—	—	村山義郎	加納寛文	早坂周市	—	—	
26		—	—	—	—	—	加納寛文	早坂周市	西田信直	—	三浦惣一郎	8
27		—	—	—	—	—	平野節夫	丸島 博	西田信直	—	成田正義	9
28		—	—	—	—	—	高橋直靖	河村 功	近藤太郎	—	高橋三雄	
29		—	—	—	—	—	高橋三雄	佐藤 宏	近藤太郎	—	村田達雄	11
30		—	—	—	—	—	本田健治	小谷 昌	明石四郎	—	小桑川令二	12
31		—	—	—	—	—	村田達雄	東原 功	松元幸三郎	—	氏家郁二	13
32		—	—	—	—	—	武藤潤隆	氏家郁二	松元幸三郎	杉浦好彦	吉田敦彦	14
33		—	—	—	—	—	泉谷秀人	林 昭正	森谷英一	—	—	
34	高須鶴三郎	—	—	—	—	—	岩下 宏	伊吹万里 小野寺邦夫	古川芳徳	古川芳徳	—	
35	*	—	↓	山本宗一	—	—	鈴木知二	赤川栄司	安部伴永	小西忠雄	安部伴永 宮崎武男	15
36	高須鶴三郎 古屋徳兵衛	福島弘毅	山本宗一	島田平八	—	—	五木田一雄	堀江忠寿 菅谷一郎	横山 晃	宮崎武男	並木剛彦 松村孝雄	16
37	*	—	—	—	—	—	安田義和	堀尾公亮 大木 基	梶川淳三	並木剛彦	—	
38	*	—	—	—	—	田中重明	香野俊一	土居昭昌	荒木武文	大西周作	大西周作	17

年度	名 譽 会 員	会 長	部 長	副部長	監 督	コ ー チ	主 将	副 将	主 務	学 連	白 翠 編 集 者	白 翠 No.
39	高須鶴三郎 古屋徳兵衛				—	—	土居昭昌	小田裕英	荒木武文	大西周作	田村 実	18
40	※				—	—	入月一夫	落合定流 田村 実	矢島和夫	伊藤伍郎	藤田 章 後藤正孝	19
41	※	↓	↓	↓	—	香野俊一	仙石正行	宮田 萬 後藤正孝	増田信彦	中井信行	笹木寛司 豊田宜俊	20
42	※	福島弘毅	山本宗一	島田平八	大隈信之	香野俊一	笹木寛司	木村正宏	大島正蔵	森地克之	坂橋弘征 横野邦夫	21
43	※				—	香野俊一 砂川 洵	橋内潔根	富沢憲治	坂橋弘征	老田尚久	中村栄一 沢田 健	22
44	※				香野俊一	砂川 洵 西松岡玄也 鎌谷博行	沢田 健	大山健二	中村栄一	白井康雄	里村健一	23
45	※				—	—	川村大進	神藤健一	里村健一	戸塚芳雄	長谷川仁 住 繁	24
46	※		↓	↓	—	—	石丸 徹	住 繁 越智邦明	長谷川仁	青木強	青木広道	25
47	※		島田平八	吉田和彦		沢田 健	赤羽源一郎	小杉達郎	遠藤敏昭	菊池義雄	山本憲一	26
48	※					遠藤敏昭	山本憲一	—	南里春之	佐藤春夫	—	27
49	※					小杉達郎	佐藤春夫	東原信男	橋爪良之	奥村一男	—	28
50	※					山本憲一 佐藤春夫	山本峰生	迫 久展	猪野寿男	吉清恭一	鈴木徳行	29
51	高須鶴三郎（名誉会長） 土屋徳兵衛、山本宗一					森 治嗣 望月 晃	鈴木郁男	荒井秀明	中野順二	鈴木徳行	池上智仁	30
52	※					鈴木郁男	庄司一夫	田中啓啓	小野寺正英	勸使河原栄幸	若生和良	31
53	※					鈴木徳行 庄司一夫	羽成一夫	小林隆夫	飯島啓夫	桜井隆司	中野 卓 宮内福雄	32
54	※				↓	庄司一夫 下田幸二	山口高男	宮内福雄	中野 卓	本宮 光	小林彦文	33
55	高須鶴三郎、古屋徳兵衛 勝屋弘知、山本宗一				棚橋善克	中野 卓 山口高男	河野一郎	柴田邦一	矢野圭一	小林彦文	—	34
56	古屋徳兵衛、勝屋弘知 山本宗一					本宮 光	矢野圭一	本田 亮	小笠原義知	石川裕士	石崎成樹	35
57	※					庄司一夫	石崎成樹	小林伸夫	三浦由佳	武山則方	—	
58	※					堀木宏行 小林伸夫	江田裕紀	光田和也	根岸伸行	安藤慶治	—	
59	古屋徳兵衛、山本宗一					安藤慶治 武山則方	黒田雄二	菅原恵人	佐々木芳樹	佐藤 亘	中谷恭子 香野俊一	36
60	※					黒田雄二 佐々木芳樹	鈴木英明	八巻 寛	八巻 寛	高田芳宏	八巻 寛	37
61	※					佐々木芳樹 高田芳宏	高橋 功	和気邦好	深津 敦	大畑誠一郎	数田亜樹 深津 敦	38
62	※		↓		↓	深津 敦	柳沢一郎	重枝伸之	高嶋由起雄	八木秀明	松本尚史 内藤千香子	39
63	※		樋口龍雄	↓	庄司一夫	柳沢一郎 重枝伸之	大滝克美	松本尚史	山路浩之	三橋賢治	—	
H1	※	↓	↓	前田和茂	↓	柳沢一郎	柴田真一	井上敬介	遠藤 睦	箱崎賢則	角田 毅	40

主要レースの記録

国立七大学戦（帝大戦）

年度	順位	1	2	3	4	5	6	7	摘 要
14		京 大	東 大	九 大	東北大	阪 大	名 大	—	7/22~23 博多湾
15		九 大	東 大	京 大	東北大	阪 大	名 大	—	西宮
16									
17									博多湾
18									
19		中止							
20									
21									
22		東 大	京 大	東北大	九 大	—	—	—	博多湾
23		京 大	東 大	東北大	九 大	名 大	—	—	8/9 横浜港
24									
25									琵琶湖
26		九 大							松島
27		名 大	東 大	東北大	九 大	阪 大	京 大	北 大	琵琶湖
28		東北大	東 大	京 大	阪 大	名 大	九 大	北 大	8/5 西宮
29		京 大	東北大	東 大	名 大	阪 大	九 大	—	8/17 高松
30		名 大	東 大	阪 大	京 大	東北大	北 大	九 大	7/18 館山
31		京 大	阪 大	名 大	東 大	九 大	北 大	東北大	5/16~17 琵琶湖
32		京 大	東 大	九 大	阪 大	名 大	東北大	北 大	5/17~19 常滑
33		阪 大	京 大	九 大	名 大	東 大	東北大	北 大	5/15~16 西宮
34		九 大	京 大	阪 大	東北大	名 大	東 大	北 大	5/16~17 志賀島
35		京 大	九 大	阪 大	東 大	名 大	北 大	東北大	5/28~29 小樽祝津
36		京 大	東 大	名 大	東北大	九 大	北 大	阪 大	8/5~6 塩釜吉田浜
37		名 大	東 大	東北大	北 大	九 大	京 大	阪 大	7/29~30 小樽祝津
38		東北大	名 大	九 大	阪 大	北 大	京 大	東 大	8/12~13 志賀島

年度	順位	1	2	3	4	5	6	7	摘 要
39		阪 大	九 大	京 大	東北大	名 大	東 大	北 大	8/8~9 琵琶湖
40		名 大	九 大	阪 大	北 大	東 大	東北大	京 大	8/7~8 大阪二色の浜
41		名 大	九 大	京 大	東 大	北 大	東北大	阪 大	8/15~16 江の島
42		東北大	東 大	名 大	京 大	九 大	阪 大	北 大	7/28~29 塩釜吉田ヶ浜
43		京 大	名 大	東 大	東北大	九 大	阪 大	北 大	
44							九 大		8/1~2 小樽祝津
45		九 大	京 大	名 大	阪 大	北 大	東 大	東北大	8/10~11 大岳
46		京 大	名 大	九 大	阪 大	北 大	東 大	東北大	7/20~22 西宮
47		名 大	京 大	東北大	阪 大	北 大	九 大	東 大	7/21~23 琵琶湖
48		九 大	東 大	京 大	東北大	名 大	阪 大	北 大	7/20~22 吉田浜
49		名 大	京 大	東 大	東北大	阪 大	北 大	九 大	6/28~30 江の島
50		名 大	京 大	九 大	東北大	東 大	阪 大	北 大	7/19~20 常滑
51		京 大	阪 大	名 大	東北大	北 大	東 大	九 大	7/29~31 祝津
52		京 大	阪 大	東 大	東北大	名 大	九 大	北 大	7/29~31 西の宮
53		東 大	阪 大	九 大	京 大	東北大	名 大	北 大	7/28~30 小戸
54		京 大	東北大	阪 大	東 大	九 大	名 大	北 大	7/24~25 柳ヶ崎
55		阪 大	九 大	名 大	東 大	東北大	京 大	北 大	吉田浜
56		東 大	阪 大	九 大	東北大	京 大	名 大	北 大	7/25~26 江の島
57		阪 大	東 大	名 大	京 大	九 大	東北大	北 大	7/28~29 名古屋
58		九 大	北 大	東 大	東北大	京 大	名 大	阪 大	7/29~30 祝津
59		京 大	阪 大	東北大	名 大	九 大	北 大	東 大	7/28~29 小戸
60		阪 大	東 大	名 大	京 大	北 大	九 大	東北大	7 西宮
61		阪 大	東 大	名 大	京 大	北 大	九 大	東北大	7 琵琶湖
62		東北大	阪 大	京 大	東 大	九 大	北 大	名 大	7/25~26 吉田浜

全日本学生選手権

備考欄順位は東北大順位

年度	場 所	種 目	優 勝	二 位	三 位	四 位	五 位	六 位	備 考
昭和8	東京品川 (神宮大会兼)	A	慶大	同大	阪大	九大	東大	名医大	(昭8・9年は個人参加あり) 18~20 戦争の為休止
9	横浜	A	同大	九大	阪大	慶大	東京高等商船	名医大	
10	名古屋	A	慶大	早大	九大	同大			
11	博多	A	早大	九大	慶大	同大	阪大		
12	琵琶湖	A	早大	慶大	同大	九大	京大		
13	横浜(仮)	A	慶大	早大	九大	京大	阪大	名大	
14	博多	A	早大	京大	東大	同大	九大	慶大・阪大 関学	
15	西宮	A	慶大	同大	早大	関学	東大	九大	
16	横浜	A							
17	博多	A	同大	慶大	早大	関学	日大	東大	
21	琵琶湖 (国体兼)	A	東大	関学	大阪商大	東北大			
22	博多	A	慶大	東大	立大	京大	関学	同大	
23	横浜	A	関学	慶大	京大	立大	東北大	早大	
24	半田	AS	慶大	早大	関学	東大	立大	同大	
25	和歌浦	AS	関学	早大	同大	九大	関大	海技専門	
26	松島	AS	関学	立大	関大	九大	東大	中央大	
27	琵琶湖	AS	慶大	関学	早大	九大	同大	中央大	
28	西宮	AS	中大	同大	東大	阪大	京大	関大	
29	高松	AS	関大	東大	関学	慶大	中央大	立大	
30	館山	AS	早大	立大	東大	関学	京大	法大	
31	高松	AS	関学	慶大	阪大	同大	中央大	立命館	
32	琵琶湖	AS	関学	立命館	京大	同大	関大	甲南大	
33	仙台	AS	東北大	関学	中央大	阪大	京大	日大	
34	西宮	AS	関学	関大	早大	同大	甲南大	京大	
35	館山	AS	同大	東大	京大	早大	慶大	横浜国大	
36	常滑	AS	同大	名工大	京大	名大	中央大	法大	

年度	場 所	種 目	優 勝	二 位	三 位	四 位	五 位	六 位	備 考
37	字 品	AS	同 大	関 学	京 大	名 大	横 浜 国 大	東 大	A級、S級クラス別制
38	博 多	AS	関 学	阪 大	広 島 大	同 大	明 大	西 南 学 院	
39	琵琶湖	AS	同 大	横 浜 国 大	立 命 館	滋 賀 大	立 大	日 大	
40	二色ヶ浜	AS	関 学	滋 賀 大	同 大	甲 南 大	名 工 大	立 命 館	
41	常 滑	AS	関 学	名 大	和 歌 山 大	日 大	立 命 館	名 工 大	
42	江 の 島	AS	同 大	京 大	中 央 大	法 大	横 浜 国 大	日 大	
43	琵琶湖	A	同 大	法 大	立 大	甲 南 大	立 命 館	東 大	
		S	関 大	同 大	京 大	東 大	日 大	広 島 大	
44	西 宮	A	早 大	鹿 経 大	中 央 大	同 大	東 大	関 大	
		S	関 大	京 大	神 戸 大	松 山 商 大	関 学	広 島 大	
45	江 の 島	A	法 大	滋 賀 大	立 大	名 大	横 浜 国 大	京 大	
		S	明 大	広 経 大	法 大	慶 大	大 阪 市 大	東 大	
46	常 滑	A	慶 大	同 大	名 大	関 大	横 浜 国 大	千 葉 大	
		S	広 島 大	名 大	滋 賀 大	甲 南 大	神 戸 商 大	立 大	
47	博 多	A	同 大	西 南 学 院	関 大	立 命 館	関 学	鹿 経 大	
		S	福 岡 大	九 大	京 大	同 大	広 島 大	鹿 経 大	
48	葉 山	S	同 大	松 山 商 大	関 大	広 島 大	鹿 経 大	神 戸 大	
		470	同 大	広 島 大	滋 賀 大	福 岡 大	京 大	慶 大	
49	琵琶湖	S	同 大	滋 賀 大	福 岡 大	京 大	関 学	関 大	
		470	福 岡 大	広 島 大	滋 賀 大	同 大	東 京 電 機 大	立 命 館	
50	淡 輪	S	福 岡 大	横 浜 市 大	関 東 学 院	関 学	神 戸 大	同 大	
		470	名 古 屋 学 院	広 島 大	関 学	神 戸 大	京 大	同 大	
51	博 多	S	鹿 経 大	関 大	福 岡 大	京 大	日 大	神 戸 大	
		470	同 大	滋 賀 大	和 歌 山 大	日 大	関 東 学 院	関 学	
		スナイプ	日 大	立 命 館	滋 賀 大	関 東 学 院	広 島 大	早 大	自 經 制 決 勝 方 式 18位
52	江 の 島	470	横 浜 国 大	同 志 社	近 畿 大	鹿 児 島 大	福 岡 大	日 大	15位
		総 合	日 大	立 命 館	横 浜 国 大	福 岡 大	広 島 大	早 大	10位
		スナイプ	日 大	関 東 学 院	福 岡 大	関 学	明 大	東 大	15位
53	伊 勢 湾	470	京 大	福 岡 大	鹿 経 大	早 大	広 島 大	同 志 社	10位
		総 合	福 岡 大	日 大	東 大	同 志 社	関 学	神 戸 大	8位

年度	場 所	種 目	優 勝	二 位	三 位	四 位	五 位	六 位	備 考
54	七ヶ浜	スナイプ	明 大	日 大	滋 賀 大	甲 南 大	関 東 学 院	広 島 大	16位
		470	横 浜 市 大	広 島 大	京 大	東 北 学 院	同 大	大 阪 経 済 大	11位
		総 合	広 島 大	日 大	同 大				
55	西 の 宮	スナイプ	日 大	長 崎 大	明 大	滋 賀 大 学 部	熊 本 大	同 大	
		470	同 大	日 大	名 古 屋 学 院	鹿 児 島 大	滋 賀 大 学 部	関 学	
		総 合	日 大	滋 賀 大 学 部	同 大	明 大	慶 大		
56	福 岡 小 戸	スナイプ	関 東 学 院	日 大	早 大	慶 大	京 大	阪 大	
		470	日 大	慶 大	京 大	立 命 館	同 大	阪 大	
		総 合							
57	彦 根 網 代 口	スナイプ	京 大	早 大	立 命 館	日 大	滋 賀 大 学 部	広 島 大	
		470	立 命 館	近 畿 大	成 蹊 大	愛 媛 大	滋 賀 大 学 部	早 大	
		総 合							
58	江 の 島	スナイプ	日 大	同 大	明 大	早 大	法 大	関 学	21位
		470	日 大	明 大	早 大	滋 賀 大 学 部	成 城 大	中 央 大	スナイプ個選 21位 河部／八巻組、23位
		総 合	日 大	明 大	早 大	京 大	立 命 館	福 岡 大	9位
59	蒲 郡	スナイプ	日 大	同 大	明 大	甲 南 大	福 岡 大	中 央 大	24位
		470	日 大	福 岡 大	同 大	関 東 学 院	立 命 館	明 大	スナイプ個選 黒田／高橋組 36位 470個選 鈴木英明／大畑組 37位
		総 合	日 大	同 大	福 岡 大	明 大	立 命 館	甲 南 大	
60	江 の 島	スナイプ	日 大	同 大	甲 南 大	明 大	慶 大	福 岡 大	
		470	同 大	甲 南 大	日 大	関 学	関 西 大	福 岡 大	21位
		総 合	同 大	日 大	甲 南 大	福 岡 大	明 大	慶 大	
61	小 戸	スナイプ	日 大	同 大	九 大	中 央 大	甲 南 大	早 大	20位
		470	福 岡 大	同 大	西 南 学 院	日 大	関 学	早 大	スナイプ個選 柳沢／山路組 29位 高橋／松枝組 46位
		総 合	同 大	日 大	早 大	甲 南 大	九 大	京 大	15位
62	琵琶湖	スナイプ	同 大	日 大	福 岡 大	中 央 大	関 学	京 大	
		470	明 大	同 大	阪 大	福 岡 大	東 北 学 院	関 東 学 院	
		総 合	同 大	明 大	日 大	福 岡 大	中 央 大	京 大	
63	広 島 ・ 宇 品	スナイプ	同 大	関 学	福 岡 大	早 大	慶 大	中 央 大	
		470	福 岡 大	同 大	関 学	早 大	中 央 大	近 畿 大	スナイプ個選 山路／柴田組 26位
		総 合	同 大	福 岡 大	関 学	早 大	中 央 大	慶 大	

ヨット部の歌

東北大学学生歌

- 一、青葉もゆるこのみちのく
 今ここに はらからわれら
 力もて歌う 平和の賛歌
 われらこそわれらこそ国の礎
 理想のある生命は常にうるわし
 さらば生きん
 友よ生きん
 ああ東北大 ああ東北大
- 二、萩のかおるこの宮城野
 今ここに 集いしわれら
 愛もて求むる真理のしるべ
 われらこそ われらこそ学都の誇り
 歴史ある伝統は常に苦し
 さらば伸びん 友よ伸びん
 ああ東北大 ああ東北大

旧制第二高等学校校歌

- 一、空は東北山高く
 水清き郷七州の
 光教えの因るところ
 庭のあしたの玲瓏の
 露に塵なし踏みゆく
 我全の朝ぼらけ
- 二、花より花に密を吸ふ
 蜂のいそしみ我励み
 不断の渇きとめがたき
 知識の泉くみとらん
 湧きたつ血汐青春の
 力山をもぬくべきを
- 三、彼と等しく享けし種
 咲きてわがせの花たらむ
 バラとにほへらんじゅの香
 土またさらばかんばしう
 第二高等学校の名に伴わん
 常久の栄



部歌の募集

金島水道を出て舟入島の沖を太平洋の
 彼方から寄せてくる岡の様なうねりに乗
 って遙か金華山の山々を眺めるとき、わ
 りが淵の奇観の水道を追手で縫って行時
 或ひは夜光虫の尾を引いて帰る夜間帆走
 に松島町の灯を眺める時スリル有り、驚
 嘆あり郷愁ありヨットならでは味わへぬ
 よろこびがあるのであります。國家地方
 警察技官のいかめしい肩書が名刺にのり
 様になった今日でも目をつぶるとなつか
 しい思ひ出が走馬燈の様に頭の中をかけ

めぐるのであります。唯未だに心残りな
 のはあれ程詩情豊かな松島に基地を置く
 わが東北大ヨット部に一曲の歌もない事
 なのです。クルージングの宵に口ずさむ
 歌は皆昔の歌でありました。それ程心に
 詩情をかき立てる松島の思ひ出を歌ふう
 たが欲しかったのであります。いや欲し
 いのであります。かくれたる詩人よまづ
 しい私達の心をゆさぶる松島の歌を作っ
 てください。（8号 渡辺明25年卒）

凱歌

- 一、肥馬むちうたせゆるかにも
敵の牙城によるは誰
秋水一度ひらめけば君は無人の境行く
戦勝てり美酒を
くみてたたへん君が御名
光涼しく月照れば
喜びに満つ五城桜
- 二、秋の最中の野の風に
乱れてふすやしこ草の
定め果てなし敵の陣
紅蓮の旗は地に伏しぬ
戦勝てり美酒を
くみてたたへん君が御名
光涼しく月照れば
喜びに満つ五城桜

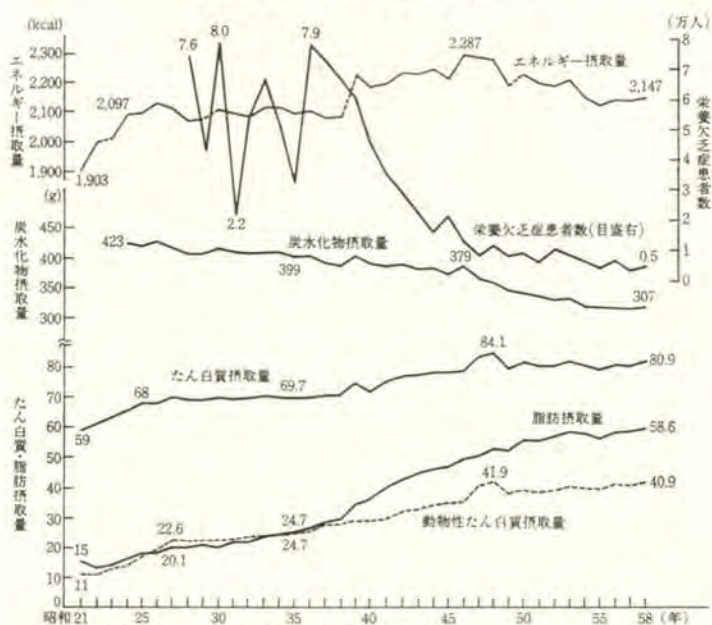
栄史の旗

- 一、青い海原 白い雲
風は招くよ 我らのヨットを
緑の旗は風にひる返り
波をけ立てて進み行く
- 二、赤い夕日に照らされて
黄金の海も笑ってる
緑の旗は我らの勝利
白いセールも鮮かに
- 三、松の都 松島は
我らの故郷 我らの庭
緑の旗は我らの誇り
ああ 栄光のヨットマン

東北旅情

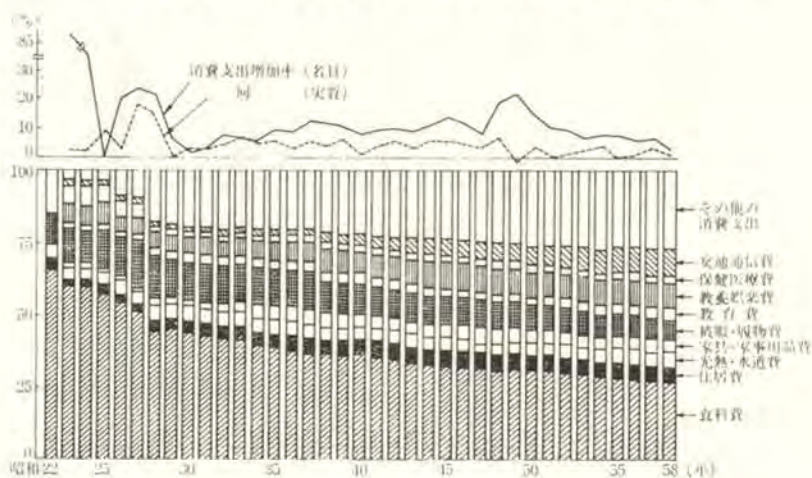
- 一、遙か彼方 緑の島よ
月は白く 波静か
我が故郷 松島の
松の木陰に 立たずめば
岩に静かに打ちよせる
波の音のみ こだまする
- 二、遙か彼方 海辺の町よ
灯寂し 人通り
思い出深き 松島の
浜辺の砂に 立たずめば
甘く優しい 潮風は
別れた人の 涙をさそう

戦後社会統計データ

*
1人1日当たりの栄養摂取量の推移

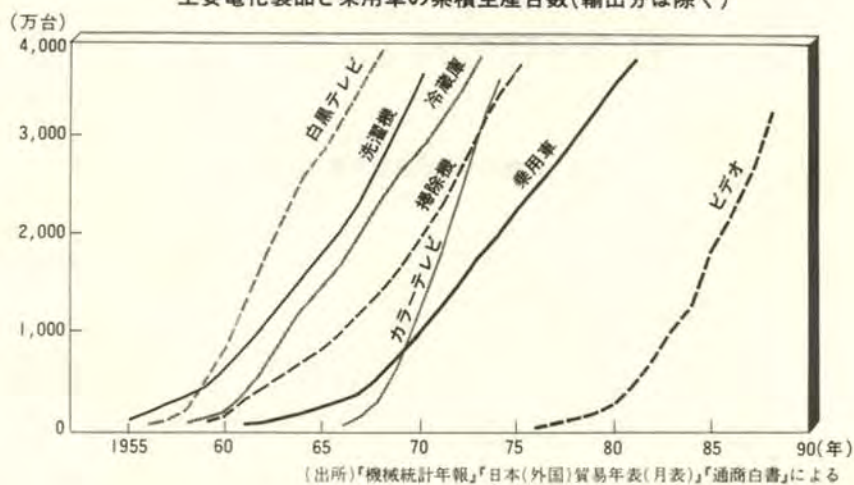
(備考) 1. 厚生省「国民栄養調査」、「患者調査」による。
2. 昭和21～23年は全国集計が行われていないので、市部、都部別の成績を算術平均した値(「国民栄養の現状(35年度)」)である。

エンゲル係数は低下を続け、消費支出は多様化してきている

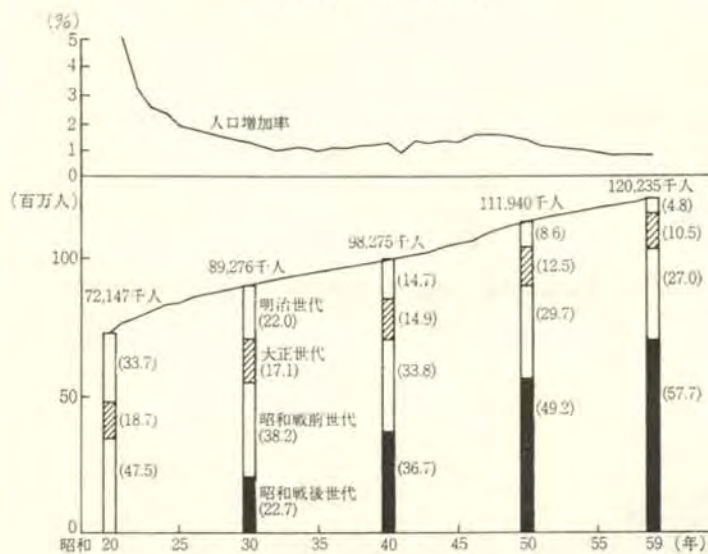


(備考) 総務庁「消費実態調査」(22～27年),「家計調査」(28～58年)による。

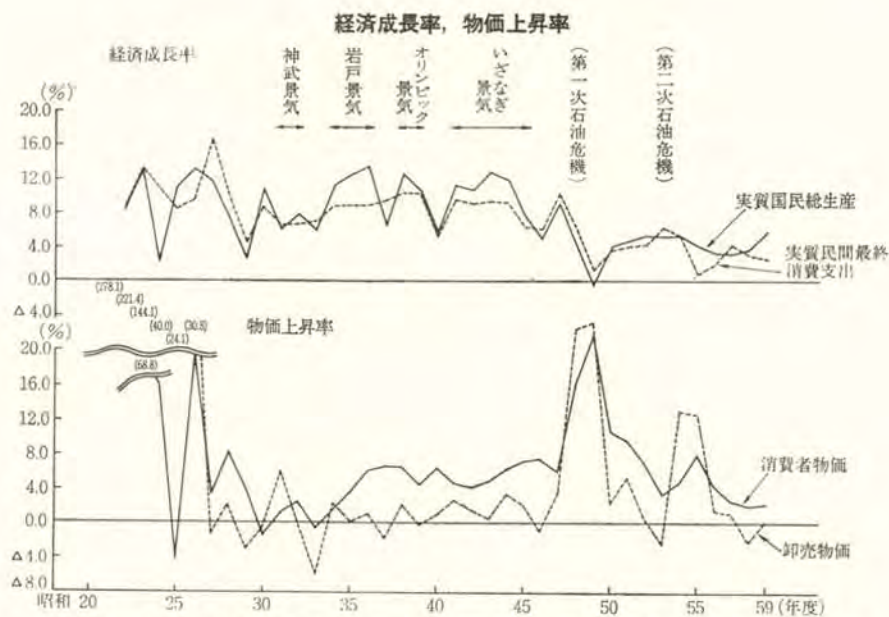
主要電化製品と乗用車の累積生産台数(輸出入は除く)



増加した人口、変わる世代

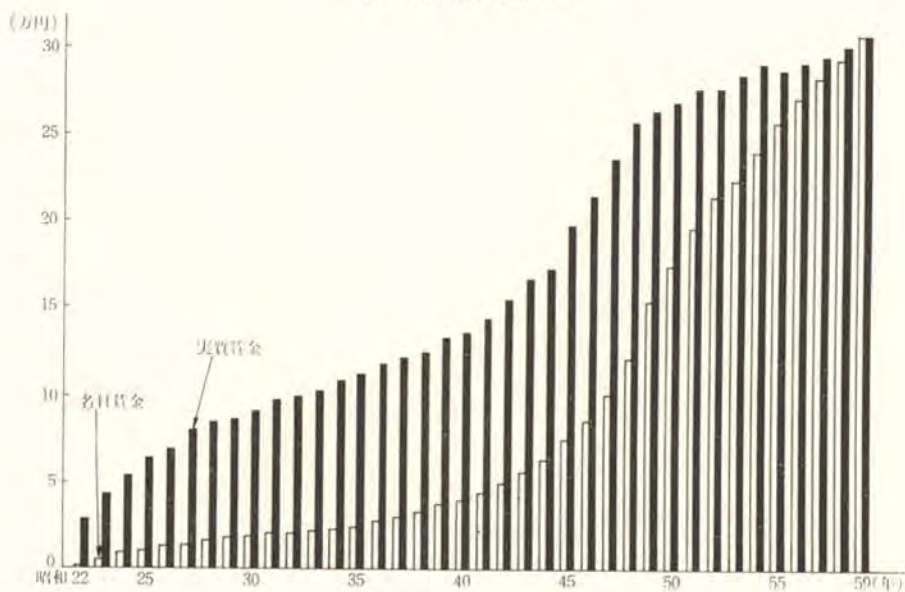


(備考) 総務庁「国勢調査」,「推計人口」による。



(備考) 実質国民総生産については、昭和26年度以前は「国民所得白書(38年版)」, 27~40年度は「国民所得統計年報」, 41年度以降は「国民経済計算年報」により、いずれも経済企画庁である。

賃金は着実に増加した



(備考) 労働省「毎月勤労統計調査」, 総務庁「消費者物価指数」による。

1820-1821

1821-1822

1822-1823

1823-1824

1824-1825

1825-1826

1826-1827

1827-1828

1828-1829

1829-1830

1830-1831

1831-1832

1832-1833

1833-1834

1834-1835

年 表

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
大正12年	日本ヨットクラブ創立 (琵琶湖)	
昭和2年	九州帝国大学ヨット部誕生	・岩波文庫刊行開始
昭和4年		4.1 初の国産ウイスキーサ ントリー白ラベル発売 (4円50銭)
昭和5年		10.24 世界恐慌
昭和6年		4.22 ロンドン軍縮条約調印
昭和7年	日本ヨット協会設立 三田ヨットクラブ誕生	9.18 満州事変 ・東北地方大凶作、娘の身売り がさかん
昭和8年	同志社大学ヨット部誕生 早稲田大学ヨット部誕生 第1回日本選手権(9月、於 品川沖) 第1回学生選手権(11月、第 7回神宮大会兼)	5.14 チャップリン来日 10月 大槻文彦「大言海」
昭和9年	大阪帝国大学ヨット部誕生	1月 ドイツ、ヒットラー政 権誕生 2.20 小林多喜二虐殺 2.24 国際連盟脱退 ・ヨーヨー大流行
		12月 日本捕鯨(株)遠洋捕 鯨開始 12.26 プロ野球チーム誕生 「株式会社大日本東京 野球倶楽部」 12.29 ワシントン条約破棄

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和10年	東京帝国大学ヨット部誕生	2月 湯川秀樹中間子論発表 美濃部達吉天皇機関説 事件 4月 第1回芥川賞、石川達 三「蒼」
昭和11年	京都帝国大学ヨット部誕生 ベルリン・オリンピック、ヨ ット競技日本初参加（8月）	1.15 ロンドン軍縮会議脱退 2.26 2. 2 6 事件 12.19 中国内戦停止、抗日統 一戦線成立
昭和12年 11月 東北帝国大学漕艇部 員の中から松島湾に ヨットを浮かべると の発案あり		7. 7 盧溝橋事件 11月 南京虐殺 ・出征兵士に贈る千人針、慰問袋
昭和13年 1月 部員募集、25名集まる 3月 日本軽量材料（株） に14尺ヨレー隻注文 （朝雲） 岡本造船所より12尺 ディンギー中古1隻 購入（八州） 5. 8 初帆走会（於桂島内海） 5.14 東北帝国大学ヨット 倶楽部結成 初代部長に高須鶴三 郎教授就任 7月 東北ヨット協会設立 岡本造船所に12尺デ ィンギー6隻注文 9.18 東北ヨット協会発会式	早大合宿参加 第1回東京大学戦 （10月、於松島）	4. 1 国家総動員法成立 4. 4 灯火管制規則公布 7. 5 東京オリンピック大会 返上決定 8. 4 乗用自動車の新規製造 中止
昭和14年 3月 東北帝国大学体育連 盟正式加盟	帝国4大学戦 （国立七大学戦前身、7月、 於福岡）	日独伊三国同盟 9月 第2次世界大戦勃発 ・男はすべて国民服

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和14年 東北帝国大学ヨット倶楽部を解散し、東北帝国大学体育連盟ヨット部となる。 4.23 東北ヨット協会、日本ヨット協会正式加盟	全日本個人戦初参加 (7月、於福岡)	
昭和15年	第11回明治神宮国民体育大会初参加(8月) 東京大学戦(11月、於横浜)	8.1 「贅沢品は敵だ！」の立て看板 9.11 隣組全戸強制加入 11.10 紀元二千六百年記念式典
昭和16年 4月 「東北帝国大学体育連盟漕艇部に組み入れられるヨット部」となる 東北ヨット協会よりヨット6隻寄付された 5月 東北帝国大学報国会国防訓練部帆走部として漕艇部より独立 「海の写真展」開催 6.22 開部式(於パークホテル前) 6.21~23 桂島での初合宿(海水館)	第1回東北選手権大会、明治神宮国民体育大会予選、 第1回海の記念日宮城県大会(7月20日、於塩釜中埠頭) 第12回明治神宮国民体育大会帆走水域対抗 (9.22~23) 小野弘智2位	4.1 米の配給開始 7.20 海の記念日制定 8月 高村光太郎「智恵子抄」 12.8 太平洋戦争開戦 12.8 気象報道禁止 ・「月火水木金」
昭和17年 6月 「海洋写真展覧会」開催 8.30 白翠創刊 白翠会発足	第13回明治神宮国民体育大会(9月)	ミッドウェー海戦 ・「産めよふやせよ」 ・「欲しがりません勝つまでは」
昭和18年 5.2 L級1隻、12尺ディンギー2隻進水(於塩釜)	白翠2号(3.5) 萩浜L巡航(5.27) 東京大学戦(9月、於松島、戦前最後のレース)	3.24 金属の非常回収 6.25 学生勤労動員開始 10.21 学徒出陣

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和19年 第2代部長に福島弘毅助教授 就任 7月 和船進水 昭和20年 8.15 太平洋戦争敗戦 9月 パークホテル進駐軍 接收 昭和21年 8.20～24 戦後第1回合宿 (於桂島) 10.1 白翠会会則制定 初代会長に福島弘毅 教授就任 昭和22年 3月 白翠4号発刊(戦後 第1号) 4.6 岡本造船所に12尺デ ィンギー4隻注文す る。 昭和23年 5.24 東北ヨット協会再建 準備委員会開催 6.5～10	白翠3号(3.3) 第1回国民体育大会、全日本 インカレ (11.1～3、於琵琶湖) 東大・京大・東北大3帝国大 学戦 (11.4、於琵琶湖) OB・現役3帝国大学戦 (6月、於横浜) 全日本インカレ、4帝国大学 戦 (8月、於博多) 第2回国民体育大会 (10月、於七尾) 北海道ヨット協会第1回定期 戦、対函館高等水産戦(8. 22～23、於函館港税関沖) 第3回国民体育大会府県対抗 (10月、於博多) ディンギー渡辺明3位 スナイプ和田・青野4位	3.4 宝塚歌劇団最終公演 10.21 神風特攻隊初出動 7.10 仙台空襲 8月 広島・長崎原爆投下 ・「りんごの歌」 ・「日米会話手帳」300万部売 れる 1.1 人間天皇の宣言 5.3 極東軍事裁判開廷 8.7 仙台七夕復活 ・闇市全盛 1.31 GHQ「2.1ゼネスト」 中止命令 4.1 国民学校を小学校と改 称「6・3制」開始 5.3 日本国憲法施行 9.30 大学名から「帝国」が 消える ・太宰治「斜陽族」 1.26 帝銀事件 5.1 美空ひばり横浜国際劇 場でデビュー 9月 「美しい暮らしの手帳」 創刊 9.18 全日本学生自治会総連 合(全学連)結成

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和24年 4.1 新制東北大学発足	全日本個選ディンギー渡辺明 3位(9月、於葉山)	4.23 ドッジライン、1\$ = 360円の単一レート 7.6 山下事件 7.15 三鷹事件 8.17 松川事件 11.3 湯川秀樹ノーベル物理 学賞受賞
昭和25年	対函館高等水産戦 (8.22~23、於松島) 仙台一高ヨット部誕生	4.22 第1回ミス日本(山本 富士子) 6.25 朝鮮戦争開始 6.28 「チャタレイ夫人の恋 人」発禁 7.24 レッドバージ
昭和26年	第1回北海道大学戦 (6.23~24、於函館) 全日本インカレ (8.3~5、於松島) 全日本スナイプ選手権 (8.18~19、於蒲郡) 加納・平野・丸島組優勝 仙台二高ヨット部誕生 東北学院大学ヨット部誕生	1.3 第1回NHK紅白歌合戦 4.11 マッカーサー罷免 9.8 対日平和条約・日米安 全保障条約調印
昭和27年 スナイプ423~426、4艇購入	第7回国民体育大会(於松島) 第1回東北ヨット個人選手 権大会(10.18~19、於松島)	3.21 本田技研「カブ号」発売 3.21 「羅生門」アカデミー 外国作品特別賞 5.1 メーデー事件
昭和28年 8.5 国立七大学戦初優勝 (於西宮)	第1回小樽商大学親睦レース (6.22、於小樽) 第1回東北インカレ(全日本 インカレ予選、於松島) 第1回対旭硝子戦(8.29~ 30、女子、於葉山) 第8回国民体育大会(於高松) 宮城県チーム総合2位	2.1 NHKテレビ放送開始、 視聴者1000人 9.15 「君の名は」封切り、 大流行 11.24 ディオール旋風、東京 でファッションショー

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和29年	全日本ヨット選手権 (10. 2～3、於松島)	2. 1 マリリン・モンロー来日 3. 14 米国ビキニ環礁で水爆 実験、第5 福竜丸被爆 4. 21 造船疑獄事件、犬飼法 務大臣指揮権発動
昭和30年	第1回京都大学戦 (5. 4～5、於松島)	7 月 石原慎太郎「太陽の季節」 10月 「エデンの東」封切り 11. 15 自由民主党結成
昭和31年		7. 17 経済白書「もはや戦後 ではない」 ・ロックンロールブーム ・テレビ売行き急上昇「一億総 白痴化」
昭和32年		5. 1 売春防止法成立 8. 27 東海村原子炉臨界点に 達する 9. 20 国産ロケット第1号発射 実験成功(秋田) 10. 1 5千円札登場 11. 13 仙台川内・苦竹キャン プ返還
昭和33年 11. 2 創立20周年記念式典 開催(於県営ヨット ハウス) 救助船「翠」進水	全日本インカレ優勝 (7. 26～29、於花瀬)	12. 1 一万円札登場 ・フラ・フープ・ブーム
昭和34年		4. 10 皇太子結婚 9. 26 伊勢湾台風 ・ミッチーブーム、テレビ 300万台 ・カミナリ族 ・「少年サンデー」「少年マガ ジン」創刊

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和35年 4月 ヨット部副部長に山本宗一教授就任		1.24 社会民主党結成、委員長西尾末広 5.24 チリ地震津波 5月 60年安保 8月 ローマオリンピック、東北大学ボート部出場 ・「3種の神器」電気冷蔵庫、マイカー、カラーテレビ ・「ダッコちゃん」ブーム
昭和36年 4月 第3代部長として山本宗一教授就任 副部長として島田平八教授就任 6.21 艇庫完成、落成祝賀会開催（於吉田浜公民館）	第6回国立七大学戦開催（於吉田浜） 第16回国民体育大会ヨット競技開催（9.14～18、於吉田浜） 東京大学、慶応大学ヨット部横浜にて遭難（10.19）	3.1 東北本線、上野・仙台間電化 4.1 国民皆保険制度発足 6.12 農業基本法公布、「三ちゃん農家」 ・ウエストサイド物語 ・上を向いて歩こう、スーダラ節 ・テレビ1000万台突破
昭和37年 東北インカレ敗退 フォン2艇（J27, 28）購入	堀江謙一太平洋単独横断（8月） 第1回インターハイ開催（於塩釜港、吉田浜）	8.30 YS11初飛行 ・青田買いの傾向強まる ・吉永小百合「キューボラのあゝる町」
昭和38年	国立七大学戦優勝（8月、於志賀島）	11.22 ケネディ大統領暗殺 ・こんにちわ赤ちゃん ・NHK大河テレビドラマ開始「花の生涯」 ・ボーリングブーム
昭和39年	東京オリンピック開催（10月）	4.25 勲章復活 8月 米国ベトナム戦争本格介入 10月 東海道新幹線開業 11.17 公明党結成 ・ワッペンブーム ・金の卵の中卒者

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和40年 4月 合宿所赤痢発生 5月 休部 ・スナイプ452進水 ベンドマスト アルミダガー ・スナイプの沈発生 ・ジブシートウィンチ ・メインシート下取り	エルプストロームの影響により、マストとブームのベンドが研究される。 サーフィング、プレーニングの技術が一般化する。	1月 授業料値上げをめぐり 慶応大学スト 4月 「ベ平連」結成 10.21 朝永振信一郎ノーベル物理学賞受賞 ・モンキーダンス ・バンティーストッキング ・007 ゴールドフィンガー
昭和41年 救助艇“翠”のエンジン換装	吉田浜の海苔浜拡大 連絡船吉田丸廃止	1～4 早稲田大学紛争 3月 人口1億人突破 4.1 メートル法完全実施 5.30 米国原子力潜水艦初寄港 6.30 ビートルズ来日 10月 週刊プレーボーイ創刊 ・ミニスカート流行 ・バラが咲いた、フォークソング時代 ・君といつまでも ・中国「文化大革命」絶頂
昭和42年 合宿所増築 スナイプ級4艇、A級1艇購入 スナイプデッキの色をハイライトの色とする	国立七大学戦優勝（於吉田浜）	3月 高見山十両昇進 4.15 美濃部東京都知事誕生 7.1 資本取引自由化 ・イタイイタイ病 ・阿賀野川水銀中毒
昭和43年 5.9 日高見進水式 11.3 創立30周年記念式典開催（於 吉田浜艇庫）	東北・全日本インカレ、クラス別制となる	5.27 日大学生「全学共闘会議」結成 8.8 初の心臓移植（札幌医大） 8.20 ソ連チェコ侵入 10.17 川端康成ノーベル文学賞受賞 12月 東京大学、東京教育大学入学試験中止決定 12.10 3億円事件 12.17 GNP世界第3位、所得世界第2位

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和43年		• ヒッピー族、ノンポリ学生 • 学生運動の市民化
昭和44年 2月 学連新艇種として470 内定		1.19 安田講堂封鎖解除 4月 文部省、紛争中国立大学の予算カット 6月 東北大学教養部事務局封鎖 7.20 アポロ11号月面着陸 11月 機動隊による東北大学教養部封鎖解除 • エコノミックアニマル • マキシスカート • 「男はつらいよ」シリーズ開始
昭和45年 新艇庫増築 東北大学体育会ヨット部部則制定 8月 日高見油壺遠征		3～9月 日本万国博覧会（大阪） 5.11 日本山岳会パーティ、エベレスト登頂 6月 70年安保 7.18 東京で光化学スモッグ発生 11.25 三島由起夫割腹自殺 • 「イージーライダー」 • カップヌードル登場
昭和46年 全日本学生ヨット連盟470採用決定		5.14 横綱大鵬引退 6.17 沖縄返還協定調印 7.1 環境庁発足 8.28 円が変動相場制へ移行 • ホットパンツ • 知床旅情
昭和47年 3月 大学紛争 4月 第4代部長に島田平八教授就任、副部長に吉田和彦教授就任		2月 第11回冬季オリンピック札幌大会 連合赤軍あさま山荘事件 3.26 高松塚古墳発見

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和47年 470購入（ヤマハJ129,J139）		9.29 日中国交回復 ・日本列島改造 ・パンダブーム
昭和48年 3月 春期陸上合宿開始（於 泉ヶ岳青年の家、昭和 53年まで実施） ・トップマスト風見 ・テルテール	国立七大学戦開催（於吉田浜） 470採用最初の全日本インカ レ（於葉山）	1.10 ロッテ球団、仙台進出 8.8 金大中折致 10.16 第一次オイルショック ・神田川
昭和49年 円通院秋合宿再開 （昭和56年まで実施） FRPスナイプ購入（奥村チ ェバスコ、21317） ・コンパス		10月 田中金脈問題 10.14 長嶋茂雄引退 ・エクソシスト ・襟裳岬
昭和50年 4月 救助船「白翠」進水 （東レ・レスキュー 21）	東京大学戦復活 （12月、於江ノ島） 宮城教育大学東北インカレ初参加	3.31 東北自動車道、岩槻、 仙台間開通 11月 スト権スト、国鉄全面 ストップ ・「死刑！」 ・港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ
昭和51年 大学・高校生を含めたオーブ ンレース主催 東北インカレ参加校増加		2.4 ロッキード事件 3.31 仙台市電50年間の営業 を終える 7.27 田中角栄逮捕 ・ローティーンの自殺
昭和52年 全日本インカレ、自艇参加決 勝方式となる。 菖蒲田沖にて練習開始 合宿所改築（食堂増設）	インカレ本大会 （8.25～28、於江ノ島）	1.4 青酸カリ入りコカ・コーラ ・宇宙戦艦ヤマト ・津軽海峡冬景色
昭和53年 3月 東京大学との春期合 宿開催（於葉山）	東北インカレ菖蒲田沖にて開 催（6月）	6.12 宮城県沖地震（M7.5） 11.21 江川騒動

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和53年 11月 創立40周年記念式典 開催（於艇庫）		・スターウォーズ ・不確実性の時代
昭和54年 レース艇全艇FRP製となる	小浜港整備(雀島港内に入る) 国立七大学戦総合第2位(7月、於琵琶湖) 全日本インカレ菖蒲田沖にて開催(8月) 470 11位 スナイプ 16位 470世界選手権日本初優勝 (於オランダ、甲斐・小宮組) 宮城教育大学ヨット部遭難 (5月)	5.27 ガソリンスタンド日曜 ・祝日全面休業 ・うさぎ小屋
昭和55年 スナイプ全艇3年2年コンビ	松島ジュニアヨットクラブ創立(5月5日) 国立七大学戦開催 (7月、於吉田浜)	11.4 王貞治引退
昭和56年		2.6 「第二臨調」発足 5.10 「連帯」ワレサ議長来日 ・神戸ポートアイランド展
昭和57年		9.17 三越騒動 11.15 上越新幹線開業 ・北酒場 ・ET
昭和58年 円通院秋合宿実施	東北・全日本インカレにゲートスタート採用 (昭和60年までの3年間実施)	1.18 中国残留孤児 5.26 日本海中部地震 6.13 戸塚ヨットスクール校長 戸塚宏逮捕 ・おしん
昭和59年		1.26 ロス疑惑

ヨット部主要事項	関 連 事 項	社会の主要出来事
昭和59年		2.12 植村直巳マッキンリー 単独登頂 3.18 グリコ事件 • エリマキトカゲ
昭和60年		
昭和61年		
昭和62年 9月 第5代部長に樋口龍 雄教授就任	日本のアメリカス・カップ参 加表明 国立七大学戦優勝 (7月、於吉田浜) Int. 14チームレース世界選手 権開催(9月、於松ヶ浜) 宮城県ヨット連盟事務所松ヶ 浜開設	1.8 東北インテリジェント コスモス構想提唱 2.9 NTT株上場 4.1 JRグループ11社発足 4.16 1人当りのGNP 18,100ドル、アメリカ を抜く 7.4 NHK衛星放送開始 10.19 ブラックマンデー • サラダ記念日 • プラトーン
昭和63年 3月 春季江ノ島合宿再開 10.9 創立50周年記念式典 開催(於吉田浜漁協 会館)		3.13 青函トンネル開業 4.10 瀬戸大橋、小島・坂出 ルート開通 8月 リクルート事件 • ラストエンペラー
平成元年 4月 副部長に前田和茂助 教授就任	470世界選手権優勝 (津、堤兄弟組)	1.7 昭和天皇逝去 1.8 新年号「平成」となる
平成2年 4.1 白翠会会則 4.29 “東北ヨット発祥の 地”記念碑建立 (松島公園内) 6.2 白翠会会長代行に 島田平八氏就任		8.2 イラク、クエート侵攻 10.3 ドイツ統一



名 簿

会長代行 島 田 平 八
 名誉会長 高 須 鶴三郎
 名誉会員 古 谷 徳兵衛
 名誉会員 勝 屋 弘 知
 名誉会員 福 島 弘 毅
 名誉会員 山 本 宗 一
 名誉会員 吉 田 和 彦
 14法 後 藤 洸
 14医 渋谷 五 郎
 14法 和 田 礼四郎
 15工 保 田 虎之助
 15工 深 尾 泰 三
 15医 貴 家 寛 而
 15理 吉 村 清
 15法 鮎 川 健 三
 15工 今 井 彦太郎
 15法 太 田 鉄太郎
 16理 条 朔 郎
 16理 中 村 正 弘
 16工 伊 関 俊三郎
 16工 加 藤 康 夫
 16工 近 藤 幹
 16工 三 原 仁 男
 16工 小 野 弘 智
 16工 矢 吹 禎 男
 16工 横 山 隆 義
 16医 小 野 一

17工 吉 田 正 男
 17工 福 田 寿 雄
 17経 中 尾 良
 17工 近 藤 勝 稔
 17経 佐々木 宏
 17工 白 石 宗 一
 17経 末 松 茂 實
 17法 横 田 好 意
 17医 磯 部 浩 策
 18医 山 上 次 郎
 18経 瀧 藤 四 郎
 18医 湯 川 直 治
 19経 江 部 貞四郎
 19法 原 田 俊 作
 19法 石 原 敬 一
 19法 小 池 鉄 男
 19経 近 藤 朝 夫
 19法 望 月 孝 夫
 19法 中 本 幹 夫
 20理 高 橋 彦 治
 20工 湯 沢 豊 城
 20医 斎 藤 二 郎
 20工 岡 薫
 21経 木 場 滋
 21医 岡 田 多摩男
 22工 宗 田 清
 22工 市 川 洋

22工 青 山 翠
 22工 原 保太郎
 22法 川 越 敬
 22工 大 友 俊 男
 22工 島 田 平 八
 23法 田 中 力 也
 23経 幾 田 重 義
 23経 桃 木 茂 夫
 23経 飯 田 博之助
 24理 青 野 朋 義
 24工 藤 代 大 夫
 24経 丸 山 充 夫
 24工 和 田 朗
 24工 米 沢 泰 三
 25医 小 野 滋 夫
 25医 伊 藤 長 宗
 25医 松 岡 哲 郎
 25医 新 島 昭 二
 25工 渡 辺 明
 25工 小 島 達 矢
 25法 小 町 幹 夫
 25工 安 藤 昭 二
 25工 大 崎 昭 三
 25工 宮城島 勝 也
 25農 関 野 清 成
 25医 安 達 寿 夫
 26経 武 田 晴 児

26工	村	山	義	郎	29教	今 ^(旧姓堀)	野	恭	子	33農	小野崎	新	平	
27工	加	納	寛	文	29工	高	橋	直	晴	33農	鎌	田	俊	二
27工	早	坂	周	市	29經	服	部	京	也	33工	杉	浦	好	彦
27工	大	原		保	30農	工	藤	英	郎	33工	渡	辺	育	郎
27工	羽	田	武	栄	30工	白	川	哲	郎	33教	多	河	敏	子
27工	垂	水	英	一	30工	大	谷	和	正	33医	今 ^(旧姓高橋)	野	豊	孝
27法	脇	坂		健	30經	近	藤	太	郎	33	佐	藤 ^(旧姓小栗川)	令	二
28工	平	野	節	夫	30經	成	田	正	義	34工	泉	谷	秀	人
28工	西	田	信	直	30教	梶	谷	敦	子	34經	林		昭	正
28工	阿	部	喜	一郎	30教	佐	藤		宏	34法	森	谷	英	一
28工	亀	井	孝	次郎	31經	高	橋	三	雄	34工	今	井	卓	雄
28工	田	山	英	世	31經	山	田	順	爾	34經	柳	沢	晃	一
28工	武	藤		晋	31文	近 ^(旧姓若生)	藤	勝	美	34經	渡	辺	義	一
28農	大	久	保	勝	31工	本	田	健	治	34法	小	川	淳	一郎
28工	相	良	公	一	31法	小	谷		昌	35農	岩	下		宏
28經	吉	宇	田	昭	31經	明	石	四	郎	35理	市	橋 ^(旧姓古川)	芳	徳
28文	赤	尾	綱	男	31法	佐	藤	洋	夫	35工	小野寺		邦	夫
28工	丸	島		博	31法	篠	田	四	郎	35工	大	谷	正	彦
28工	石	井		一	31工	山	内		敦	35工	西	村		真
28工	瀬	川	雅	夫	31經	金	子	恵	一	35農	手	島		忠
29工	河	村		功	32法	村	田	達	雄	35工	片	岡		克
29工	佐	藤	亮	三	32法	束	原		功	35理	田	中	重	明
29法	雫	石		達	32工	佐	藤		享	36農	伊	吹	万	里
29經	南	館	助	三	32工	中	村		徳	36工	安	部	倅	永
29經	氏	家		信	33農	武	藤	闊	隆	36工	赤	川	栄	司
29經	三	宅	誠	二	33農	氏	家	郁	二	36教	細	井	房	明
29教	阿	部	てい	子 ^(旧姓菊地)	33文	松	元	幸	三郎	36工	小	西	忠	雄

36工 鈴木 知二
 37工 五木田 一雄
 37工 堀江 忠寿
 37医 山村 靖
 37工 横山 晃
 37経 菅谷 一郎
 37経 宮崎 武男
 37法 吉田 達弘
 37経 山川 幹男
 37工 城子 克夫
 37工 塚越 慶治
 38農 安田 義和
 38工 堀尾 公亮
 38工 梶川 淳三
 38経 並木 剛彦
 38工 笹林 敬吾
 38法 井上 治男
 38工 近藤 紀夫
 38経 松村 孝雄
 38工 谷垣 卓
 39工 香野 俊一
 39文 板橋 征二
 39工 野口 宰
 40薬 脇坂 菊雄
 40理 土居 昭昌
 40法 平塚 儒完
 40経 荒木 武文

40工 小田 裕英
 41工 入月 一夫
 41経 伊藤 伍郎
 41工 落谷 定流
 41工 田村 実
 41法 矢島 和夫
 41工 岩本 剛
 41理 野口 泰宏
 42法 池田 迪雄
 42工 仙石 正行
 42工 後藤 正孝
 42工 富田 萬
 42理 中井 信行
 42経 増田 信彦
 42農 富田 廣
 42工 木村 貞
 42理 砂川 洵
 42工 渋谷 純一
 42工 藤田 彰
 42医 棚橋 善克
 43工 笹木 憲司
 43経 大島 正蔵
 43工 大谷 国顕
 43工 植田 征二
 43理 松岡 玄也
 43経 木村 正宏
 43経 喜地 克之

43工 豊田 宣俊
 44工 橋内 潔根
 44文 板橋 弘征
 44工 鉾谷 博行
 44工 老田 尚久
 44工 富沢 憲治
 44工 横野 邦夫
 44経 鈴木 平一郎
 45文 沢田 健
 45理 中村 栄一
 45工 大山 健二
 45理 臼井 康雄
 45工 三浦 立
 45工 千葉 信行
 46工 川村 大進
 46経 里村 健一
 46工 神藤 健一
 46工 戸塚 芳雄
 47工 石丸 徹
 47経 長谷川 仁
 47工 住 潔
 47工 越智 邦明
 47工 清水 強
 47工 園部 優
 47工 竹中 久雄
 47工 有居 東海男
 48工 赤羽 源一郎

48工	遠	藤	敏	昭	52工	中	野	順	二	56理	小	林	彦	文
48工	小	杉	達	郎	52理	鈴	木	徳	行	56農	上	野	曉	子
48工	松	山	博	幸	53工	庄	司	一	夫	57經	矢	野	圭	一
48農	松	本	真	弓	53工	田	中	啓	譽	57法	本	田		亮
48工	菊	地	義	雄	53工	下	田	準	二	57經	小	笠	原	義
49工	山	本	憲	一	53工	岩	永	丈	哉	57法	石	川	裕	士
49法	南	里	弘	之	53工	池	上	智	仁	57工	田	村	幸	生
50工	佐	藤	春	夫	53工	小	池		讓	57農	堀	木	宏	行
50工	束	原	信	男	53工	小	野	寺	正	58農	石	崎	成	樹
50工	奥	村	一	男	53工	内	山	正	敏	58經	小	林	伸	夫
50理	橋	爪	良	之	53工	勅	使	河	原	58農	武	山	則	方
50工	伊	与	田	篤	54工	羽	成	一	夫	58農	岩	田	由	佳
50理	菊	地		清	54工	小	林	隆	夫	59工	安	藤	慶	治
50工	森		治	嗣	54工	若	生	和	良	59經	河	部	克	彦
50工	鈴	木	修	一	54理	小	池	正	久	59理	江	田	裕	紀
50工	福	井	良	子	54理	飯	島	啓	央	59業	田	部	井	伸
51工	山	本	峰	生	54工	櫻	井	隆	司	59經	根	岸	伸	行
51工	迫		久	展	55工	山	口	高	男	59法	光	田	和	也
51文	村	田	孝	文	55理	宮	内	福	雄	60文	黒	田	雄	二
51工	猪	野	寿	男	55法	中	野		卓	60工	菅	原	憲	人
51工	吉	清	恭	一	55工	本	宮		光	60工	佐	々	木	芳
51工	望	月		晃	55法	久	永		均	60經	佐	藤		亘
51法	瀬	下	宏	明	55理	高	橋	宏	文	60文	富	樫	美	加
51工	瀬	古	日出	男	55法	長	谷	川	誠	60教	中	谷	恭	子
51工	寺	田	忠	厚	55工	栗	原	文	子	60教	高	島	美	奈
52法	鈴	木	郁	男	56工	河	野	一	郎	61法	鈴	木	英	明
52工	荒	井	秀	明	56經	柴	田	邦	一	61經	八	巻		寛

61薬 高 田 芳 宏

62歯 高 橋 功

62経 和 気 邦 好

62工 深 津 敦

62農 大 畑 誠一郎

62工 敷 田 亜 樹

62工 江 口 達 雄

63歯 柳 沢 一 郎

63工 高 嶋 由起雄

63経 八 木 秀 明

63工 重 枝 伸 之

63工 檜 枝 護 重

1工 大 滝 克 美

1工 松 本 尚 史

1工 三 橋 賢 治

1工 山 路 浩 之

2経 柴 田 真 一

2工 井 上 敬 介

2経 遠 藤 睦

2工 箱 崎 智 則

3工 佐 藤 浩 章

3工 枅 沢 努

3工 音 洋 行

3工 米 山 健 吾

3工 今 井 正 樹

3農 角 田 毅

平成3年度
東北大ヨット部部員名簿

部 長 樋 口 龍 雄

副 部 長 前 田 和 茂

監 督 庄 司 一 夫

コ ー チ 柳 沢 一 郎

コ ー チ 佐 藤 浩 章

コ ー チ 今 井 正 樹

主 将 日 松 一 雄

副 主 将 文 屋 雅 之

主 務 安 部 智 晴

会 計 井 上 靖 雄

学 連 生 田 直 紀

矢 島 宏 直

加 原 和 明

渡 辺 稔

兵 藤 孝 次

永 原 聖

副 務 深 沢 直 樹

大 湊 雅 也

岡 崎 真一郎

金 子 賢 治

川 村 賢 二

久 野 泰 治

坂 本 真 一

野 田 貴 裕

福 島 想

●編集後記

東北大学ヨット部五十周年記念行事の仕上げとして、五十周年史を刊行することができました。

当初は、記念式典開催の年にお届けする予定でありましたが、OB諸氏が所有されている貴重な資料、そして40号まで発行されているヨット部誌「白翠」を紐解き、五十年に亘る歴史に触れるにしたがい、ヨット部の活動をそれぞれの時代文脈によって読み込む誘惑に駆られ、時間を費やすこととなってしまいました。

それは、東北大学ヨット部が東北水域におけるヨットの発展に果たした歴史的な意義・役割を、各資料や関係者の証言（座談会やインタビュー）によって浮き彫りにし、これらの流れを縦糸とするならば、ヨット部員の海への憧れ、そしてクラブ活動における生き生きとした姿を横糸とすることによって五十年に亘るヨット部活動の全貌を表すという誘惑でした。

この無謀とも思える企てを実現すべく編集委員一同知恵を絞り編集に当たりましたが、成功したかどうかの判断は関係者各位そして先輩諸氏にお願いしたいと思います。

五十年史の編纂を終えるに当たりヨット部の五十年の歴史を支えたものを一言で表わせば、“贅沢さの追求”だったのではないのでしょうか。東北に最初にヨットを浮かべ、戦中戦後の混乱の最中にヨットに遊び、さらに全国大会の招致などをとおして東北ヨットの拠点を作り上げるなど、その根底にあるものは真に“新しい価値への飽くなき追求”でありました。

世界に冠たる経済大国ではあるが“豊かさを実感できない日本”と言われてから久しくなりますが、贅沢の本質とは、自らが価値を創造することでありましょう。自然の中に遊び自然の豊かさを体験することは、新たな価値を生み出す源として重要性を増して行くようです。

「西洋の知」と「東洋の知」の融合の可能性が追求されるなど、科学・芸術・政治・宗教など様々な領域において世界史的な視点による新たな価値の追求と創造が活発化しております。このような大きな時代の変革点において、若者に対して取り巻く社会に対して新たな刺激を絶えず発し、真の贅沢を体現し続ける組織体として東北大学ヨット部を再認識するとともに再解釈を求められる時代を迎えているのではないのでしょうか。

貴重な資料や写真を提供していただくとともに忙しい中インタビューに応じていただいた皆様、そして2年の長きに亘り週末の編集作業に会議室を貸して下さいました住友建設東北支社様など多くの方々のご協力によって、五十年史を皆様のもとにお届けすることが出来ました。関係者各位のご協力に対して、心より感謝申し上げます。

（五十年史編集委員）

赤 尾 綱 男	後 藤 正 孝	棚 橋 善 克
加 納 寛 文	庄 司 一 夫	勅使河原 栄幸
菊 地 清	高 橋 宏 文	中 村 栄 一
香 野 俊 一	高 橋 三 雄	宮 内 福 雄

白翠 — 東北大学ヨット部五十年史 —

平成3年5月発行

発行 東北大学学友会ヨット部
白翠会

編集 東北大学ヨット部五十年史編集委員会

印刷 川嶋印刷株式会社
一関市字上大槻街4-7

(非売品)

ときめきのミッドナイトエクスプレス



東北
首都圏をノン
新しい

京急高速バス
毎日運行



品川ー弘前【ノクターン】

品川バスターミナル22:00発 9,700円
弘前バスターミナル22:00発

品川ー宮古【ビーム1】

品川バスターミナル21:00発 9,000円
宮古駅前21:00発

横浜ー弘前【ノクターン】

横浜駅東口バスターミナル21:30発 10,230円
弘前バスターミナル22:00発

東京ー青森【ラフォーレ】

東京駅八重洲南口21:30発 10,000円
青森駅前21:30発

(料金は大人片道・小人半額)



日本各地へ——都市間を結ぶ高速バス

品川発(品川バスターミナル)

伊賀上野・名張行【いか】

品川22:30発 名張7:15着 7,700円

鳥取行【キャメル】

品川20:30発 鳥取7:00着 10,000円

米子行【キャメル】

品川19:30発 米子7:00着 11,000円

鳴門・徳島行【エディ】

品川21:30発 徳島8:10着 9,900円

新居浜・西条・今治行【バイレーツ】

品川19:00発 今治8:00着 11,000円

津山・岡山・倉敷行【ルブラン】

品川発20:45発 倉敷7:45着 10,200円

横浜発(横浜駅東口バスターミナル)

名古屋行【ラメール】

横浜23:30発 名古屋6:00着 5,650円

阪神甲子園・神戸行【アンカー】

横浜22:30発 神戸6:00着 8,200円



(料金は大人片道・小人半額)

■お問い合わせ・ご予約は

京急バス東京座席センター

☎03-743-0022-0222-4444

京急バス横浜座席センター

☎045-453-0489

乗車券の発売は、京急観光各案内所、京急バス各営業所、JTB、日本旅行、近畿日本ツーリストなど、主な旅行代理店にて1ヶ月前より発売しています。

めざす未来へ——ふれあい京急





都心の地下2,000m から湧き出た天然温泉を利用した13種類のバラエティあふれる浴槽（パーデゾーン）を中心に、先進トレーニングマシンやプール＆サントナーコーナー。さらにビデオシアター、ボディソニックなどによるトータルなリラクゼーションゾーン。ひとりひとりに合った入浴・トレーニングプログラムにより、こころとからだをリフレッシュし、快適さあふれるクアハウスリゾート施設です。

※ プールご利用のお客様は水着をご持参ください。

- 営業時間 平 日 11:00～22:00
土・日・祭日 10:00～22:00
- 入 泉 料 大人2,200円 小人1,100円

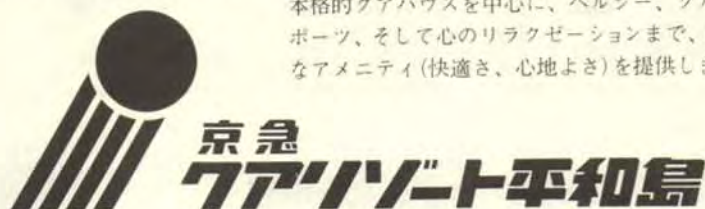
平和島クアハウス Tel. 03-768-9121



- JR 大森駅東口よりバス5分 ● 京急大森海岸駅よりバス3分 ● 京急平和島駅よりバス3分、徒歩10分 ● 高速1号羽田線平和島ランプより3分（専用駐車場完備）

レジャーランド平和島 〒143 東京都大田区平和島1-1-1
TEL. 03-768-9111（大代表）

本格的クアハウスを中心に、ヘルシー、グルメ、スポーツ、そして心のリラクゼーションまで、トータルなアメニティ（快適さ、心地よさ）を提供します。



2F 平和島クアハウス 3F 平和島大飯店 ● 和食処「写楽」 4F 平和島スターボウル ▶ 平和島ゴルフ ▶ レストラン・イル・ボンテ

新しい住環境を創造する京急不動産。



当社は、京浜急行沿線の新都市開発を推進する、京急グループの中核企業です。自然と街と暮らしが調和した、総合的な住環境の創造をめざして——京急不動産はいま、時代を先取りする環境クリエイターの道を歩んでいます。



京急不動産株式会社 専務取締役 門倉 幸雄

〒108 東京都港区高輪2-21-28 ☎03-449-6911

(昭和31年経済学部卒)

ヨーロピアンエレガンス

リッチな味とムードのレストラン



ベルフォート RESTAURANT BELFORT

白翠会 定例会場

泉岳寺駅下車
京急本社ビル1F ☎03-440-0140





やさしい気分が満ちてくる。

高輪の静寂と美しい緑につつまれた都心のリゾート、ホテルパシフィックは皆さまの幅広いご活躍に多彩な設備とゆき届いたサービスでお応えする国際ホテルです。交通至便な品川駅正面で、羽田空港からはお車で15分。都心のオフィス街へも至近距離です。四季おりおりの日本庭園や、旬の味覚でおもてなしするレストラン・バーでの贅沢なひとときは、旅の途中の一流の清涼剤。プライベートにビジネスに、ごゆっくりおくつろぎいただけます。

ホテルパシフィック

メリディアン東京

〒108 東京都港区高輪3-13-3 (品川駅正面)

☎ (03) 445-6711



アロカは、21世紀を見つめています。

社会環境の変化とともに、いちだんと重要性を求められている医療の役割。こうした時代を背景に、アロカは医療機器を通して医療の高度化と、多様化するニーズに応えてまいりました。画像診断の主流としてますます検査領域が拡大している超音波診断装置のほか、核医学装置、検体検査装置そして治療、手術装置など、高性能化と信頼性の向上を徹底的に追及したアロカの製品群は、国内はもとより海外でも好評を得ております。また、原子力発電をはじめ、医療、生化学、薬学などの広い分野で計測、分析に使用されているアロカの放射線測定装置は、研究や検査にと重要な役割を果たしています。さらに放射線計測の分野でも、バイオニアとしてエネルギーとアイソトープ利用の発展に大きく貢献してまいりました。これからもアロカは、“サイエンス&ヒューマニティ”をテーマに、医療とエネルギーの未来に向けて、積極的に取り組んでまいります。

Aloka アロカ株式会社

〒181 東京都三鷹市早礼6丁目22番1号

仙台支店 〒980 仙台市国分町3丁目9番8号 田山ビル

☎ (022) 262-7181



熊谷組

取締役社長 熊谷 太一郎

東北支店長 八 木 幹 二

本 社 〒162 東京都新宿区津久戸町2-1 TEL 03(3260)2111

東北支店 〒980 仙台市青葉区立町26番20号 TEL 022(262)2811



Japanese Businessman



医薬品 薬局・薬店でプリーズ。

リゲイン®
Regain

ビオタミン配合、肉体疲労時の 栄養補給に
24 時 間、戦 え ま す か。

第2次会員好評募集中!!

クルーザーは高額で、しかもメンテが大変。
所有よりも「会員」システムの方が断然有利!!
ベテランクルーの操船で《ゆとりのレジャー》を。

見逃せない会員特典

①船の使用料は原則無料（クルー代・ガソリン代実費）②釣道具レンタルセット無料③クラブハウス使用料無料（シャワールーム・ロッカールーム他）④今後の展開する施設はすべて共通使用できます。⑤他提携クラブ割引利用できます。⑥桂島のペンション鬼ヶ浜等20%割引で利用できます。⑦レンタル利用可



午前中ビジネス・午後海上

職・遊・同時/



SEA
株式会社三

会員募集のお問い合わせは—
本社/〒983 仙台市宮城野区扇町5丁目8番10号
☎022-239-3141



仙台より車で20分。クラブ
ハウス2階はレストランで
す。毎週水曜日定休日。



シーサイド・クラブ松島
〒985 塩釜市新浜町3丁目1番55号
☎022-366-7200

HEART & TECHNOLOGY

技術は人の友だちです。

人と自然、人と情報、人と技術…
さまざまな関係のあり方に
変化の訪れる世紀、21世紀。
住友建設は、先進技術で
しなやか空間づくりをめざします。



住友建設株式會社

本 社：東京都新宿区荒木町13-4 〒160 TEL 03(353)5111
東北支店：仙台市青葉区春日町9番15号 〒980 TEL 022(225)6761



ネクタイが
曲がっていても
気持ちが
まっすぐな人
応援します

仙台放送

創立50周年おめでとうございます

白翠会のますますのご発展をお祈り申し上げます

大和半導體装置株式會社

神奈川県大和市上和田1044番地4

大和半導體装置株式會社
代表取締役社長 **佐藤亮三**

(昭和29年工学部卒)

自然のめぐみを最先端の技術で活かす ― ツムラ漢方製剤エキス顆粒(医療用)

ツムラは、ツムラ漢方製剤エキス顆粒(医療用)により、
高齢化社会の深まりつつある現実の治療に貢献しつつ、
漢方製剤の科学的な実証を通じて、21世紀に至る長寿社会の
治療手段としての役割をはたしていきたいと願っております。



祝 東北大学ヨット部50周年 株式会社美光堂

本 社: 仙台市青葉区五橋二丁目1-3 〒980
TEL.022-266-4161 FAX.022-224-6090

プラネクス株式会社国際現像所

本 社: 仙台市若林区大和町5-29-26 〒983
TEL.022-235-4131代 FAX.022-239-9247



Mead Johnson, Inc.

便利さが
大きくなりました。



アイソトニック液状栄養食
500kcal 500ml

MeadJohnson®

フリストル・マイヤース スクイブ株式会社



アイソカルの特長

調製不要で、さらにすぐれた簡便性を追及

●調製の手間が省け、しかも殺菌済みです。 ●200mlまたは500mlを必要に応じて簡便に使用できます。

下痢を防ぐための身体への思いやり

●浸透圧性の下痢を防ぐために、浸透圧は体液とほぼ等張に調整されています。(250mOsm/ℓ) ●乳糖を含んでいないため、乳糖不耐症の方にも使用できます。

体力回復のための栄養上の配慮

●たん白質は良質な動物性のカゼインと植物性的大豆たん白から構成され、ビタミン・ミネラルも多く含んでいます。 ●脂質は、スピーディにエネルギーとして活用される分留ココナツ油(MCT)と、必須脂肪酸が豊富なコーン油(LCT)から構成されています。

飲みやすく、飽きのこない味・香り

●長期に連用する方、食欲が落ちている方にも飲みやすくなっています。 ●流動性にすぐれ、のどが滑らかです。

味にうるさく、人にやさしい。



アイソトニック液状栄養食200ml・500ml

アイソカル®

MeadJohnson®



資料請求先

フリストル・マイヤース スクイブ株式会社

学術情報部

〒150 東京都渋谷区渋谷2-12-19

RTU-AD-B6-3

Eisai
エーサイ

疲れに
Eじゃないか。

エブロンゴールド

天然型ビタミンE100%配合(国産品) 100%配合(国産品)

この1錠の充実。ありがとう健康!

ビタミンA
ビタミンB群
ビタミンC
ビタミンD
ビタミンE
カルシウム



60錠、120錠、240錠

肉体疲労時・小児の発育期・偏食児などの栄養補給、
滋養強化にオススメです。 8-リ録商標

ビタミン・カルシウム配合保健剤

新ポボンS錠



シオノギ製薬

大阪市東区東船場1-1-1

91-4-B54

北欧の名艇をあなたに

海を知りつくした人に愛される究極のセーリングクルーザー

NAJAD
(スウェーデン)

JONMERI
(フィンランド)

お問い合わせは

朝日海洋



株式会社 朝日海洋 本社

〒141 東京都品川区西五反田7-13-6 SDI五反田ビル
TEL: 03-5487-8920 (直通) FAX: 03-5487-8903

AGC
ASAHI GLASS COMPANY

「技」の掛け算

異なる技術領域から常に刺激を与えること、それが旭硝子の「技術の掛け算」の基本です。

人と技術の成果を促す
旭硝子株式会社

(〒100 東京都千代田区丸の内1-7-1 TEL: 03-3281-5100)



「複合」という言葉が、旭硝子ではよく使われている。複合技術という概念が、複合技術といふのは、ふつう、技術の足し算のイメージが、当社は、これが、掛け算をあらわすのです。当社は、現在、世界第三位の板ガラスメーカーです。私たちが蓄積した技術は「ガラス」「セラミックス」「ケミカル」という二分野に大いなる躍進をもたらしました。さらにこれらの異なる技術を掛け合わせ、いまではバイオ、エレクトロニクスなど、世界にも類をみない多種多様な技術領域のすそ野をもつに至っています。「創造」と「協創」の旭硝子を支えるものは、さまざまな「技」とその掛け合わせであり、それらが限りなく融合と創造を促していくのです。

Asahi
LIVE ASAHI FOR LIVE PEOPLE

この味が、
ビールの流れを変えた。

アサヒスーパードライ



価格はふつうのビールと同じです。

飲むほどに DRY
辛口、生。



非ペプチド 蛋白分解酵素阻害剤



蛋白分解酵素阻害剤

薬価基準収載

注射用 **エフオーワイ**

- 効能・効果/①蛋白分解酵素(トリプシン、カリクレイン、プラスミン等)逸脱を伴う下記疾患。急性肝炎、慢性再発性肝炎の急性増悪期、術後の急性肝炎。
- ②汎発性血管内血液凝固症。

成分・分量、用法・用量、使用上の注意等は添付文書を御参照ください。



小野薬品工業株式会社

〒541 大阪市中央区道頓堀2丁目1番5号

890807

スモール・ビューティ。

超小型・超軽量・超美形。オリンパス・ミュウ新登場

世界最軽量 170g

ミュウ
3月31日
発売



- ポケットにスッポリ通面型デザイン。
- 100ステップの高精度AF。
- 35mmまで近寄って撮れるオートマクロ機構。
- フレームが消えた、実像式ファインダー。
- 多彩なフラッシュモード、瞳が赤く写る現象を軽減。プレ発光フラッシュなど。
- その他全てがフルオート。

性能の美しい凝縮形・オリンパス・ミュウ

μ [mju:]

COMPACTING BOTH PERFORMANCE AND BEAUTY.

AHEAD OF THE OTHERS IN SMALL TECHNOLOGY.

希望小売価格(税別)¥37,000(ソフトケース・ストラップ付)

※35mmフルサイズのフルオートコンパクトカメラ中、世界最軽量



言い出せなくて。

意外におおぜいの人が尿失禁に悩んでいます。

でも、尿がもれてしまうなんて、

恥かしくてなかなか相談しにくいものです。

【効能・効果】

下記疾患に伴う頻尿、尿失禁

神経因性膀胱、神経性頻尿、慢性膀胱炎、慢性前立腺炎

頻尿・尿失禁治療剤

ミクトロール錠 12mg 24mg

MICTROL® Tab. (一社製 塩酸ミクトロール)

キッセイ薬品工業株式会社

松本市芳野19番48号

カピワットラムAB(スウェーデン)産機

※用法・用量、上記以外の使用上の注意等の詳細は、製品添付文書をご参照ください。

新しい時代の医療システムを追求する



共立医療電機株式会社

仙台営業所 所長 谷地 正孝

仙台市青葉区二日町6番14号 TEL022(221)6576(代)

本社 東京都渋谷区元代々木町31 TEL03(3469)2251(代)



胃炎/

胃・十二指腸潰瘍に

Potential difference を保持する。

住友製薬

組織修復性
胃炎、胃・十二指腸潰瘍 治療剤

薬価基準収載

ゲファニール®

カプセル、カプセル100、細粒、ソフトカプセル50、ソフトカプセル100

■効能・効果、用法・用量、使用上の注意、取扱い上の注意等は添付文書をご覧ください

製造発売元

住友製薬株式会社

〒541 大阪市中央区道修町2丁目2番8号

のびて、つきがよく、ソフトな香り

いのち、ふくらまそう。

第一製薬

ArnicaのAが、パテックスのA。

- アルニカエキスを新配合。すぐれた消炎・鎮痛効果を発揮するパップ剤です。
- 貼着性と伸展性にすぐれ、肌にぴったりとフィットします。
- ソフトな香りで保水性がよく、ききめが長続きます。
- 温・湿度の変化に強く、夏も冬も爽やかな肌ざわりです。



魔人V、
来日。

AV22



ちんちん
ナイフ、たいじょふい



タケダのヴァイタミンドリンク



武田薬品工業株式会社ヘルスケア事業部
〒103東京都中央区日本橋2-12-10

ニュー・ピリドンカルボン酸系経口抗菌剤

グラム陽性菌・陰性菌による

呼吸器・泌尿器・皮膚・胆道・腸管感染症、耳鼻科領域感染症に……

■効能・効果

ブドウ球菌属、化膿レンサ球菌、溶血レンサ球菌、腸球菌、淋菌、大腸菌、シトロバクター属、シゲラ属、クレブシエラ属、エンテロバクター属、セラチア属、プロテウス属、腸炎ビブリオ、緑膿菌、シェドモナス・マルトフィリア、シェドモナス・セバシア、インフルエンザ菌、アシネトバクター属、カンピロバクター属のうち本剤感受性菌による下記感染症

●咽頭炎、扁桃炎(扁桃周囲炎、扁桃周囲膿瘍) ●急性気管支炎、慢性気管支炎、気管支拡張症(感染時)、びまん性汎細気管支炎、肺炎、肺化膿症、慢性呼吸器疾患の二次感染 ●腎盂腎炎、膀胱炎、淋菌性尿道炎、前立腺炎 ●毛のう(包)炎(膿瘍性皮膚炎を含む)、癰、癰腫症、よう、伝染性膿瘍(膿瘍性湿疹を含む)、丹毒、蜂巣炎、リンパ管(筋)炎、瘻道、皮下膿瘍、感染性粉瘤 ●外傷・熱傷・手術創などの表在性二次感染 ●胆のう炎、胆管炎 ●細菌性赤痢、腸(大腸)炎 ●外耳炎、中耳炎、副鼻腔炎

■薬価基準収載

※用法・用量、使用上の注意等は添付文書をご参照ください。

広範囲抗菌性化学療法剤

フルマーク®

FLUMARK®

フルマーク錠100mg

フルマーク錠200mg

ENX

(エネキサシン錠)



大日本製薬

〒541 大阪市中央区道修町2-6-6

F-2

あなたにいちばん近い 東北生まれのエネルギー



東北石油株式会社

仙台市宮城野区港5-1-1



三菱石油 が、私たちのパートナーです。



アミノ糖系抗生物質製剤

エクサシン[®]注射液

(日抗基・硫酸イセパマイシン注射液)

TOYO JOZO CO.,LTD.

生命の未来を考え医薬の明日を創造する

富山化学工業株式会社

本社 〒160 東京都新宿区西新宿3-2-5 Tel.03(3348)6611

Sharp, wide and synergistic



抗悪性腫瘍剤 シスプラチン注射液

ランダ[®]注

効能・効果 ● 睾丸腫瘍 ● 膀胱癌 ● 腎盂・尿管腫瘍 ● 前立腺癌 ● 卵巣癌
● 頭頸部癌 ● 非小細胞肺癌 ● 食道癌 ● 子宮頸癌
● 神経芽細胞腫 ● 胃癌

※用法・用量、使用上の注意など詳細は
添付文書をご参照下さい。

資料請求先



日本化薬株式会社

東京都千代田区富士見一丁目11番2号(東京富士ビル)

健保適用

1日1回投与が可能

防御因子増強型 胃潰瘍治療剤として初めて――



粘膜防御性胃潰瘍治療剤

ガスロン[®]錠2mg・4mg 細粒0.8%

マレイン酸イルソグラジン製剤

【イルソグラジン製剤】

初めてのベンゾジアゼピン骨格を有する胃潰瘍治療剤――イルソグラジン製剤です。

(1日1～2回投与)

防御因子増強型の胃潰瘍治療剤としては初めて1日1回投与が可能となり、

コンプライアンスの向上が期待できます

【上皮細胞間の接合強化】

胃粘膜の上皮細胞間接合を強化することにより、細胞防御作用を示します。

【効能・効果】胃潰瘍

健保適用

【用法・用量】通常、成人マレイン酸イルソグラジンとして、

1日4mg(ガスロン錠4mg:1錠、ガスロン錠2mg:2錠、ガスロン細粒0.8%:0.5g)

を1～2回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

使用上の注意

①副作用

- ①消化器ノミに便秘、下痢、嘔気・嘔吐の症状があらわれることがある
- ②肝臓ノミにGOT、GPT、ALT、LDH値が軽度上昇することがある
- ③皮膚ノミに発疹があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。
- ④その他ノミに胸部圧迫感があることがある。
- ⑤妊婦への投与/妊婦中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上まると判断される場合にのみ投与すること。
- ⑥小児への投与/小児に対する安全性は確立していない(使用経験が少ない)。
- ⑦その他ノミに健康人における本薬の血漿中からの消失半減期は約150時間である。

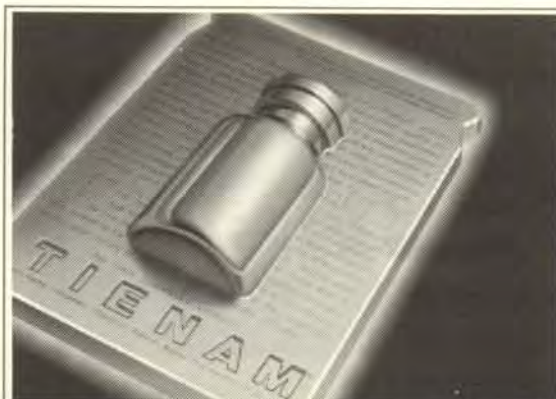


日本新薬

資料請求先

日本新薬株式会社 学術部

〒650 大阪市東区西久保4番7-1



歴史を刻む信頼の輝き

世界初のカルバペネム系抗生物質製剤

チエナム® (Imipenem/Cilastatin sodium) 点滴用 イミペネムの別号 IPM

※「効能・効果」、「用法・用量」、「使用上の注意」等の詳細については製品添付文書などをご覧ください。



萬有製薬株式会社

〒103 東京都中央区日本橋本町2-2-3 03(3270)7551(代表)
09-91TEN90-J-049J

祝 東北大学ヨット部50周年

— 技術の日立 —

医療のニーズに、日立は総合力でお応えします。

株式会社日立メディコ 東北営業所

所長 川崎 和政

〒980 仙台市青葉区中央三丁目2番1号(清水ビル7F)

TEL. 022-221-6311(代)

幸せはひとりひとりの健康から



科学を世界の向上のために、
ファイザー製薬は
医薬品・動物用薬品・農薬・
医療用具を通じて
健康な暮らしに貢献します。

ファイザー製薬株式会社
東京都新宿区西新宿2-1-1 〒163

のびのび!
密着フィット!

打撲・ねんざ・筋肉痛に

フジパップ®エース 生薬配合

鎮痛・消炎パップ剤

f
フジサワ

手軽に、パチリ。その場でテレビに
鮮やかな静止画像を再生する富士フィルムの電子カメラ。



FUJIX
STILL VIDEO CAMERA
ES-30TW

- 40万画素CCDで1ランク上の高解像力
- 2焦点切換式(135換算36/72mm)
- オートフォーカス、オートAEなどで、シャッター押すだけの簡単操作
- テレマクロコンバーターを付けば、35cmの接写
- 秒8コマ又は15コマの連写
- 低コスト(990円)のフロッピーに50コマを録画・再生)
- 本体・充電器セット・再生器・ハードケース・テレマクロコンバーター・歯列をクローズアップするコンバーターの基本セットでメーカー希望小売価格179,800円(消費税別)

お問い合わせ先／富士写真フイルム株式会社 仙台営業所 仙台市青葉区一番町4-6-1 TEL.022-265-2121

Dual actionが差をつけた新Cephem

Multi bulge ▶ 短時間殺菌 ▶ 優れた生体内効果

特 性

1. Dual actionがMulti bulgeを形成することによる強い殺菌作用
2. 細菌の増殖期のみならず、定常期初期にも発揮される殺菌力
3. 嫌気性菌をもカバーする抗菌スペクトラム

※ 効能・効果、用法・用量、使用上の注意などの詳細は、添付文書をご覧ください。

セファマイシン系抗生物質製剤

注射用メイセリン

MEICELIN® FOR INJECTION

日抗基：注射用セフメゾクスナトリウム

明治製薬株式会社
104 東京都中央区京橋2-4-16
TEL: (03) 712-6511 (代)



山之内製薬

(急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期)

【胃炎に、潰瘍に】

H₂受容体拮抗剤(ファモチジン製剤)

ガスター

錠10・20mg
散10%
注射用20mg

Gaster

(原価収載)

※ 効能・効果、用法・用量、使用上の注意については製品に添付の説明書をご覧ください。

【資料請求先】山之内製薬株式会社 学術情報部 〒103 東京都中央区日本橋本町2-3-11

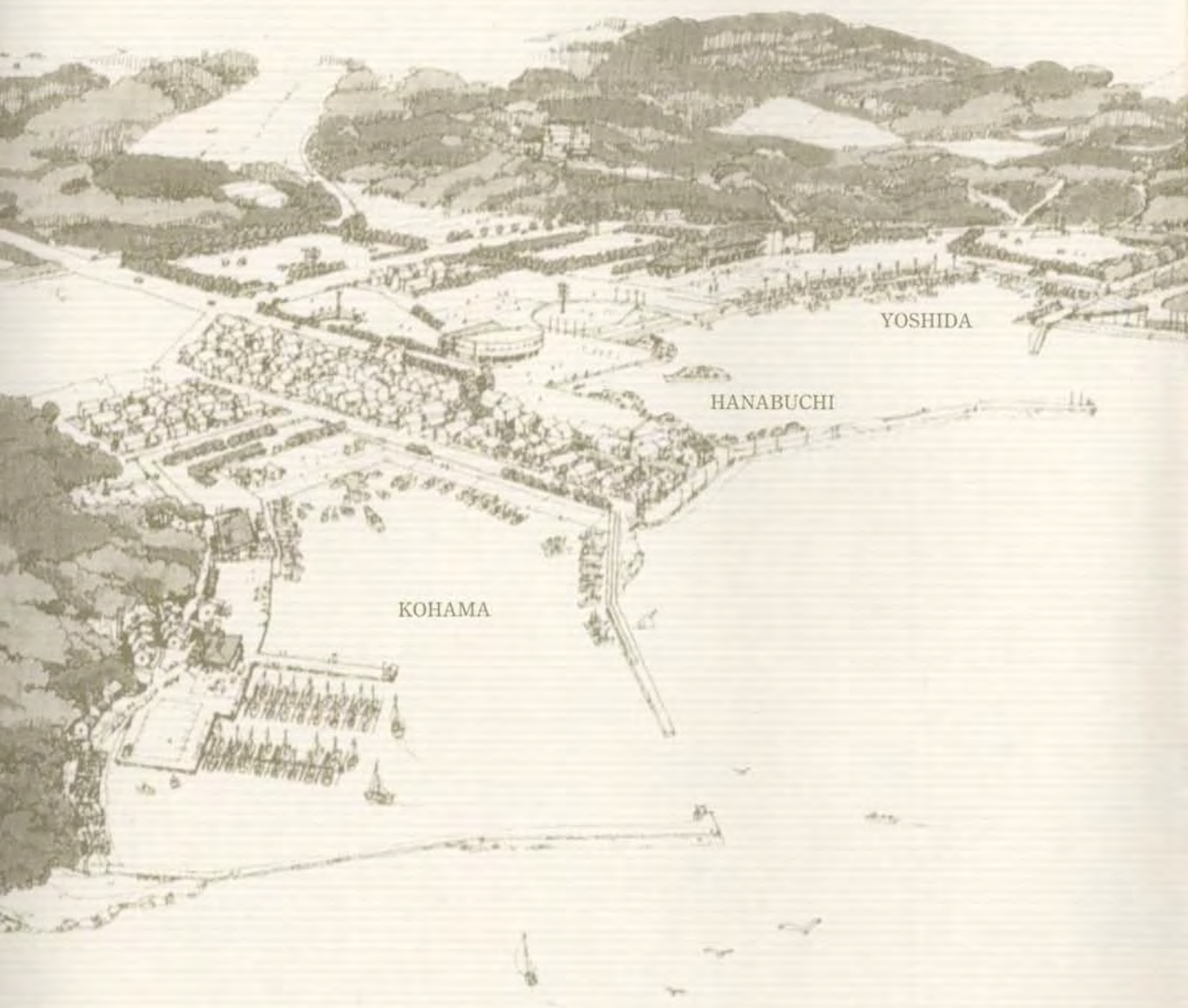


帝国臓器製薬 東京・赤坂

へ効能・唾液腺機能低下に伴う諸症(歯槽膿漏症・胃下垂症・指掌角皮症・更年期障害諸症)へ腰痛

パロチモン
へ30カプセル

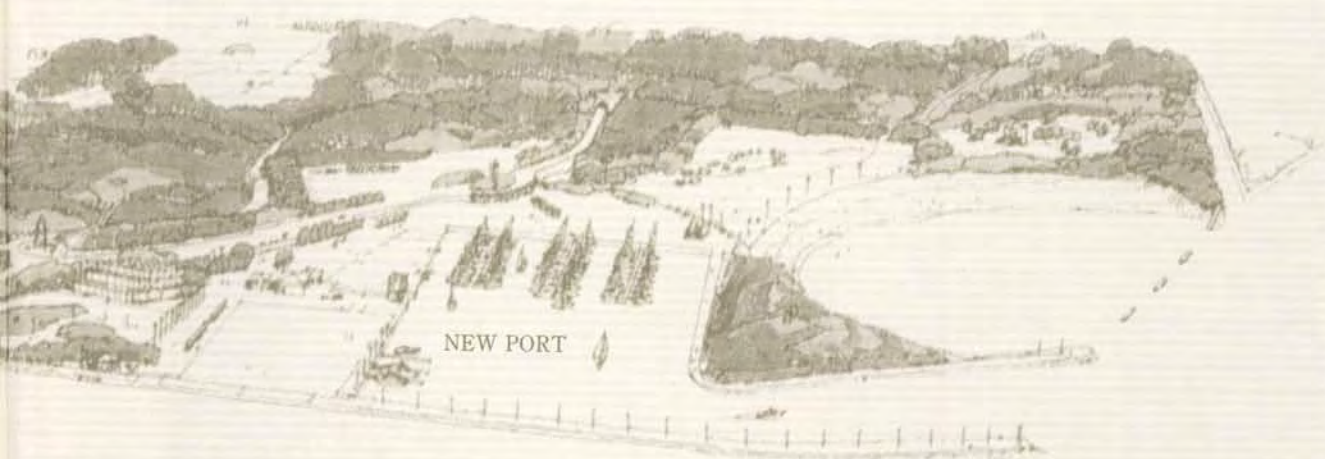




KOHAMA

HANABUCHI

YOSHIDA



Neo-Shichigahama Marine Resort Area

